

貞々?夢想

カツヲ武士

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

題名が全て。

怒られたら消します

## 目次

|      |                        |     |
|------|------------------------|-----|
| 1話。  | 未来の霸王と怒りに震える男          | 1   |
| 2話。  | 未来の霸王と怒りに震える男(裏)       | 11  |
| 3話。  | 新たなる人材                 | 20  |
| 4話。  | 司馬の武(前)                | 27  |
| 5話。  | 司馬の武(後)                | 33  |
| 6話。  | つかの間の日常                | 40  |
| 7話。  | 乱世の予兆                  | 47  |
| 8話。  | 陳留(まち)をつつむMidnight fog | 54  |
| 9話。  | 動き出す猫耳Silhouette       | 62  |
| 10話。 | それは紛れもなくヤツだった          | 69  |
| 11話。 | 許されるはずもない曹操love        | 77  |
| 12話。 | 止まない痛み                 | 85  |
| 13話。 | やせいのぞくがあらわれた           | 92  |
| 14話。 | きよちよが仲間になってくれた         | 97  |
| 15話。 | 賊の討伐で大事なことは逃がさないことである  | 103 |
| 16話。 | ぞくぞくと現れる賊              | 110 |
| 17話。 | ぞくぞくと集まる味方。味方?         | 115 |
| 18話。 | 新顔と賊の情報                | 122 |
| 19話。 | 潁川での戦の前に?              | 128 |
| 20話。 | 潁川での戦の前に②              | 136 |
| 21話。 | 潁川の戦、終了                | 145 |
| 22話。 | 出世の兆し                  | 151 |
| 23話。 | 出世の前の騒動                | 158 |
| 24話。 | 不穏な噂                   | 165 |

|    |    |         |     |
|----|----|---------|-----|
| 25 | 話。 | 思わぬ出世   | 172 |
| 26 | 話。 | 未知との遭遇① | 178 |
| 27 | 話。 | 未知との遭遇② | 184 |
| 28 | 話。 | 未知との遭遇③ | 190 |
| 29 | 話。 | 未知との遭遇④ | 197 |
| 30 | 話。 | 未知との遭遇⑤ | 202 |
| 31 | 話。 | 黄巾の終わり① | 212 |
| 32 | 話。 | 黄巾の終わり② | 218 |
| 33 | 話。 | 黄巾の終わり③ | 227 |
| 34 | 話。 | 黄巾の終わり④ | 232 |
| 35 | 話。 | 黄巾の終わり⑤ | 238 |
| 36 | 話。 | 黄巾の終わり⑥ | 244 |
| 37 | 話。 | 動乱の気配   | 250 |

# 1話。 未来の霸王と怒りに震える男

しくじった。

「ふむ。私の記憶が確かであれば、助力を求めたのは貴殿らの方だったはずだがな。もし貴殿らの陣営に男は不要というのであればこのまま引き返すが如何？」

今日このときが初対面となる男、それも身の丈一間七尺（約2メートル）を越す大男は、怒りによって歪んだその表情を隠さぬまま私にそう告げてきた。

口調はもちろんのこと、その表情からも内心で怒り狂っていることがわかる。

現在怒りのあまり表情を歪ませているこの男は、私に仕官するため、ここ陳留を訪れてきた相手だ。

故に、今の彼は雇い主となるはずの相手に対して怒りを向けていることになる。

本来であれば「無礼千万！」と叱責して然るべきところだろう。

無論、常であればそうしていた。

だが、今回はその限りではない。

「……ごめんなさい。私が無礼だったわ」

「華琳様！」

しくじった。しくじった。しくじった。

今回に限れば、頭を下げるべきは私だ。

なにせ、私から「人材を派遣して欲しい」と頼んでおきながら、その人物が派遣してきた人員の纏め役を、ただ【男】というだけで見下してしまったのだから。

そしてそれを当人に気付かれてしまったのだから。

相手はただの纏め役ではない。

こちらが頼んだ相手の息子だというのに。

なんたる失態。

怒りを向けられるのは当然で、即座に帰られないだけマシだ。

そう。最悪ではない。

故に私は急いでしなければならぬことがある。

「貴方が怒るのは当然よ。此度の無礼に対する償いは必ずするわ。だから、今回だけは謝罪を受け入れて貰えないかしら？」

謝罪、否、懇願だ。

「……っ！」

まるで媚を売るかのような口ぶりに、春蘭や秋蘭が絶句しているのがわかる。

過ちを犯した際に頭を下げるのは恥ではない。

過ちを過ちと認めず、開き直すことこそ恥なのだ。

尤も、それはあくまで私の矜持の問題であつて、今重要なのはそこではない。

私の謝罪が受け入れられるかどうか。

これに尽きる。

たとえ頭を下げる先にいる相手が男だとしても、そんなものは関係ない。

此度の非は私にあるのだから。

なればこそ私は頭を下げなければならない。

ここで意地を張ることに一分の理もなければ利も存在しない。

そうでなくとも、無礼を働いた相手に頭を下げるのは当然のこと。

それを忘れてしまえば、私は私でなくなってしまう。

「……」

私の謝罪に対する返事は、ない。

頭を下げているため表情は見えないが、怒りが収まっていないことはわかる。

それも当然だろう。

「貴様あ！ 華琳様が頭を下げていているというの……「春蘭！ 黙りなさい！」……か、華琳様？」

そも、頭を下げられたからと言って無礼を働かれた方が許さなければならぬというわけではない。

向こうには謝罪を拒否する権利がある。

しかし、その権利が使われたら私たちの陣営に未来はない。

そもそも自分から頼んでおきながら、派遣されてきた相手（それも相手の子供）を侮蔑するなど、あつてはならないことだ。

無礼どころの話ではない。

誰だつて怒る。私だつてそうだ。

しかも、相手の家の格は我々よりも上。

相手がこの事実を拡散しただけで、今後私たちの下に来てくれる人員がいなくなることは想像に難くない。

そうなれば、我々は終わる。

今はまだいい。

一つの郡程度であれば今の人員でも回せる。

でも将来的に見れば違う。

今の内から人員を育てておかなければ必ず行き詰る。

そう判断したからこそ、今の時点で私の周りにいる数少ない信用できる相手から人員を派遣して貰ったというのに、この始末。

面目を潰された相手がこのまま帰るだけでも大打撃。

悪評（事実）を広められれば取り返しがつかないことになる。

だからこそこうして頭を下げているというのに、春蘭ときたら何をしているのか。

私のために怒ってくれる気持ちは嬉しいけど、少しくらい空気を読みなさい。

というか……なんで他人事みたいな顔をしているのよ。

「春蘭、貴女も謝罪しなさい」

「華琳様!？」

華琳様、じゃないわよ。

現在進行形で無礼を働いている春蘭こそ頭を下げなければいけないでしょうに。

ただ、春蘭の気持ちもわかる。

春蘭ほどの武人にとって図体が大きなだけの男に頭を下げるのは耐え難い屈辱だということは理解している。

でも、その屈辱に耐えてこそこの謝罪は打算だけではなく、誠意が籠った謝罪になる。

今はその誠意が何よりも必要なの。  
お願いだからわかって。

「……姉者」

「っ。 わかっているー!」

秋蘭。ありがとう。

今夜は三人で寝ましようね。

……謝罪の途中でそんなことを考えたのが悪かった。

「曹太守。 謝罪中に相手から意識を割くのは頂けませんな」

「「っー!」」

読まれた!?

「正面に居る貴殿の意識が散漫となっていてはもとより、夏侯惇殿が嫌々頭を下げようとしているのも分かるし、夏侯淵殿も貴殿が私に対して頭を下げていることに不快感を抱いていることは分かる。心の伴わぬ謝罪は謝罪ではありませんぞ」

「……」

返す言葉が無い、とはこのことね。

私だつて自分に頭を下げている相手が謝罪以外のことを考えていたらわかるもの。

男とは言え、名家の人間として教育を受けてきた彼にそれができないはずがない。

いえ、それ以前の問題、か。

謝罪中に余計なことを考えた私が悪い。

それだけよ。

「貴殿らの謝罪は謝罪ではない。 故に受け入れることはできない」

「……」

「ごもつとも、としか言えないわ。」

「これが私個人に対するものであれば黙認することもできた」

「……」

「けれど、現時点で私を侮蔑することは、私を派遣した我が家に対する侮蔑となる。 これを見過ごすことはできぬ」

「……そうでしょうね」



彼はその双肩に己が家の面子を載せている。

故に今の彼を侮蔑するということは、彼の家を侮蔑することと同義となる。

もちろん、彼個人がなにかしらの失敗を犯したというのであれば問題はない。

だが今回、彼はなにもしていない。

本当に何もしていないのだ。

私たちはただ挨拶をしにきただけの彼を見下し、侮蔑したのだ。

もし私が同じことをされたら、相手が誰であれ必ず報復をするだろう。

私たちはそれだけのことをしてしまったのだ。

そうである以上、私には謝罪する事しかできない。

それなのに、その謝罪に誠意を込めていなかった。

それを見透かされた。

これを無礼の上塗りと言わずに、なんとさえ言えば良い。

こんな謝罪になっていない謝罪を受け入れて欲しいと言われて誰が領くものか。

……ああ、終わった。

今回のことが広まれば私の名は地に堕ちる。

たとえここで彼を殺したとしても同じこと。

なにより私自身が許せない。

ことここに及んでは、いかなる罰も進んで受け入れ、後の再起に賭けるしかない。

随分と分の悪い賭けだけど、私なら、私たちならやれるはず！

そう思っていたのだけれど、事態は私が思っていたものとは違う方向へと進んだ。

他ならぬ目の前にいる男の言葉で。

「……よって謝罪は受け入れられぬ。だが貴殿から要請を受けたのは私ではなく我が母だ」

「……と、いうとっ？」

「貴殿から我が家に対して謝罪の使者を送ってもらいたい。その結

果、母が許すと言えればそれでよし」

「……許さぬ、と言えば？」

「帰らせて頂く」

え？

「それ、だけ？」

「然り。その間もその後も我が貴殿の悪評を広めることはない。母がどうするかについては貴殿が説得する必要があるが、な」

「それは……」

どうということなの？

もしかして、家長の判断に委ねるといふ形にすることで私に猶予を与えたともいうの？

それでこの男に何の得があるというの？

「どちらに転んでも我が家は曹太守に貸しを一つ作れる。曹太守は時間的猶予を得るうえ、母の説得さえできれば人員もそのまま確保できる。悪い取引ではあるまい？」

「……なるほど」

ええ。確かに悪い取引ではない。

彼の家に借りを作ることになるけど、この場で全てを失うことに比べれば万倍も良い。

……そうか。彼は自分が我慢することで彼の家に利益が生まれるならその方が良いと判断したのね。

己の矜持よりも家の利益を重視する。

名家にとつてある意味では当たり前のこと。

彼にはそれを徹底できる強さがある、と。

加えて、どうせ誰かに仕官しなくてはならない身である以上、貸しを作った相手に仕官した方が楽、というのもあるのかもしれない。

なるほど。なるほど。

中々どうして。見た目と違って随分と頭が回るようね。

いえ、彼の場合は己の見た目も策の一つとして利用しているのかもね。

「その上で曹太守が私個人に対して引け目を感じているのであれば、

「一つ頼みごとを聞いてもらいたい」

家への償いと彼個人への償いは別、か。

一度赦しておきながらの追撃とは、なかなか悪辣じゃない。

それもあくまで『私たちが悪いと思っっているのであれば』ときた。

この状況では断れない。

断れるはずがない。

やってくれるわね。

「……ええ。私にできることであればなんでもさせてもらうわ」

「それは重畳」

「華琳様!」

やられたことは理解している。

だけどこの「頼みごと」は断れない。

尤も、この一事を利用して「私の体を捧げろ」なんてふざけたことを言ってきたら、その瞬間に斬り捨てた上で彼の家に苦情を申し入れることができるけど……この男がそこまで愚かではないことはこれまでの会話からわかっている。

恐らくこの男が望むのは春蘭の身柄。

それを求められた場合、私は断ることができない。

家の格もそうだし、何より春蘭こそ彼に対して最も無礼を働いた張本人なのだから。

今の私には「身の程を弁えずに我が家を侮辱した人間を引き渡せ」と言われたら断ることはできない。

せめて殺されぬよう条件を付けるのが精一杯。

春蘭には屈辱に耐えて貰う必要があるけど……。

これに関してはまあ、春蘭の自業自得な面もあるから強くは言えないのよね。

もちろん無礼に対する謝罪だからと言って何をされても我慢しなければならぬというわけではないわ。

信賞必罰は組織の礎。

でもね、賞も罰も等価でなくてはならないのよ。

彼の家の面子が軽いとはいわないけど、限度はある。

それを超えたら終わり。

今回はどうしようもないけど、所詮はこの場で春蘭の身を求めるような下衆。

この後も必ず横柄な態度を取るでしょう。

反撃はその時。

弱みに付け込んで己の欲を満たそうとするような下衆をただで済ませる気はないわ。

今は無理でも、必ず報復する。

そのためにはこいつやこいつが連れてきた人員がいなくなっても組織を回せるようにしなくてはいけないけど、それくらいはやってみせる。

数年は必要だろうけど、必ずや成し遂げて見せる！

だから春蘭、今は、今だけは耐えて頂戴。

「っ。はいー」

ありがとう。そしてごめんなさい。

貴女の犠牲と覚悟は絶対に無駄にはしないわ！

……今はさっさとこの男との会話を終わらせましょう。

「では、その頼みとやらを聞かせて貰えるかしら？」

「うむ」

失態を犯したのは私、悪いのも私。

それは理解している。

でも、私たちが無礼を働いたことと、春蘭を穢されることを我慢することは別よ。

私は、これから春蘭が味わうことになる屈辱を絶対に忘れない。

必ずやこの邪智暴虐の男に落とし前をつけてやる。

……そう考えていた時期が私にもあったわ。

「済まないが、私は敬語が苦手だな。貴殿の下で働く際もこの口調で接することを許していただきたい」

「は？」

なんて？

「済まないが、私は敬語が苦手だな。貴殿の下で働く際もこの口調で

接することを許していただきたい」

「いえ、別に聞こえなかったわけではないの」

「そうか」

そう、ただ意外過ぎて理解ができなかっただけ。

「……仕える立場でありながらこのような要望をすることがどれだけ無礼であるのかは重々承知している。だが、ここはお互いさまということ許しては貰えないだろうか?」

お互い様? 無礼は無礼でも私がしたものとは種類が違うでしょう?」

予想もしていなかった【頼みごと】を聞かされたせいで思わず固まってしまったのを怒ったと勘違いしたのか、今度は向こうから頭を下げてきたのだけど、私はすぐに返事をする事ができなかった。だってしようがないじゃない。

この私にこんなことを頼んでくる男がいるだなんて予想できるわけがないのだから。

「本当にそんなことで良いのか?」と確認しようとしたのだけど、私の口からその言葉が紡がれることはなかった。

「……っ!」

彼の、怒りで歪んだままの表情を見て私は悟ったのだ。

彼は『お互い様』という形で幕を下ろすのがお互いにとっての最適解と判断したが故に怒りを収めようとしているだけで、本心では私たちを許しているわけではないのだ、と。

それを理解した以上、この場で私が返すべき言葉は一つしかない。

「……わかったわ。その【頼みごと】を受け入れましょう」

邪智暴虐の男なんていなかった。

全ては私の妄想だった。

でも目の前にいる男が怒りを堪えているのは紛れもない事実。

「感謝する」

いや、その言葉が本心ではないとはわかっているけど、家のために我慢しているのはわかるんだけど、せめてもう少し表情と気配を緩めなさいな。

「……はあ」

「詳細は後日改めて」と言い残して去っていった男の背中を思い出したら溜息が出た。

いや、ことの発端が自分たちにあるということは重々承知しているのだ。

悪いのは誰かと言われたら、間違いなく自分たちだということも理解している。

理解してはいるのだが、それはそれとして、今後口では「感謝する」などと言いつつ己の気持ちを一切隠そうともしていない彼と、男に対して少なからず偏見を抱いている私の部下たちの間で生じるであろう問題を想像して、思わず溜め息を吐いてしまった私は悪くない……はず。

## 2話。未来の霸王と怒りに震える男（裏）

チ○コ痛いねん。

このファウスト・フォン・ポリドロ改め司馬伯達は、つい先日まで中世ヨーロッパ風の世界を模した十二力な世界にいたと思つたら、いつのまにか古代中国のような世界を模した世界に転生していた。

なにを言っているのかわからないと思うが、俺にもわからない。いつ死んだのかもわからない。

なぜ再度転生したのかもわからない。

教皇とケルン派の枢機卿が論戦を繰り広げる前までのことは覚えていたが、その後の事はさっぱり覚えていない。

ただ、わかっていることがある。

チン○が痛い。

この世界でも俺の○ンコは苦しめられる宿命にあるようだ。

なんだその露出の多い恰好は。

美乳を見せびらかしたいのか。

「……ごめんなさい。私が無礼だったわ」

そんな恰好をした美少女が軽々に頭を下げるな。

谷間が見えるやろがい。

問・美少女の谷間が見えたらどうなる？

答・チ○コが痛くなる。

立ったまま息子が元気になろうとしているこの状況。

もしバレたら社会的に終わる。

それがどれだけ不味いことなのか理解できんのか。

謝るくらいならまず座らせて欲しい。

せめて胸元を隠せ。

あと、そのミニスカもやめろ。

中身が見えるだろうが。

ええい、陰茎がいら立つ！

「華琳様!?!」

金髪美少女の謝罪を受けて、体の線を隠そうともしないチャイ

ナ服を着こんだ二人の美少女が身を乗り出しながら叫ぶ。

前傾姿勢になったことで体の一部が強調される。

強調された部分がプルプル震える。

チ○コが痛くなる↑イマココ

「……」

貞操帯がなければ致命傷だったな。

貞操帯万歳。

前の世界もそうだったが、俺が転生する世界は女性優位の世界らしい。

というか、3回中2回がそういう世界なので、もしかしたら女性優位なのがスタンダードなのかもしれないと思いつつある。

前の世界との大きな違いは、世界観が中世ヨーロッパ風な世界なのか古代中国風な世界なのかということの他に、男女比がほぼ一緒、いや、4：6くらいの割合で女性が多いことだろうか。

ただ、前の世界と同じような部分もある。

それが『超人はほぼ女性である』ということだ。

前の世界では男性の絶対数が少なかったこともあって男性の超人が少ないのも仕方ないことだと思っていたのだが、男女比がほぼ同じ世界であっても男性の超人が少ないとなると何かしらの力が働いているのではないかと疑いを持ちたくなる。

無論、男の超人が存在しないわけではない。

俺自身もそうだし、名医と名高い華佗なんかも男性でありながら超人らしい。

ただまあ、男の超人が非常に珍しい存在なのは事実である。

また、前の世界ではあやふやだったが、この世界における超人の条件ははっきりしている。

それ即ち『気の総量』である。

男女関係なく宿ると言われている気だが、その総量には個人差がある。

その中で一定以上の量を宿し、それを使いこなすことができる人間が超人として扱われる。



武官は気によって身体能力を活性化させることで通常の3倍以上の速度で動けるようになるし、文官は脳を活性化させることで判断力や処理能力を高めているようだ。

前の世界の『なんとなく強い』とか『強いから超人』というよりわかりやすいと思うのは、元が日本人だからだろうか。

尤も、超人と呼んでいるのは俺だけで、他の人間は武将だの軍師という括りで纏めているらしいが、その辺はどうでもいい。

いま重要なのは、○ンコが痛いという事だ。

その元凶は、目の前で谷間を見せつけている美少女こと、曹孟徳である。

そう、俺の目の前で谷間を晒している少女こそ、曹孟徳、つまり曹操なのだ。

三国志で有名なあの曹操である。

それほど詳しいわけではないが、曹操や劉備や孫権くらいは知っている。

問題はそれらの人物がみんな女性だということだ。

最初は「そうはならんやろ」と思ったが、実際になっっているからな。

今となっては、俺は男女が逆転した三国志の世界に転生したのだと思うことにしている。

実際前の世界でもチンギス・ハンっぽいのがいたしな。

俺が知らないだけで何らかの元ネタがあつたのかもしれない。

前の世界についてのあれこれはさておくとして、現在の状況だ。

事の発端は、俺の目の前で谷間を晒している曹孟徳が、我が母に人材の斡旋を依頼し、我が母がそれに応えたことにある。

母曰く「将来大成しそうだから今のうちに恩を売っておきたい」とのこと。

こういう場合、超人を派遣するのが礼儀らしい。

まあ、どれだけ働けるかわからない人間よりも、確実に能力があることが保証されている超人を派遣するのは当然のことだろう。

また、曹孟徳が「どのような人間でも優秀であれば構わない」と言ったため、母は俺を派遣することに決めた。

男が中央に行けば、どんな目に遭うかわからないらしいからな。男女差による差別に慣れている俺とて、好き好んで女だらけの万魔殿に出仕などしたくない。

痴漢冤罪で息子を切除とか、絶対に嫌だ。

母と俺、そして雇い主である曹孟徳の利害が一致したため、俺は司馬家に仕える文官を引き連れて陳留くんだりまで来たわけだ。

そこで向けられたのが、失望と侮蔑の眼差しであった。

超人Ⅱ女と思っていた曹孟徳らは、送り込まれてきた人間が俺、つまり男であると知って失望の眼差しを向けてきたのである。

これに対し俺が「陣営に男が不要というのであればこのまま引き返す」と言っただけだ。

俺個人に対する侮蔑であれば特に問題はない。慣れているしな。

しかしながら俺を派遣した母、及び司馬家の面子を潰すことは許さない。

彼女らが行ったのはそれだ。

だから俺は怒るし、向こうは謝罪する。

そこに雇い主云々は存在しない。

何故ならまだ仕官したわけではないのだから。

つまるところ今の状況は、曹操が俺を、ではなく、曹家が司馬家を舐めたが故に発生した状況なのである。

「貴方が怒るのは当然よ。此度の無礼に対する償いは必ずするわ。だから、今回だけは謝罪を受け入れて貰えないかしら？」

悪いことをしたから頭を下げる。

リーゼンロットと違い、王ではないからこそできることだろう。

それはいい。謝罪を受け入れるのもやぶさかではない。

だがその服はなんやねん。

お前まだ15か16やろがい。

そんな娘さんが谷間を見せびらかすとか、羞恥心はないんか。

チン○痛いねん。

凄いチン○痛いねん。

ほぼ裸体のアレもアレだったが、チラリズムもヤバいねん。

美少女のチラリズムとかヤバすぎるねん。

エロいわ。

少しでも気を抜けば、その瞬間に若き血潮が弾け飛びかねんねん。

「春蘭、貴女も謝罪しなさい」

必死で我慢している中、曹操は俺に対して侮蔑の視線を向けていた女性にも声を掛ける。

「華琳様!」

叫び声を上げた黒髪チャイナの美少女は夏侯惇というらしい。

彼女はこの時代の超人よろしく、男である俺を見下していた。

そういう意味では主犯である。

ただし彼女はあくまで一介の武官であり、責任者ではない。

故に、彼女が侮蔑したのは俺一人に集約されているとも言える。

だから彼女の謝罪はいらない。

むしろ、これ以上体の一部を強調するような動きをされるとチン○の痛みがひどくなるから止めて欲しい。

というかな。

「曹太守。謝罪中に相手から意識を割くのは頂けませんな」

謝罪の最中に責任者が「お前も頭を下げろ」はあかんやろ。

謝るときはわき目を振らずに下を見る。それが基本だろうに。

それと、あきらかに「ぐぬぬ」しながら下げる頭に価値はあるのか？

「貴殿らの謝罪は謝罪ではない。故に受け入れることはできない」

あと、チン○が痛い。

「これが私個人に対するものであれば黙認することもできた」

チン○コが痛いけど、イイものを見れたのは確かだ。

あとで活用させていただく。

「されど、現時点で私を侮蔑することは、私を派遣した我が家に対する侮蔑となる。これを見過ごすことはできぬ」

それはそれとして、舐められたことに対する落とし前はつけさせていただく。

「……………そうでしょうね」

しよんぼりすることによって谷間が強調されて○ンコが痛くなる。  
止めなければ、この悪循環。

「……よって謝罪は受け入れられぬ。だが貴殿から要請を受けたのは私ではなく我が母だ」

思い出せ。厳格なる我が母、司馬防の姿とその教えを。

そして鎮まれ我が息子。

「……と、いうと？」

うむ。少し収まってきた。流石は我が母である。

俺が肉親に欲情するような特殊性癖の持ち主で無くてよかった。

本当に良かった。

「貴殿から我が家に対して謝罪の使者を送ってもらいたい。その結果、母が許すと言えばそれでよし」

家を舐められることは許さん。だが家の当主は私ではなく母。

故に決定権は母にある。Q.E.D。

「……許さぬ、と言えば？」

「帰らせて頂く」

「それ、だけ？」

そらそうよ。

三国志に詳しくない俺だって曹操が勝ち馬であることくらいは知っているからな。

わざわざ勝ち馬から恨みを買うような真似はせんよ。

「然り。その間もその後も我が貴殿の悪評を広めることはない。母がどうするかについては貴殿が説得する必要があるが、な」

「それは……」

頑張つて母を説得してくださいということだ。

ただまあ、これでは納得しないだろう。

マルティナやテレメール公もそうだったが、賢い人間は必ず事の裏を読もうとする癖があるからな。

だからこういうタイプには敢えてわかりやすい理由を与えた方がいい。

「どちらに転んでも我が家は曹太守に貸しを一つ作れる。曹太守は時

間的猶予を得るうえ、母の説得さえできれば人員もそのまま確保できる。悪い取引ではあるまい？」

「……なるほど」

ほらな。俺とて学習するのだ。

あとは母に「貸しを最大限活用して欲しい」と頼めば、向こうが良くやってくれるだろうさ。

あとは、そうだな。息子の猛りも収まってきたところで、一つお願いをさせてもらおうか。

「その上で曹太守が私個人に対して引け目を感じているのであれば、一つ頼みごとを聞いてもらいたい」

「……ええ。私にできることであればなんでもさせてもらおうわ」

よし、言質取った。

「それは重畳」

「華琳様!？」

チャイナ美少女が騒いでいるがもう遅い。

「……では、その頼みとやらを聞かせて貰えるかしら？」

「うむ」

何やら主従で覚悟を決めた様子だが、そこまで硬くなることではないぞ。

……いや、この時代であれば十分な大事か？

今更ながらに気付いたが、時すでに遅し。

ここで「やっぱりやめた」は通用しないだろう。

もしかしたら貸しが無くなるやもしれぬ。

だがこの司馬朗は退かぬ。

「済まないが、私は敬語が苦手だな。貴殿の下で働く際もこの口調で接することを許していただきたい」

「はっ。」

わかる。わかるぞ。

無礼だもんな。だが、コチラとしても折れる訳にはいかんだ。

「済まないが、私は敬語が苦手だな。貴殿の下で働く際もこの口調で接することを許していただきたい」

大事なことだから不退転の気持ちを決めて二度言った。  
いや、だって、なあ。

思わず突っ込むことってあるやん？  
それを無礼とか言われたら困るやん？

「……仕える立場でありながらこのような要望をすることがどれだけ無礼であるのかは重々承知している。だが、ここはお互いさまということ許しては貰えないだろうか？」

これはマジでお願いしたい。  
というか曹操よ。

呆然としていると谷間が丸見えだぞ。

身長差があるせいで猶更丸見えだぞ。

くっ。鎮まっていた息子がまたっ！

貞操帯よ、耐えてくれ！

「……っ！」

息子の暴走を必死で抑え込んでいると、向かい側から息を呑む気配を感じた。

まずい、気付かれたか？

こんなところで息子をおっ勃てる変態扱いされたら貸しどころの話ではなくなってしまうぞ。

どう誤魔化すかを考えていたら、曹操は溜息を堪えるような表情をしながらこう告げてくれた。

「……わかったわ。その【頼みごと】を受け入れましょう」

助け船を出されたのだろう。

ならば乗るしかない、この大船に。

「感謝する」

そう感謝の意を告げた俺は、細かいことはまた後日ということにして曹操が司馬家のために陳留内に用意した屋敷へと向かう事にした。

呆れたような表情を浮かべた曹操と、曹操を気遣うように動く夏侯姉妹の間に百合の花が咲いていたような気がしたのは、決して気のせいではあるまい。

「ふっ。夕食後のおかずには困らん職場だな」

こうして俺こと司馬伯達は、無事曹操の下で働くこととなったのであった。

### 3話。新たななる人材

私が陳留郡の太守となって早一年。

つまり司馬朗がここ陳留に来てから約一年ということね。

この一年はとても早く感じたわ。

出合いは最悪と言えるような状況だったけど、最終的に司馬防から許しを得たおかげで私たちは事なきを得た。

そこで次に頭を悩ませたのが、彼女の息子である司馬朗の使い道だった。

一間七尺（約2メートル）を超える筋骨隆々の大男である司馬朗だが、男である以上武将として使うという選択肢は無い。

そもそも武官は足りていたしね。

だからこそ私は彼を文官として扱うことにした。

洛陽にいたときは司郎中として尚書右丞であった司馬防の補佐をしていたと聞いていたので、適材適所と言える配置だったと思ってる。

尤も、彼のほうはそう思わなかったみたいだけどね。

配属を伝えた時に見せた苦虫を噛んだような顔は忘れられないわ。

とはいえ、彼の場合は巷によくいる『女の風下に立ちたくない』なんていう我儘ではない。

自分も武官として働けるといいう自負があつてのこと。

それは決して驕りではない。

実際、ただの兵卒では彼に勝てないのは明白なのだから。

人材が足りていなければ私だって武官として採用したかもしれない。

でも私たちの陣営にはすでに夏侯惇、夏侯淵、曹仁、曹純、曹洪といった武人が揃っていた。

その反面、秋蘭や榮華に文官の仕事をさせるくらい文官が不足していたわ。

だからこそ彼には文官になつてもらつたの。

勿論ただの文官ではない。内政官の筆頭よ。



名門司馬家の長男にして、司郎中。

つまり我が陣営に於いて私を除けば唯一官位を持つ彼を一介の文官にすることなど出来る筈もないからね。

秋蘭や栄華には反対されたけど、今ではあの時の判断が間違っていないかつたと確信している。

栄華だつて彼が行った規格統一によって作成された書簡を前にして「これは革新です！」なんて大喜びしていたもの。

秋蘭も書類仕事が効率化されたおかげで助かつたつていつているし、私だつてそう。

彼らのおかげで睡眠時間（意味深）が長くとれるようになったんだから、彼と彼が連れて来た文官たちには感謝しかないわ。

ただ、彼にとつてはあまりにも簡単すぎた仕事を回してしまったことに関しては後悔していないわけでもない。

それはそうよね。洛陽での政を経験していた者が、陳留一郡の政でどうにかなるはずがないもの。

間違はなく役不足。そういう意味では彼に対する侮辱だつたかもしれないわ。

でも、今の私には今以上の仕事をさせてあげることができない。もう少し所領が広がればその分仕事も増やしてあげられると思う

んだけど、暫くは退屈な仕事に専念してもらうしかないわね。

まさかこんな意味で自分の力不足を痛感することになるなんて思ってもいかなかったけど、これも嬉しい悲鳴というやつかしら。

……嘘よ。嬉しくなんてないわ。

だつて、また「こんなつまらん仕事を持って来たのか？」という目を向けられるのだから。

「はあ」

彼がああいう態度を取ることを赦したのは私だし、なにより彼にはそれが許されるだけの能力と実績がある。

でもね、一年経つても一向に言動を改める様子がないのはどうなの？

……もう少しこう、手加減と言うか、歩み寄りというのを見せて欲

しいのよね。

特に春蘭とはもう少し仲良くして欲しいわ。

いえ、半ば意地になって彼を認めようとしないう春蘭が悪いのはわかっているのだけれども。

「はあ」

春蘭の方から歩み寄るように命令するべきかしら。

でも、不満を抑えこんで表面上仲良くなっても意味が無いのよね。それくらいなら今のままの方がましだと思おうし。

でも武官筆頭と内政官の筆頭の間には不和があるのは頂けないわ。

どうしようかと頭を悩ませていたのだけど、救いの手は思わぬところから差し出されることとなった。

「徐校尉ですって？　ええ。よろこんで迎え入れるわ！　給金も支払いますよ。なんなら私の直属の配下になって欲しいくらいなんだけど、どうかしら？」

この私が洛陽で校尉上級武官をしていた人間を雇える機会を逃すわけないでしょうが！

チン留、否、陳留に来て一年が経った。

この一年は試練の連続だった。

なんなんだこの陣営は。

夕飯後のおかずどころか、朝から盛りだくさんではないか。

曹操はもとより、曹仁も曹純も曹洪も全員ミニスカのハミチチってなんだよ。

曹仁に至っては普通に脱ぐし。

前も後ろも横も駄目とか、何を考えているんだ。

ええい。曹家の子女は変態か。

もう額に集中するしかないではないか。

これならぶるるんスリットチャイナ姉妹の方がまだマシだ。すまん。嘘だ。あの姉妹も駄目だ。

なまじ大人っぽいから刺激が強い。

あとあの片乳露出衣装は反則じゃないか？

隙を突くという意味では間違っていないけどやりかたつてもんがあるだろう。

しかも予想通り曹操とアレな関係だったし。

想像するだけで凄く捗る……わけがない。

普通に顔合わせ辛いわ。

唯一の救いは仕事が簡単なことと、連中は基本的に武官だから普段は顔を合わせなくて済むことだろうか。

仕事が簡単といったが、もちろん、俺の地頭が良くなつたわけではない。

時間があるときに兵法書やら何やらを読み込んでいるものの、結局幼い妹にも及ばぬ未熟者だ。

ただ、これでも超人のはしくれなので気を使った脳の活性化はしている。

これにより書類の処理速度を上げているのだ。

しかも俺に上がって来る仕事はあくまで経理や都市開発の経過などに関する書類しかない。

軍師というわけではないから当然だな。

そしてこの作業に必要なのは根気であり、ひらめきは不要。

そんな単純作業であればこそ、俺程度の人間であっても肅々と仕事をこなすことができるのである。

仕事量自体も少ないしな。

うん。ここと比べると洛陽は本当に酷かった。

書簡と竹簡で物理的に潰れるところだったただけでなく、役人どもの中抜きが酷かった。

必要な分だけ用意したはずの資財が蔵の中にさえなかつたと知った時は、思わず担当していた連中を殴り殺してしまったからな。

その節は母に多大な迷惑をかけたものだ。

尤も、その母も心の底から笑顔を浮かべて「よくやった」と言ってくれたから良かったのだが。

ここ陳留ではそんなことがないというだけでかなりマシだ。あつても内政官筆頭という立場がある以上、いくらでも肅清できるというのがいい。

いざというときに我慢する必要がないというだけでストレスは減るからな。

そんなこんなで、偶に現れる曹操や曹洪らとの接触で息子が棒立ちになるのを我慢すること以外では極めて気楽な職場であるここで働くことに不満などあろうはずもなく。

そろそろ長期の休みを貰って陳留以外の都市を見て風俗事情の観察を行おうかと思っていたときのこと。

俺にとつて癒しとなる人物がここ陳留へと足を運んできてくれた。

「お久しぶりです司馬朗様」

「ああ、よく来てくれたな徐晃」

「はい」

「今後はこっちにいるのか？」

「はい。そう言われています」

「そうかそうか。これからよろしく頼む」

「お任せください」

ぼーっと会話をしているように見えるが、その実しつかりと内容を把握している少女。

彼女の名は徐公明。

小柄で見た目同様子供っぽいところはあるものの、れっきとした超人である。

司馬家の被官であり、今までは校尉として洛陽周辺の治安維持活動にあたっていたのだが、最近司隸以外の地域の治安が著しく悪化してきたことを部下から報告された母と妹が心配してくれたらしく、こうして俺がいる陳留に派遣されることになったのだという。

いやあ助かる。

なにが助かるって、彼女から女のフェロモンを感じないのが助かる。

他と比べても露出はアレだが水着だと思えば問題ないし、なにより

胸部の装甲が、な。

この人畜無害さは、今は亡きヴァリエール殿下を思い出す。

ぼんぼんペイン様とは仲良くやれていただろうか。

「……凄く失礼なことを考えていませんか？」

「気のせいだろう」

事実だし。むしろ褒めているし。

「まあ、いいです。それで、曹操殿へもご挨拶をしたほうがいいですか？」

「そうだな。間接的にはいえ上司になるのだから挨拶は必要だろう」

徐晃の上司はあくまで俺、もしくは司馬家であって、曹操ではない。

しかし武官として働く場合、その給料は陳留の予算、つまり曹操の懐から出ることになる。

この辺はなんとも面倒なところなのだが、徐晃の武力が陳留の治安維持に使われるのだから給料は陳留の予算で支払うべきという発想だ。

利益を得たら対価を払えということだな。

当然徐晃が武官としてではなく俺の護衛として働くのであれば、その分の給金は俺か司馬家が支払うことになる。

俺としては俺の護衛に専念して欲しいところなのでこのままでもいいのだが、徐晃の立場で考えた場合、俺の護衛に専念するというのはそれはそれで窮屈だろうし、なにより曹操が徐晃ほどの人材を俺の護衛に専念させるなんて贅沢な使い方をするとは思えない。

そう思っつて徐晃を連れて挨拶に行った際、挨拶を受けた曹操の反応は劇的なものであった。

「徐校尉ですって？・ええ。よろこんで迎え入れるわ！ 給金も支払いますよ。なんなら私の直属の直属の配下になつて欲しいくらいなんだけど、どうかしら？」

「それは無理」

「それは駄目だ」

武官として採用することを即決するのはまだしも、極々自然に人の

癒しを奪おうとするとは、なんてやつだ。

#### 4話。司馬の武（前）

それは司馬朗の配下という形で新たに私たちの陣営に加わることとなった将、徐晃の一言から始まった。

「兵の練度を上げたい？ 本気でそう思うなら、司馬朗様を武官として働かせればいい」

「え？」

始めは徐晃の言っていることが分からなかった。

春蘭や秋蘭も「ちよつと何を言っているかわからない」と首を捻っていたくらいだ。

徐晃は司馬家の被官でありながら洛陽で校尉として働いており、その際数千の兵を指揮していたという経験を持っている。

対して、私たちの陣営で彼女ほどの経験を持つ武官はいない。

春蘭でさえ数百がいいところなのだから当然と言えば当然だ。

敢えて言うのであれば私くらいだろうか。

数万いる官軍の中の一部隊の指揮官であつた徐晃に対し、私の場合は全軍で数千程度という違いはあるが、数だけみれば一緒と言えるだろう。

……ごめんなさい。ちよつと盛つたわ。

春蘭・秋蘭・華命、柳琳、栄華といった、気心が知れた上で能力が有る人材を分隊長として連れていた私と、碌に名も知られていない人々を率いた徐晃を比べればどちらの方が難易度が高いかなんて自明の理。

だから私は彼女を認めている。

訓練においては積極的に徐晃に意見を求めたし、徐晃が「こうした方が良いと思う」と言ったことは取り入れた。

それによつて兵の練度が上がったことは実感している。

だから今日も今日とて徐晃に「これ以上部隊の練度を上げるためにはどうしたらいいだろうか？」と意見を求めたところ返つて来たのが「司馬朗を使え」だった。

意味がわからない。

呆然としている私たちを見てどう思ったか、徐晃は呆れ顔を浮かべながら言葉を紡ぐ。

「司馬朗様は文武に秀でた人。文官としてはもとより、武官としても超一流」

「……そう、なの?」

「うん」

「っ! 秋蘭!」

「そんなはず…… 「姉者!」……むぐっ!」

男なのにな? とは言わないし、言わせない。

秋蘭に目配せして春蘭を抑えさせた私は、努めて冷静さを保ちつつ徐晃を見る。

「本当、なのね?」

「もちろん」

その表情からは「なにを当たり前のことを」という感情しか見られなかった。

それだけではない。徐晃はとんでもないことを口にしたのだ。

「そもそもあの人はご自分のことを文官ではなく武官だと思ってる」

「……あれだけ書類仕事ができるのに?」

「うん」

彼の書類捌きは時に私をも凌ぐほど正確で早い。

間違いなく我が陣営随一の文官だろう。

その彼が、自分を武官と定義している、ですって?」

いえ、確かに文官として取り立てると言ったときに苦い顔をしていただけ、まさか、そんな。

「武力も指揮能力も私より司馬朗様の方が上。実際に私は一度もあの方に勝つことがない」

「なんですって!?!」

「!?!」

徐晃の武力は春蘭に匹敵し、指揮能力は今の私を凌ぐかもしれない。



それほどの武官が勝てたことがない、ですって？

徐晃に嘘を言っている感じはない。

本心から言っているのが分かる。

でも到底信じられない。

そもそも司馬家の被官である彼女が雇い主である司馬朗に対して本気を出せなかっただけという可能性も……。

「疑うなら試してみれば良い」

「……どうやって？」

「夏侯惇が練武のお願いをすればいい。書類仕事の片手間に相手をしてくれるはず」

「はあ？」

簡単に実証できるのはいいのだけれど、本気で春蘭と戦わせるつもり？

文官で、男である司馬朗を？

それは、どうなの？

この後、私たちは自分たちがどれだけ狭い世界で生きてきたのかを知ることになる。

――

「で、私を呼び出したというわけか」

「うん。相手がいなくて困ってたから」

「なるほどな」

徐晃から「夏侯惇の相手をして欲しい」と言われたから何かと思えば、そんなことか。

百合関連の人生相談みたいなことをされると思ってビビッて損したわ。

「で、どうかしら？ もちろん無理には言わないわよ？」

曹操が谷間を見せながらそう言うてくるが、正直勘弁してほしいという気持ちはある。

だって夏侯惇、俺を睨みながら素振りしてるし。

ミニスカチャイナドレスで素振りとか止めてくれ。  
片乳が見えているぞ。

しかもそのぷるるんっぷりはノーブラだろう？

動くたびに息子が元気になっていくから止めてくれ。

貞操帯にも限界はあるんだぞ？

とは言え、この世界の超人がどれだけできるのかに興味がないわけではない。

徐晃はそこそこ強いが、あくまでそこそこだしな。

「夏侯惇はこの武官の筆頭。その力量を見ることは司馬家にとっても大事なことだと思いました」

「ふむ」

まるで作文のような言い方だが、徐晃の言っていることは間違っていない。

上から目線でアレだが、勝ち馬である曹操のところの筆頭武官がどれだけの強さを誇るのかを見定めることは我が司馬家にとっても有益なことだ。

「ふむ。練武に付き合うことが家の為になるといっているのであれば是非もないな」

あとはどれだけの力で応じるかだ。

素振りを見た感じでは、テレメール公のところにはいた勘当者くらいの實力だと思うのだが、どうだろう？

いや、さすがにないな。

彼女に実力が足りなかったわけではないが、では彼女が大陸に覇を唱える勢力の筆頭になれるか？ と問われれば、答えは否。

夏侯惇は力を隠していると見るべきだろう。

ふふふ。

練武とはいえ真剣勝負であれば相手は倒すべき敵。

敵を前にして欺瞞工作を仕掛けるのは当然のこと。

うむ。若くとも一端の武人。

すばらしい心意気である。

なればこそ、私も応えねばなるまいよ。

全力全開で迎え撃つ！

「俺の武器を持ってこい！」

「――」

「あ、これ駄目な奴」

「え？」

部下が武器を持って来るのを待つ司馬朗を見た徐晃が焦ったような声を上げた。

「このままだと夏侯惇が死んじゃう」

「は？」

え？　なんて？

「死んだら困るよね？」

「も、もちろん困るけど」

必要なら死んでほしいと命じる覚悟はできているけど、それはこんなところではない。

というか、ここで死なれたら困るどころの話じゃないわ。

「わかった。……司馬朗様！」

「む？」

「絶対手加減してください。殺したら司馬防様に叱られますよ」

「……そうか」

「はあ？」

春蘭相手に手加減、ですって？

しかも春蘭にも聞こえるように言ったら……。

「おい徐晃！　どういうつもりだ！」

こうなるに決まってるのよねえ。

徐晃はどうするつもりなのかしら。

「夏侯惇は全力で良い。殺すつもりで行って」

「「はあ？」」

春蘭に全力を出させるくせに、司馬朗には手加減を要求する？

それはつまり……。

「徐晃。貴女は春蘭を、私の家臣を舐めているのかしら？」

徐晃じゃなかったら絶を抜いているわよ？

いえ、今でも抜きたいと思っただけです。

「舐めているわけじゃない。今の夏侯惇と司馬朗様の間にはそれだけの差がある」

「信じられないわね。それでもしそれで司馬朗が怪我を負ったらどうするの？」

「ありえない。けど、万が一なにかあったら徐晃が責任を取る」

「……へえ」

覚悟はしている、と。

春蘭と訓練している徐晃がここまで言うのであれば、これ以上の問答は不要ね。

「春蘭！ 全力で当たりなさい！」

そして見せつけてやるのよ！

曹操軍の筆頭武官の実力というものを！

「はっ！」

## 5話。司馬の武（後）

私は今、冷静さを欠こうとしている。

「喰らえ！」

「……ふむ」

開始の合図と共に春蘭が七星餓狼で斬りかかるも、あっさりと回避された。

その手に持った大剣で防御をしたのではない、避けたのだ。それも、いとも簡単に。

「ふっ！ はっ！」

初撃を回避したというだけでも驚きなのだが、それがまぐれでなかったことは何度も振り回している攻撃が一度も当たっていないことが証明している。

「なるほど。この程度か。これでは徐晃が手を抜くよう忠告するのも道理だな」

「なっ！」

思わず口をついた独り言なのだろう。

私たちに聞かせるつもりはなかったのだろう。

もちろん春蘭を煽るつもりなど欠片もなかったはずだ。

だが、結果としてその眩きは間違いなく春蘭の耳に入った。

入ってしまった。

「おおおおおおお！」

繰り出される攻撃は全身全霊にして必殺必中の一撃。

「姉者っ！」

訓練だということさえ忘れているのだろう。その勢いは真剣そのもので。

司馬朗に死なれては困るということを理解している秋蘭が思わず声を上げる程の攻撃だった。

それは普通なら助からない。それなりの武人、それこそ華命や柳琳でも大怪我するだろう一撃だった。

「確かに早いし無駄がない。良い一撃だ。だがそれ故に読みやすい」

でも彼には、司馬朗には届かない。

「馬鹿な……」

「で、今ので終わりか？」

「なああめえええるうううなああああ!!!」

春蘭ほどの武人であれば、どれだけ頭に血を昇らせていたとしてもその攻撃が歪むという事はない。

故にその攻撃は流麗にして激烈。

上から切り下ろす。

横から風ぐ。

斜め下からカチ上げる。

私でさえ防ぐことができないと断言できる勢いの連撃を繰り出す春蘭。

「ふむ」

でも、届かない。

「避けるな！ 当たれ！」

「当たれと言われて当たる阿呆はいないぞ」

「なん……だどっ！」

「貴公は敵にも同じことをいうつもりか？ 攻撃が当たらないから当たって下さいと」

「くっ！」

視認することさえ難しいはずの春蘭の連撃をいとも簡単に回避するだけでなく品評した上で説教までする余裕がある？

しかもそれをしてるのが男？

そんな存在がこの大陸にいたなんて、想像したこともなかった。

さらにその説教の内容も的を射ている。

己の攻撃を避ける敵に向かって「避けるな。当たれ」などと叫んだところで何になるというのか。

勢いで押しつぶせる相手であればまだしも、純然たる実力差のある相手にそんなことを言ったところで己が技量の不足を露呈するだけだ。

……彼は今の春蘭が及ぶ相手ではない。

それがわかってしまう。

そして春蘭が及ばないということは、私たちの中の誰もが彼に及ばないということだ。

ギリツ。という音を立てたのは誰の口か。

私の中にある武人としての矜持が叫び声を上げるのが分かる。

「アレこそ頂。武を学ぶものにとっての目標」

そう呟く徐晃の手も強く握られていた。

「まあ、こんなものか」

「くっ！」

何度か行われた攻撃を凌いだ司馬朗の動きが変わった。

「貴公の剣は見た。これ以上がないのであれば、そろそろこちらからも行くぞ」

「「!」」

これは……なんという殺気……。

「……か、華琳様」

「……ええ」

司馬朗は剣を構えただけ。

ただそれだけで私と秋蘭に死を覚悟させた。

傍から見ているだけの私たちでさえそうなのだ。

直接殺気を当てられている春蘭が感じているモノは私たちの比ではないだろう。

「いくぞ」

「……っ！」

真つ青になった春蘭に対して、大剣を持った司馬朗が襲いかかる。その動きには一切の無駄がなく、あの大剣が決して飾りではないことがわかる。

あの長身から繰り出される打ち下ろしに込められている力は如何程のものか。

回避？ 間に合わない。

防御？ 潰されて終わりだ。

反撃？ できるはずがない。

詰んだ。春蘭の負け……。

あ、いや、そうじゃない！

「駄目！ 止まって！」

あの一撃を喰らえば負けるでは済まない。

死ぬ。死んでしまう！

そう確信した私が思わず上げた声が聞こえたのだろうか。

「安心しろ」

春蘭を押しつぶさんとしていた大剣は、ぴたりと音が聞こえるくらい鮮やかに停止していた。

それも春蘭の顔から一寸程度の距離で。

呆然とする春蘭。だけど彼は止まらなかった。

「腹だ。構えろ。歯を食いしばれ」

「え？」

「そいつ！」

「ツツツ!!!」

「春蘭！」

「姉者！」

次の瞬間、すさまじい音がしたと思ったら春蘭が飛んでいた。

え？ なに？ どうしたの？

なんで春蘭は空を飛んでいるの？

「あ、まずい」

その音が、司馬朗が春蘭の腹を殴り付けたときに発生した音だと気付いたのは、私の横にいたはずの徐晃が春蘭を助けるために走り出した後のことだった。

「ふむ」

殺す気どころ相手に手加減をしろとか、徐晃め中々にハードルが高いことを要求してくれる。

と思わせておいて、実際はそうでもない。

相手がテレメール公やレッケンベル殿であれば話は別だが、今の夏



侯惇にはそこまでの威はないし、何より冷静さを欠いているからな。これが曹操陣営の武官筆頭かと思うと気が重くなるが、まあまだ子供だからしかたない。

これから成長すると考えればいい。

しかしどうにもこうにも、この時代の武人は攻撃が単調なのよな。

徐晃も最初はそうだった。

ただ重量のある斧で殴りかかって来るだけだったからな。

それで倒せる相手であればそれでも問題はないのだが、技術の欠片もない攻撃が通用するのは格下だけだ。

世の中はそんなに甘くないのである。

尤も。今が古代中国だと考えれば、武術が発展していないのも道理ではあるし、何より個人差の大きい超人に画一的な技術を修得させることに意味がないというのもあるのかもしれない。

故に伝承できるのは基礎だけ。

それ以上は各々が研鑽していくしかない。

それがこの時代における超人の常識なのだろう。

そんな中、俺だけは違う。

俺の魂には前世の母、マリアンヌから与えられた全てが刻まれているが故に。

そして今世の母である司馬防からはこの前世に匹敵する恵まれた体躯と、幼い子供が一心不乱に武を磨く様を黙認してもらった。

二人の母より受けた愛。

それらによつて得られた体躯と身心に刻まれた技術は、我流でしか腕を磨くことができなかつたそんなじよそこらの子供に劣るモノではない。

しかも相手がこれではな。

「避けるな！ 当たれ！」

いや、無理。

見てから回避も余裕でできる攻撃に当たってやるほど甘くはないぞ。

もしかしたら防御して欲しいのかもしれないが、それは却下だ。

何故なら武器が傷むから。

前世で使っていたグレートソードのような魔法が込められた武器があればまだしも、残念ながら今の俺が持つ武器はただ鉄の塊。

いや、それなりに貴重な材質を使った上で鍛造されているらしいから鋼の塊かもしれないが、前世のアレに勝るものではない。

にも拘わらず、この大剣は高い。

どれほど高かったかと言えば、請求書を見た母上が思わず二度見するほど高かったと言えればわかるだろうか？

厳格という概念が人の形をとったかのような人物であるあの母上  
が、一瞬でもギャグキャラのような行いをするほど高価なのだ。

そんな高価な武器を訓練で使い潰すなんてとんでもない。

かと言って一切攻撃しないというのもおかしい話。

なにより夏侯惇は俺を殺すつもりで剣を振るって来たのだ。

そうである以上、負けたときにどうなるかを教えるのは年長者としての務めであろう。

「貴公の剣を見た。そろそろこちらからも行くぞ」

わざわざ告知してやるのだ。

きちんと対処してみせろよ？

そう思って夏侯惇を見てみれば、彼女は新兵よろしく青い顔をして硬直しているではないか。

どうやら今まで死の恐怖というのを味わったことがないらしい。

武官筆頭がこれではいかんだろう。

「いくぞ」

さあ、味わえ。己に迫る死の気配を。

「駄目！ 止まって！」

曹操の声が聞こえるが、俺を一体なんだと思っているのやら。

訓練で殺しはしないで。

負けるということがどういふことなのかは理解してもらっただけだ。  
硬直している彼女の頭を潰す寸前で武器を止め、懐に入る。

「腹だ。構えろ。齒を食いしばれ」

「え？」

俺の声を聞いてもなお呆然としたままの夏侯惇。

うむ。近くで見ると本気でヤバい片乳だな。

よし。今夜のおかずは決まった。

……あまり見てセクハラ扱いされても困るので、さっさとやることをやろう。

「そいつー！」

握りしめた拳を左斜め下から突き上げる。

アッパーとストレートの間。

スリークオーターからのスマッシュである。

心臓殴りの儀との違いは狙いが心臓ではないことだろうか。

「ツツツ!!」

ドン！ という音と共に夏侯惇が空を飛ぶ。

手ごたえからすれば死んではないはずだ。

ケルン騎士殿のときはアレクサンドラ殿とユエ殿がケルン騎士殿が死んだと勘違いして必死で蘇生させようと努力したのだが、今回はその必要もあるまい。

ふっ。私も手加減が上手くなったものだ。

それと空を飛ぶ夏侯惇を見て思いました。

数年前の徐晃も同じように空を飛んでいたということ。

あれ以来空を飛びたいと言わなくなったが、徐晃が抱いていた夢はどうなったのだろう。

一度空を経験したことで満足したのか、それとも思ったよりもつまらなかったから別の夢を求めたか。

「……夢は叶わぬままの方が良いのかもしれないな」

俺は、空中で徐晃にキャッチされて地面に横たわる形となった夏侯惇と、その無事を確認するためなのか必死で走って来る曹操や夏侯淵のプルプルを視界に収めつつそう独り言ちたのであった。

## 6話。つかの間の日常

完敗。完全敗北。

それ以外に表現のしようがないくらいに敗北を喫した春蘭は、司馬朗に対してこれまでの態度がなんだったのかと思えるほど素直な態度で今までの無礼を詫びたわ。

「司馬殿！ 一手御指南願いたい！」

それだけではない。司馬朗から学び取れるものは何でも学び取るため、率先して距離を詰めていった。

司馬朗の方は最初から気にしていなかったようであっさりと許したけど、それで春蘭の面目が潰されるといふことはなかった。

むしろ司馬朗の器を見せつける形になったわね。

それを受けて、秋蘭も司馬朗との距離を詰めることを決めたみたい。

元々彼が持ち込んできた統一書式の恩恵を受けていた秋蘭や栄華は司馬朗に無礼な態度を取ってはいなかったけど、今回の件でさらに垣根が消えた感じかしら。

もう少し時間を掛ければ、彼は華命や柳琳とも打ち解けることでしょう。

感覚としては、大きな兄にじやれつく妹、かしら。

嫉妬心なんて沸きようもない、なんとも微笑ましい関係に収まったわ。

司馬朗もたくさんの妹がいるからでしょう。

懐いてくる人間の扱いに慣れている感じがするのよね。

なんにせよ良かった。

こうして思わぬ形で武官と文官の間にあつた確執という問題が解消したわ。

……それはそれで良いことなのだけれども、問題は司馬朗よね。

まさかあそこまで色々と卓抜した武人だったとは。

見抜けなかった。この私の眼をもつてしても。

組手の最中ずっと顔を顰めていたのは、彼が思っていた以上に春蘭

が弱かったからでしょう。

……というか、あの春蘭を子供扱いできる男が存在するだなんて想定できるわけないじゃない。

いえ、徐晃からしつかり話を聞いていれば違ったかもしれないけれど、実際に見なければ納得はしなかったでしょうね。

事実、そうだったし。

というか、最後の攻撃はなによ。

空を飛んだわよ？ あの春蘭が。

気を失った春蘭が空を舞った瞬間、普通に「死んだ」と思ったわよ。あれは全力でしょ？ あれで手加減をしていたと言うのはどうかと思うわ。

そのことを徐晃に伝えただけけど。

「手加減していなかったら殴られる前に剣で真つ二つにされていたかぺしゃんこにされていた」

「それはそうでしょうけど……」

素手だろうが剣だろうが殺したら同じなのでは？ 私は訝しんだ。

「司馬朗様は立ち合いの最中に夏侯惇の実力を測って、ちゃんと死なない程度の力で殴った」

「空を舞ったわよっ？」

下手したら死んでいたと思うのだけど？

「司馬朗様との鍛錬ならアレくらいは普通。香……私も飛んだことがある」

「そ、そうなの」

遠い目をする徐晃。

その眼に映るのは過去に見た蒼い空か、はたまた激突する寸前に見た地面か。私にはわからない。

「そもそも話、司馬朗様が本気で殴った場合、相手は飛ばない」と、いうと？」

そもそも人が空を飛ぶのがおかしいのだけど。

いえ、その気になれば私にもできなくはないと思うわよ？

だけど、それはあくまで相手が普通の兵卒とかの場合だけ。

少なくとも私は春蘭を飛ばせない。

でも徐晃が言いたいのはそういうことではなかった。

「飛ぶのは力が無駄に分散しているから。真に集中した一撃は無駄を生まない、らしい」

「つまり？」

「どういうこと？」

「拳の形をした穴が開く。相手は死ぬ」

穴って、壁じゃないのよ？ 人よ？

いえ、彼からすれば人も壁も同じなのかしら。

「そうなのね」

「うん。そうなの」

なんなんでしょうね。この疲れる感じは。

それが武の極致と言えばそうなんでしょうが、あまりにも頭が悪すぎないかしら。

まるで麗羽がたまに提唱する謎理論を聞かされているときのようだよ。

いえ、実が伴っているから謎ではないのかもしれないけど。

麗羽の高笑いを思い出して頭を押さええる私に、徐晃は追撃を加えてきた。

「だから夏侯惇が飛ばされた時点で司馬朗様が手加減してたのは明白。ただ、夏侯惇が空中で気を失ったことは司馬朗様にとっても計算外だったと思う」

計算外？ でも普通にしていたわよ、彼。

あ、そうか。

「そこに気付いたからこそ貴女は春蘭を受け止めるために動いたのね」

「うん」

殴ったときに死んでいなくても、受け身を取り損ねれば死ぬこともある。

気を失っているときであれば猶更危険なものね。

死なないにしても、骨ぐらいは折れていたかもしれない。

それを彼女が助けてくれた、と。

「貴女には借りが溜まる一方ね」

今回のことといい兵の調練といい、この借りはどう返したのかしら。

「別に、司馬家に返してくればそれでいい」

なるほど。部下の功績は上司の功績というわけね。

滅私、とまでは言わないけど大した忠義だわ。

彼女の忠義が私に向くようにしたいのだけれども、今のままでは無理よね。

どう考えても今の私よりも司馬朗の方が上だもの。

でも私は諦めないわ。いずれ必ず王となる。

その時には司馬朗諸共私の部下にしてあげるわ。

そう決心したときだった。

「華琳様！ 姉者が、姉者が！」

「秋蘭？ 貴女がそんなに焦るなんて一体なにが……あ、まさかっ!？」

まさか、司馬朗が手加減を誤って大怪我をしたんじゃないでしょうね!？」

「司馬殿！ 一手御指南願いたい！」

最近夏侯惇が懐いてくるようになった。

懐く方向性が鍛錬に誘ってくるというのが若干血の気が多い気がしないでもないが、それ自体は別にいいのだ。

内政官の筆頭である俺と武官筆頭である夏侯惇の仲が悪い（俺としては含むところはなかったが）ことに曹操も頭を悩ませていたし。

そもそも武器も同じようなものだから技術的な互換性もあるし、そういう意味でも武の先達として鍛えるのもやぶさかではない。

だがな夏侯惇。お前は色々駄目だ。

男との距離感を掴めていないのだろうが、軽々しく引っ付くな。プルプルが当たっているだろうが。

もしかして当たっているのか？

ザビーネ卿でもそんな露骨な真似はしてこなかったぞ。

立っているときも痛い、座っているときだって息子が元気になると色々痛いんだぞ。

常に力を加えられている貞操帯の身にもなれ。

あと仕事の邪魔すんな。

「今は仕事の時間だから無理だな。というか、貴殿もそうだったはずだが？」

仕事はどうした仕事は。

「我ら武官にとつて鍛錬も立派な仕事だぞ！」

うん、そうだね。なんて言うと思うか？

「貴殿が行うべき書類仕事を夏侯淵殿が代行していると聞いたが？」

自分の仕事を人に回すんじゃない。

「そ、それはだな」

「それは？」

「わ、私がやるよりも秋蘭に任せの方が確実に早いからな！ 適材適所というやつだ！」

はい、アウト。

「馬鹿垂れが」

「ぐっ！ なにをする！」

ゲンコツをくれてやれば夏侯惇は恨みがましい視線を向けてきた。

それは夏侯淵がお前に向ける眼だろうが。

「今はまだ軍の規模が小さいから問題はない。だが将来的にはどうだ

？ 武官筆頭である貴殿と武官の次席である夏侯淵殿が常に一緒にいられると思うか？」

「うっ」

「夏侯淵殿が傍にいないときはどうする？ その辺にいる人間にすべての書類を投げ渡すのか？」

「……」

「軍事機密の漏洩どころの話ではないぞ。そこに悪意がある人間がいれば全軍が危機に陥ることになる。それがわからんのか？」

「……」



「貴殿が個人の武を高めるため鍛錬に時間を費やすのは大いに結構。なれど将帥として万の軍勢を率いるのであればそれだけでは足りぬ」  
「万の、軍勢?」

「そうだ。その際、曹孟徳が求める戦働きを成すために、貴殿も学ばべきことは学ばねばならぬ」

「華琳様が求める働き……」

「うむ。それを成すために余裕をもって学べるのは今しかない」

「今しかない?」

「そうだ」

軍の規模が小さいうちに経験しなければ、規模が膨れ上がったときに対応できんからな。

なにせこの時代は古代中国。

当たり前のように万単位の軍勢が編成されるイカれた時代である。

そしてこのイカれた時代の勝ち馬が曹孟徳だ。

その陣営に於ける筆頭武官となれば、最終的に差配する兵の数は1万どころか10万を超えるかもしれない。

それなのに、数千単位の仕事さえ処理できないとか悪夢と言わずなんという。

洒落にならんぞ。曹操にとっても、配下の将兵にとってもな。

「……司馬朗殿」

「なにか?」

「私が、私が間違っていた!」

うん。そうだな。

「私はもつと華琳様の役に立ちたい!」

「そうか。ならば何をすべきかわかるな?」

「ああ、すぐに秋蘭のところに行つてくる!」

「それで良い。ちゃんと今までのことを謝るのだぞ」

「無論だ! 秋らあああん!」

行つたか。

これで静かになったな。

さあ、静まれ我が息子よ。

そして仕事を終わらせるのだ。

「しししし司馬朗！ 貴方、一体春蘭に何をしたの!？」

数分後、夏侯惇を送り出して満足していた俺氏の下に、真っ青な顔をしながら夏侯惇を抱えた曹操と夏侯淵が駆け込んでくることになるのだが……夏侯惇が書類仕事をしようとするだけでそんな大事になるなどと、この時の俺には知る由もなかった。

## 7話。乱世の予兆

最近仕事が忙しい。

夏侯惇が書類仕事をするようになったおかげで夏侯淵に余裕ができたにも拘わらず、書類の量は減るところか増える一方だ。

夏侯淵に余裕ができていなければどれだけ仕事が増えていたことか。想像するだけで億劫になる。

そんなわけで陳留から出ない俺と比べて外を回ることが多い徐晃にナニカ心当たりがないかと聞いてみたところ、面白い話が聞いた。

「最近賊が増えてるらしいです」

「そうなのか？」

初耳だな。

「はい。この辺では見ませんが、他だと結構いるみたいです」

「何故この辺にはいないのだ？」

「司馬朗様が見回りしてますから」

「む？」

確かに市中の発展具合や警備の状況を確認をするため度々見回っているが、見回りなんざ俺以外にも曹操や夏侯姉妹もやっているだろう？

そこまで効果があるものか？

「大剣を担いでいる司馬朗様の前で狼藉を働く馬鹿はいません」

「まあ、それは、な」

納得しかない。

いや、俺として自分の外見がどれだけ厳ついかは理解しているのだ。

人間第一印象が八割と言われるように、視覚から齎されるモノは大きい。

それに鑑みれば、美少女が三人で見回りをするよりも、2メートルを超す大男が大剣を担ぎながら抜き打ちで見回りをした方が犯罪者に対する抑止効果は高いだろう。

それはわかる。だがなあ。

「俺が見回ることと効果があるのはあくまで陳留のみ。陳留郡全域

の治安に影響を及ぼすものではあるまい？」

「いずれ行こうと思っていたが、結局陳留以外の都市には行ったことないからな。」

「それもこれも、俺に時間的な余裕ができそうになるとどこからともなく夏侯惇や曹仁が現れて鍛錬に誘ってくるからだ。」

「最近の仕事の前か、自分の仕事をこなした後で誘ってくるようになったから断り辛いんだよな。」

「おかげで他の都市の見回りや風俗事情の確認ができていない。」

「目の前でプルプルを見せつけられる息子は毎日元気そのものだがな。」

「結局常に刺激を与えられ続けていることで発生している息子のストレスは、朝と夜に行われる自家発電と鍛錬で吐き出しているのが実情である。」

「というか、俺もまだまだ成長しているせいか、はたまた常時筋トレしているようなものだからだろうか、貞操帯がきつくなってきた。」

「最近はずつとち〇こが痛い。」

「本当にいい加減にして欲しい。」

「司馬朗様のお陰で陳留の治安がいいので、本来陳留の警備に当てるはずの人員と予算が浮いたんです。」

「ああ、そういうえば治安の話だったな。」

「なるほど。その浮いた分を他の県の治安維持に当てたのか？」

「はい」

「それなら納得だ。」

「ついでに最近仕事が増えてきた理由もわかった。」

「陳留郡全体の治安が際立って良いという噂が流れた結果、余所から民が流入してきているんだな？」

「はい」

「難民か。面倒なことだが、曹操は己を頼って避難してきた人間を無下にはすまい。」

「だが、無制限に受け入れることもできない。」

「物資は有限であるからして。」

「追加で報告があります」

「どうした？」

「余所で暴れている賊には共通の特徴があるそうです」

「ふむ」

陳留の外、つまりは□州一帯で暴れている賊に共通の特徴とな？

一つの州を荒らすとは、相当大規模な一団だな。

「その賊たちは、体の一部に黄色い布を巻いてあるそうです」

……。

「黄色い布？」

「はい」

幸せの黄色いハンカチ。

ではないな。うん。

知っている。俺はその集団を知っているぞ。

それは三国志と呼ばれる物語の序盤において、漢帝国全土で起こった農民反乱に参加した者たちが付けていたとされるトレードマーク。

「そうか」

始まるのか。

「……急がねばならんな」

「？」

反乱運動が本格化する前に動かねばならん。

なにより陳留に流れてきた難民がその乱に参加する前に処置をしなければならぬだろう。

「この状況をなんとかできる手がある、ですって？」

「そうだ。曹太守とて最近激増している難民の扱いに頭を悩ませているだろう？」

「まあ、そうね」

最近方々から流入してくる民をどう扱うかということに頭を悩ませていたのは事実。

私を頼ってきた民を見捨てるわけにはいかない。

けれど、できることは限られている。

だからと言って放置すれば治安が悪化する。

さらに無制限に受け入れてしまえば政が破綻してしまう。

現に栄華も「そろそろ限界です」なんて言ってきたからね。

いい加減抜本的な対策を練る必要があると思っていたのだけれど、まさか普段から一歩引いた仕事しかしてこなかった司馬朗から改善の提案をしてくるなんて、率直に言って意外だわ。

逆に言えば『司馬朗ほどの人間でも今のうちに手を打たないと拙いと判断した』とも取れるけどね。

それはそれとして、この男がどんな提案をするか興味がないと言えば嘘になる。

「で、貴方はどのような方策を私に提案するつもりなのかしら？」

まずは聞こう。すべてはそれからよ。

「屯田だ」

「とんでん？」

どういう意味かしら。

「簡単に言えば難民たちに自分で食う分を自分で作らせるということだ。幸い、土地は余っているしな」

「いえ、余ってはいないわよ」

もし余っているように見えているところがあつたとしても、それは邑や街の有力者の土地であつて、私であつても好きにできるモノではないわ。

そんなことは司馬朗だつてわかっているはずよね？

「現時点で開発がなされている邑や街に余裕はなくとも、まったく開発されていない土地ならば話は違うだろう？」

「まったく開発されていない土地？ そんなのどこにあるというの？」

「あるだろう。そこら中に」

「はい？」

「一見すればただの荒野。されど荒野とは見方を変えれば未開発の土地である」

「……ふむ」

「今では邑だの街だの県だのとなつている場所とて、元は荒野に過ぎなかつた。違うか？」

「極論ではあるけれど、まあ否定はしないわ」

「そうか。司馬朗は難民たちに本当にまつさらな土地を開発させるつもりなのね。」

「元々ここ陳留郡にはたくさん河が流れているから水に不足することはない。開墾など人手と水さえあれば大体はなんとかなる。だから河沿いに新たな邑を造らせればいい。最初は陳留と雍丘の間なんてどうだろう」

「……悪くないわね」

場所は問題ない。陳留に近いから警備もそれほど難しくはない。

でもそれはそれで問題が発生するのよね。

「水の量はともかく、水利の問題はどうするの？ 下流になる土地では絶対に反発する人間が出るでしょう？ 武力で以て無理やり従えることもできなくはないけど、その場合は既存の民から恨みを買うわよ？」

それが怖いから開発しない。なんて弱音を吐くつもりはないけれど、平地に乱を起こされても困るわ。

「そういう輩には『農奴に田園地帯を造らせる。ここで取れた作物は優先的かつ値引きをした上で回す』と言えば文句はでまい」

「……なるほど」

新しく来た難民を保護するために邑を造る。

そのために優先的に労力を割く。

馬鹿正直にそういえば結果的に軽んじられることとなる民が不満に思うかもしれない。

だけど難民を農奴として使うことや、その農奴が造った作物を安く手に入れることができるとわかれば、不満は抑えられるでしょう。

既存の民は農奴が作った作物のおかげで腹が膨れる上に、自分より下がいるという優越感も得られる形になる。

さらに割安で作物を得ることができれば、有力者はそれを使って利

益を上げることが出来るわ。

こうなれば有力者の方から率先して協力してくれるようになるかもしれない。

難民に仕事と立場と食糧を与えることで治安の悪化も防げる。

本当に悪くないわね。

「ここが上手くいけば同じように開発させればいい。難民たちも最初は農奴扱いされることに不満を抱くだろうが、そこは曹太守の腕の見せ所だな」

「下流の県に住む民を納得させるだけでなく、難民にも一時的に農奴扱いされることを認めさせろってことよね？」

「できんか？」

「そんなわけではないでしょう。できるわよ」

その程度のことかできないで何が王か。

「その意気や良し。なに、人間やる気があれば古ぼけた農具と使い古した器とボロボロの書物と沢山の種苗があればいかようにもなるものだ」

司馬朗が告げたその言葉は、とても実感の籠った言葉だった。

「我らは無条件の施しをしない。だが労働に対しては正しく報いよう。普段から正規の軍人に警備をしてもらえるようにしよう。何かあれば曹太守に使者を走らせることができるようにしよう。何か着のまま逃げてきた者たちに着る服を与えよう。住みかを追われた者たちに家を与えよう。収穫までもつだけの食糧を用意しよう。そんな恵まれた環境で働くことを嫌がるような者は守るべき民ではない。討伐すべき盗人だ」

多少行き過ぎているように思えるけど、民を無条件で甘やかすことではないという司馬朗の主張はとても納得ができるもので。

「彼らが開発をなし遂げたとき、陳留の国力は倍増しているだろう。故にそのときは曹太守が彼らに告げてやれ。『誇れ。お前たちこそが曹孟徳の覇業を支える民である』と」

背筋が、震えた。

そうか。今がそうなのか。



陳留郡の太守ごときが唱える覇業。

洛陽の老人が聞けば鼻で笑うでしょう。

麗羽が聞けば哀れみの眼を向けてくるでしょう。

だが、違う。

今この時に唱えなければ成しえない。

今この時を逃せば成しえない。

何も理解していない連中が何もしていない今だからこそできるところ。

それは私だけができること。

やらねばならない。やり遂げなければならぬ。

なればこそ、それを気付かせてくれた男の力が必要だわ。

「……司馬朗」

「はっ」

「貴方に我が真名を預けます。我が真名は華琳。貴方の力を貸しなさい」

「い」

「御意」

我が覇業、ここから始めましょう。

8話。 陳留（まち）をつつむMidnight for  
g

ある日、方々から流入してくる難民問題を解決するため職務に励んでいた我々の下に、陳留郡の隣にある済陰郡の太守から賊の討伐に力を貸してほしいという要請がきた。

要請を受けた当初、華琳様は苛政を敷き民を賊に落とした挙句その賊によって領地を荒らされている阿呆の要望を受け入れることに難色を示したが、最終的に同僚である郡太守からの正式な要請を断ることができないと判断し、討伐軍を派兵することを決定した。

そこまではいい。

私としても余計な手間だとは思わないでもないが、その賊をこのまま放置していたらいずれ陳留にも被害が出る可能性があるし、何より今回の討伐を成功させることで将来的に発生する可能性が高い禍根の芽を摘むと同時に、隣の郡太守に貸しを作りつつ華琳様の武名を高めることができるという、少なくとも3つの利点があるのだ。

華琳様は現在、その徳政によって大いに名を高めている。

それは非常に好ましいことだ。

だが、問題もあった。

それは、華琳様の政が完璧すぎるせいで領内に大規模な賊の集団が発生しないため、武功が得られていないということだ。

そのせいで口さがない連中などは「自分たちが苦労しているのにあの小娘は何もしていない」などという的外れな悪評を流布しているらしい。

それを聞いた華琳様は「政の理想は最初から問題が発生しないことなのだけれど、ね」と悪評を垂れ流していた者たちの不見識を笑っていたが、無能者が華琳様を笑いものにしていているという事実は私や姉者にとっては耐えがたき屈辱であった。

そんな屈辱に耐える日々もこれで終わる。

隣の郡太守が斃せなかつた賊を粉碎するのだ。それも一方的に。

何もさせずに滅ぼしてみせる。

その一方的な勝利を以て華琳様は文武に秀でた英傑だと満天下に示すのだ！

そう意気込んで姉者と共に出陣の準備を進めていたときのことだった。

「……秋蘭。これはどういふつもりかしら？」

「え？」

私は激怒していた。

必ずや今回の件に携わった連中を裁かねばならぬと心に決めた。

私は軍務に詳しい。私はこの陳留の太守である。

詩を愛し、美女と戯れてきた。

けれども下衆な連中が向けてくる悪意には敏感であった。

今回の件とは、隣の郡を治めている太守から「自分の郡で発生した賊を自分で討伐できないからなんとか対処してほしい」という、恥知らずな要請が来たことだ。

なんとも面倒なことだけでも正式に要請が来た以上は対処しなければならぬ。

また、この要請に応じることで私にも少なからぬ利があるのも確か。

故に「対処する以上は完璧に処理してみせる」そう意気込んでいたのも事実である。

そこで私たちは、野を越え、山を越え、数百里離れた場所にいる賊を討伐するための準備をしていた。

春蘭や秋蘭は私以上に乗り気だし、普段は資財や予算の放出を渋る栄華も今回に限っては大盤振る舞いすることを決めていた。

華侖も柳琳もやる気十分で、出陣の時を心待ちにしている。

さすがに全員で出るわけにはいかないなので留守居役として栄華を筆頭に司馬朗と徐晃を待機させる予定だけど、賊相手であればこれも過剰すぎるほどの戦力だという自負があった。

そう、あつたのだ。

秋蘭が最終確認のためにと差し出して来た書簡をこの目で見るまでは。

「……秋蘭。これはどうつもりかしら？」

そこに記されていたのは、私が用意するように指示をだしていた量の半分程度の量しか物資を用意していないという内容であった。

「え？」

「え？　じゃないわよ。秋蘭、貴女は今回の討伐を失敗させたいのかしら？」

これは明確な命令違反だ。いや、それだけではない。

「このままでは私の顔に泥を塗るだけではなく、私に付き従った兵たちが死ぬわ。それが貴女の望みなの？」

いかな精鋭であれ、食べるものがなければ飢えて死ぬ。そこには将も兵も、騎兵も歩兵も弓兵も関係ない。

「そ、そんなことは！」

ええ。そうでしょうとも。

秋蘭がそんな人間であるはずがない。

それは理解している。

もしも秋蘭に対する人物評が違えていたのだとしたら、それは私に見る眼がなかったというだけのこと。

素直に諦めましょう。

そう思っても、どうしても抑えが利かない。

「ではどんなつもりでこの書簡を私の前に差し出したのかしら？」

内容を知っていた上で一言も前置きを置かずに書簡を差し出してきたのだとすれば、何かしらの意図があるはずよね。

その内容次第では納得もしましょう。

もちろん内容次第では処罰するけど。

逆に、自分で内容を確認しないまま私に差し出してきたというのであれば、それは秋蘭の怠慢でしかない。

反乱よりはマシかもしれないけど、秋蘭に対する評価を改める必要がある。

「ど、どんなつもりと言われましても……」

この反応は後者かしら。  
残念だわ。

最近春蘭も書類仕事をするようになったから余裕ができたもの  
ね。

そのせいで気が緩んだ？

言い訳にもならないわよ。

「……はあ」

「っ！」

失望を隠しきれない自覚はある。

軽々しく感情を表に出すのは王としてよろしくない行為なのだろ  
うけど、今くらいは許してほしいわ。

「自分の眼で確認してみなさい」

「し、失礼します！」

書簡を秋蘭へと投げ渡せば、それを受け取った秋蘭は表情を青褪め  
させながら書簡を確認していく。

そして待つこと暫し。

「こ、これは！」

どうやら気付いたらしいわね。

では再度問きましょう。

「夏侯妙才。貴女はどんなつもりでこのような書簡を私の前に差し出  
してきたのかしら？」

「……」

「無言じゃわからないんだけど？」

「……申し訳ございません」

「何についての謝罪なのかわからないわ」

確認不足を詫びたのか、遠征を失敗させようとしたことが露見した  
ことを詫びたのか。

はたまた能力不足を詫びたのか。

私はどう受け取ればいいのかしら？

「……」

無言で俯かれてもねえ。

「もういいわ。司馬朗と栄華を呼んできて」

「……はっ」

ことここに及べば、問題は秋蘭一人の問題ではない。

この書簡を見たであろう司馬朗や栄華が何を考えて物資を準備していたのかを知る必要がある。

その内容によつては……。

「覇業の一步がこれ、か。ままならないものね」

今回の遠征に伴い留守居役である曹洪と出陣前の打ち合わせをしているのだが、どうにも座りが悪い。

それは目の前にいる曹操以上の胸部装甲を誇るミニスカ美少女のせい……だけではない。

「何度考えても解せん」

「何がでしょう？」

「今回の遠征についてだ。とくに用意するよう言われた物資の量についてだな。どう考えても足りんだろう。いや、不足はしていないのだが、なんというか、そうだな。遊びがない」

前世、つまりはポルド口領の領主であったころから従軍経験のある俺からすれば、今回用意するように言われた物資の数は軍の規模に比べて少なすぎるように感じたのだ。

食糧が足りない軍がどれほど危うい存在なのかを知っている身としては、曹操の正気を疑いたくなる。

「確かに私も少ないとは思いましたよ。でも我々は集めろと言われたモノを集めるだけですから」

「それはそうなんだがな」

今回の件に関しては金庫番として陳留の財政を預かる曹洪も疑問に思っていたようだが、軍部から出された指示書にそう書かれていた以上、勝手な判断はできないと判断したようだ。

確かに俺は飽くまで内政官であり、軍務に関してはノータッチだ。

そして現在軍務を統括しているのは、夏侯淵である。

(武官の筆頭は夏侯惇だが、軍政に関する書類仕事の大半は夏侯淵が

処理している)

また、今回の件は隣の郡太守が陳留郡の太守である曹操に救援を要請したために発生した事案である。

つまり今回の遠征には曹操という人間の威信がかかっていると  
言つても過言ではない。

故に、物資の準備などに曹操の意思が介在している可能性は極めて  
高い。

あの曹操が、何の考えもなしにこんな指示を出すとは思えない。  
即ち何かしらの理由があるということなのだろうが、その理由が読  
めん。

ポリドロ領の領主であったことであればこんなことは疑問にも思  
わなかったし、疑問を抱いたとしても「アナスタシア殿下やアスター  
テ公にはナニカ考えがあるのだろう」と気にも留めなかったのだろ  
う。

だがここには、あの人を喰つてそうな目をした第一王女もいなか  
れば、隙あらばケツを狙ってくる盟友もいない。

今の俺は自分で考え、自分で決めなければならぬのだ。

そのための知識は今世の母から与えられている。

その、前世から積み重ねてきた従軍経験と今世で得た軍事に関する  
知識が囁くのだ。

『このままでは良くないことになる』と。

かと言つて今の俺に何ができるといふわけでもないのだが。

逆に、もしこれらがただの勘違いだとすればどんなケースがあるだ  
ろうか。

一番ありそうなのは、不足分の物資を向こうの太守に用意させてい  
ることだ。

面倒ごとを依頼してきたんだからそのくらい要求しても問題ある  
まい。

これならここから持ち出す食糧が不足していてもなんとかなるだ  
ろう。

普通に考えれば曹操の意図するところはこれだ。

では向こうから物資を得られることを前提としたうえで、なお問題が発生するとしたらどんなケースだ？

考えるまでもない。

向こうの太守が出し惜しみをしたり、準備が遅くて向こうが用意する前にこちらの食糧が尽きるケースだろう。

うむ、どちらもありそうだ。

万が一に備えるのであれば、兵糧を積んだ後詰め部隊を用意するべきか？

曹操に提案してみよう。

いや、その前に確認だ。

「ちなみに曹洪は向こうの太守とはどんな人間か知っているか？」

全部俺の考えすぎという可能性もあるからな。

相手の能力や為人を知らないうちに決めつけるのはよろしくない。

「無能な豚です」

「は？」

「無能な豚です」

「男ってことか？」

曹洪も陣営の例に漏れず男嫌いだったもんな。

だが男と言うだけで評価を落とされても困るぞ。

事務処理能力に男女の差なんかほとんどないんだし。

「それもありますけど、根本的に無能なんです。だからこそ大規模な賊が発生したり、その賊を自分で討伐できなかつたり、大量の難民が陳留に流れてくるんですよ」

凄い説得力だ。

「……そうか」

全部事実に基づく評価からな。否定もできん。

つまり遠征軍は無能な豚に命運を委ねるということか？

それはあかんやろ。

というか、曹洪はプルプルというよりはフニフニなのな。

性格や嗜好は曹操と似ているが、どうしてこうも違うのか。

そういえば曹仁や曹純も……あ、不味い！



「ぐっ！」

「？ 司馬朗殿、いかがなさいました？」

「……いや、なんでもない」

「そうは言われなくても……」

上目遣いで「汗が凄いですよ」と言ってくる曹洪のフニフニやチラチラ見える生足のせいで元気モリモリな我が息子が齎す痛みが辛い。

このままでは仕事中に元気になる変態として処罰されてしまう。

なんとかしなければ。

「……栄華。司馬殿。華琳様がお呼びだ。すぐに来て欲しい」

神は、いた。

「秋蘭お姉様？」

曹操と出陣前の最後の打ち合わせをしていたはずの夏侯淵が、留守居役としての打ち合わせをしている俺たちを呼びに来た。

それだけなら「ありがとう！ 本当にありがとう！」と全力で感謝を伝えるところなのだが、どうも様子がおかしい。

「秋蘭お姉様、その、大丈夫ですか？」

そう。夏侯淵の顔色がヤバいのだ。

「……私のことなんかより、これ以上華琳様をお待たせするわけにはいかない。急いで欲しい」

「は、はい」

来ている服よりも真っ青に染まった夏侯淵の顔をみた俺は、なにやら彼女たちの間で発生したと思しき面倒ごとと巻き込まれたことを確信したのであった。

……っーか、そんなに急いで前を歩くな。

色々揺れるだけじゃなく、スリットから見える生足と紐が気になつて歩きにくくなるだろうが。

## 9話。動き出す猫耳Silhouette

生足と紐から導き出される答えに前屈みになりそうなところを必死に耐えて向かった先にいたのは、一見冷静なように見えてその実怒り狂っているのが明白な曹操だった。

あの顔、まるで鬼みてえだな。

こいつはやるかもしれねえ……。

「……あんなに怒っている華琳様を見たのは初めてです」

あからさまに不機嫌な曹操を前にした曹洪が思わず俺の腕に縋りついてきた。

柔らかいのがふによんとなつてちん〇が痛くなるのでやめて欲しい。

「仕事と呼び出したことは謝罪するわ。でもどうしても貴方たちに聞きたいことがあったのよ」

「ふむ？」

「見てもらった方が早いわね。これを見てどう思うか聞かせてもらえないかしら？」

「どう思うか？」

「ええ、忌憚のない意見を聞かせて頂戴。まずは司馬朗、貴方から」  
そう言いながら曹操が差し出してきたのは、先ほどまで曹洪と話をしていた今回の遠征に伴い用意された物資に関する書簡であった。

正直に言えば、言いたいことも聞きたいこともある。

だがこの場でそれを聞くことは武官である夏侯淵の面目を潰すことになりかねない。

ついでに言えば、遠征に参加しない俺には関係のないことだ。

「……一介の内政官でしかない私に口を挟む資格があるとは思えん。意見が聞きたいなら私より先に曹洪殿に聞くべきではないか？」

「いやいやいやいやいやいや」

そう言つて曹洪に視線を向けると、曹洪は凄い速さで手と頭を振つていた。

残像か。気の無駄遣いだな。

「私は貴方の意見を聞きたいのよ」

「ふむ。しかしだな」

「もしかしてわからない。なんて言わないわよね？ それとも司馬家では軍学は教えて貰えなかったのかしら？」

「……ほう。よかろう」

これが挑発なのはわかっている。

だが我が家の名を出されて黙るわけにはいかん。

「で？ どう思ったのかしら？」

谷間を強調しながらジト目を向けてくる曹操にどのような意図があるのかはわからんが、忌憚のない意見がお望みならその通りにしてやろうではないか。

「少ないな。この規模の軍勢を動かすのであれば、最低でもこの倍は用意するべきだ」

「少ないな。この規模の軍勢を動かすのであれば、最低でもこの倍は用意するべきだ」

よかった。彼はマトモだった。

栄華との打ち合わせ中に呼び出したことが不満だったのか、それともわかり切ったことを聞かれたことが不満だったのかはわからないけど、司馬朗はいつもと同様に慥然とした態度を取りつつも、私が望んでいた言葉を言ってくれた。

でもここで安心してはいけない。

「では、貴方はそれを知りながらこの量の物資しか用意しなかった、ということかしら？」

自分でも捻くれていると思う。

でも一番信頼していた秋蘭がアレだったのだ。

今だけはわかり切った質問を繰り返すことを許してほしい。

「我々は文官だ。用意して欲しいと言われた分を用意するのが仕事であって、その多寡についてを論じる立場にない。必要量を算出するの

は夏侯淵殿と曹操殿の仕事だからな」

そうね。その通り。

理想としてはそこからもう一步踏み込んで欲しかったというのはあるけれど、それはさすがに求めすぎでしょう。

っていうか、今気付いたんだけど私、彼に真名を預けたわよね？

それも結構イイ感じで預けたと思うんだけど、なんで呼んでくれないのかしら。

いや、曹太守殿から曹操殿になったと考えれば進歩したと言えるかもしれないけど。

いやいや、そういえば彼から真名を預かってないわ。

え？ なに？ もしかして私は真名を交換するに値しない……つてこと？

どうしましょう。

書簡の内容云々よりもそっちの方が気になって仕方がないんだけど。

「この量では最短距離を最速で駆け抜け、討伐対象の賊を一撃で片付けた挙句、一切の無駄なく戦後処理を行い、最速で帰還する必要がある。できるかどうかでいえばできる。不可能ではない。だがあまりにも切り詰めすぎているため不測の事態が発生したときに対処ができない。軍事的に言えば狂気の沙汰だ。だからこそ……曹操殿？」

「あ、え、ええ。そうね。その通りよ」

危ない危ない。聞き流すところだったわ。

もしここで『ゴメン。真名について考えていたわ』なんて言ったら容赦なく蹴り飛ばされそうね。

尤も、怒りで顔を歪ませているところを見れば気が逸れていたことには勘付かれたと思うけど。

この場で指摘してこなかったのは、私に対するせめてもの温情、よね。

よし。切り替えましょう。

「だからこそ私は、曹操殿が別の解決方法を用意していたのではないかと推察していた」

「別の解決方法ねえ。具体的には？」

「向こうの太守に用意させることだな」

なるほど。道理だわ。

「元々向こうからの依頼。故に向こうに必要な経費や物資を用意させるのは当たり前のこと。そういうことかしら」

「その通りだ。だがその言い様では違うのだろうか？」

「ええ。その通りよ。少なくとも向こうの太守は、自分の腹を痛めてまで私たちの為に物資を提供しようとは思っていないわ。中央に自分の都合の良いように奏上して、中央から出た褒美の一部を私たちへの報酬として支払うつもりみたいね」

「兵も出さず、金も出さず、か。随分とお上品なことだな」

「そうね。彼らにとっては兵も金も穢れたモノですもの。故に自分の領地で賊が生まれ、暴れ回ろうと関係ない。賊なんて己が手を汚す価値はない。私のような小娘に回せばいい。報酬を払ってやるだけありがたく思え。本気でそう考えているのでしょうか」

豚が。いつまでも生きていられると思わないことね。

「では次点の現地調達だが、これも違うな」

「もちろん違うわ」

確かに孫子は現地調達は是としている。

でもそれは飽くまで調達する場所が【敵地】だからよ。

いくら豚とはいえ、立場上は同じ漢に仕える郡太守。

畢竟、その豚が治める土地は敵地ではない。

で、あればこそ現地での調達は不可能。

賊から分捕る？ どれだけ備蓄しているかさえわからないのに？

そんなあやふやなものに全軍の命運を委ねるなんてありえないわ。

「向こうで用意しない。現地で調達もしない。こちらでも用意しない。お手上げだ。俺には解決方法が思いつかん」

素直で結構。

虚勢を張らないところは好感が持てるわね。

「栄華はどうかしら？」

「わ、私も華琳お姉様がどのような秘策をお考えなのかさっぱり思い

浮かびませんでした!」

栄華も、か。

でも今回に関しては思考の放棄、とは言えないわね。

「栄華に見抜けないのも当然だわ。だって秘策なんてないんだもの」

「は?」

「あら。珍しい」

常に顔を顰めている司馬朗が怒るのを忘れて呆然とするなんて珍しいじゃない。

でもこれで分かった。

栄華にも司馬朗にも悪意はない。

ただ指示された物資を集めただけ。

そこに多少の不安はあれども、結局は二人とも「私が何かしらの策を用意しているだろう」と考えていたからこそ何も言わずに用意した、ということだもの。

これは信頼、なのかしら?

まあ、いいわ。

少なくとも二人には罰を与える必要はないということがわかったのは朗報。

……その分、秋蘭への罰が重くなるのだけれど、ね。

「そもそも私はこの書簡に記されている倍の量を用意するよう指示をだしたのよ」

「……では、なにか? 今回の件は、何者かが意図的に我々に提出する指示書の内容を改竄した、と?」

「そうなるわね」

「曹操殿が指示を出した相手は?」

「そこで項垂れている夏侯妙才よ」

「ああ、それで……」

秋蘭を見て何とも言えない表情をしている司馬朗。

貴方、そんな顔もできたのね?

「とはいえ、夏侯淵殿が内容を書き換えたわけではないのだろうか?」

「そうみたいね」

指摘したら愕然としていたし。

そもそも私の足を引っ張るつもりなら、馬鹿正直に『半分しか用意しなかった』なんて書く必要がないわ。

何も知らない振りをして『準備万端整っています』と報告しておけばいい。

そうすれば実際に物資を見ているわけではない私は、出陣するまで物資が足りないことに気付けないのだから。

尤も、気付いた時点で陳留から物資を運ばせるよう指示を出すから、大事には至らなかつたでしょうけれど。

結局今回の件を目論んだ者の目的はなんなのかしら？

遠征軍の足止め？

予定した日数で到着しなければその分被害は拡大する。

そうなれば向こうの太守から嫌味を言われるわね。

私の面子を潰すために仕組んだ？

でもこの時点で気付かれたら意味がないわ。

犯人は私を騙そうとしていながら、謀があることを隠そうともしてない。

でも、どれだけ忙しくとも最低限の確認をしてから書簡を提出してくるはずの秋蘭に気付かれない程度には巧妙に隠蔽をしている。

それはつまり私に……。

「……いや、そういうことか」  
「むっ？」

この書簡を提出した者は私の足を引っ張るために細工をしたんじゃない。

この時点で私が気付くかどうかを試したのだ。

「舐めた真似を……」

どんなつもりで私を試したのかは知らないけど、ただで済むとは思わないことね！

「……っ」

「あー。曹操殿？ 夏侯淵殿が自責の念で死になっただけだ」

え？ ああ。私が秋蘭に対して怒りを抱いたと勘違いをさせたかしら？

怒りはないわ。

多少失望したけれど。

それはそれとして。

「夏侯妙才。己が失態を悔いる気持ちがあるのなら今すぐ貴女にこの書簡を提出した担当官を捕縛して私の前に連れてきなさい」

「は……はっ！ 直ちに！」

「殺しては駄目よ。会話ができる状態で連れてきなさい」

「はっ！」

一介の文官風情が一体どういうつもりで私を試したのか。

しっかりと確認させてもらいましよう。

その意図によつては……ふふふ。

「……華琳お姉様が怖いんですけど」

「あー。話が終わったなら我々はもう帰ってもいいかね？」

「駄目よ」

逃がすわけないですよ。

っていうか、なんで栄華は司馬朗に密着しているのよ。

貴女、男が嫌いなんじゃなかった？



## 10話。それは紛れもなくヤツだった

「今のところ開墾は上手くいっています。物資も今は多少目減りしていますが、この分であれば早晚回収できるでしょう」

「なるほど。ではそろそろ新しく開墾させる土地の選定を行うべきかしら？」

「そうですね。難民は増え続けていますので労働力には事欠かないかと」

「わかったわ。司馬朗からは何かあるかしら？」

「今のところ豫州方面からの流入が多いようだから、南部に手を付けてみてはどうだろうか？」

「妥当なところね。ただ、なまじ故郷が近いと事態が落ち着いたら故郷に帰ろうとするかもしれないわよ？」

「今の豫州の政を見れば、自分の意思で帰ろうとする人間はいないと思います」

「むしろ豫州と陳留の違いを実感して、石に噛り付いても離れなくなりそうだな」

「ふむ。栄華と司馬朗が言うのであればそうなのでしょうね。わかったわ。次は南部の開墾に力を注ぎましょう」

ただ夏侯淵を待つだけではアレだということ、ついでに仕事の話をするにしてみたのだが、いやはやなんと。凄いものだな。

僅かな時間で色々なことが決定していくではないか。

この在り様は封建制に於ける上意下達の良い見本だと思う。

そんなこんなで仕事の話を進めること30分ほど。

「華琳様！こ奴です！」

雑談していた俺たちの下に、息を切らせた夏侯淵が現れた。

その手に抱えられているのが今回の下手人なのだろう。

ぱっと見だとぐっつりしている猫耳フードの少女にしか見えんが……って。

あれ？あの猫耳フード。見覚えがあるぞ。

「もしや、文若殿ではないか？」

おそらく、というか、あんな猫耳フードを被った少女が他にいるとは思えん。

しかし、俺の記憶が確かであれば彼女は袁紹のところに仕官したはずだが、その彼女がこんなところでナニをしているのだ？

「もしや、文若殿ではないか？」

「あら、知り合い？」

「ええ、まあ」

秋蘭が抱えてきた少女を見た司馬朗が驚きの声を上げた。

どうやらこの少女は彼の知り合いらしい。

本来であればさっさと拷問でもなんでもして私を試したことを後悔させてやろうと思っていたのだけれども、さっそく目論見が狂ってしまったわね。

彼女がただの小娘であれば即断できた。

でも、彼の知り合いとなると話が違う。

私を試したことを許すつもりはないけど、それはあくまで一時の感情でしかないわ。

そんなものに従って彼と親しい人間を処罰することはできない。

まして、私たちには司馬家に対してたくさんの借りがあるもの。

彼の知り合いを無下に扱うことはできないわ。

もちろん何かしらの罰は与えるけど、それだって予定よりは随分軽くする必要がありそうね。

そんなこんなで、これからの態度次第では許してやろうかと思っていたのだけれども……。

「司馬伯達っ！」

司馬朗から声を掛けられた少女は、苦々しい声を上げて司馬朗を睨みつけているではないか。

それも秋蘭の脇に抱えられたままの状態で。

威圧感もなにもあったものじゃないわよ？

というか、この子は今の自分が置かれている状況を理解していないのかしら？

それと、今のでお互いが顔見知り以上の関係なのはわかったけど、一体どんな関係なのかはわからないままね。

睨みつけられている司馬朗は「相変わらず敵意剥き出しだな」なんて笑っているけど、自分に敵意を剥き出しにしている相手に対してそんな軽く接していいの？

なんだか今にも噛みついてきそうなんだけど。

いや待て。笑っている？

あの司馬朗が？ 本当に？

「え？ 司馬朗さんって笑えたんですか？」

「……まさか」

うん。栄華も秋蘭も驚いているからどうやら私が幻を見ているわけではなさそうね。

……一体どういう関係なのかしら？

「司馬伯達っ！」

縄で縛られて俵持ちにされている最中であつても俺に対する敵愾心を隠さないとは、さすがは文若。

うむうむ。しばらく会っていなかったが、懐かない猫のような気性は健在なようだなによりだ。

「……どういふ知り合いなのかしら？」

牙を？ いている文若を微笑ましい気持ちで見っていたら、曹操から「知っているなら紹介しろ」という視線を向けられてしまった。

うむ。確かにここで睨みあつても仕方がないな。

というか、曹操は彼女のことを知らないのだろうか？

いや、顔を知らないのか。

「彼女の名は荀文若。豫州は潁川荀家に於いて神童と謳われていた人物です。洛陽にいたところに何度か会う機会があつた関係でお互いそこそこに知つた仲なのですよ」

猫のような性格もそうだが、発育があまりよろしくないうえ、普段から露出の少ない猫耳パーカーを着込んでいるので、俺のちん〇に対して極めて優しい人物なのだ。

「荀文若！へえ、彼女があのだ……」

さすがは優秀な人材が好きで曹操である。

予想した通り本人の顔は知らなかったようだが、存在自体はしっかりとリサーチしていたらしい。

「貴方が言うのであれば本人で間違いないようね。でも彼女は麗羽のところには仕官したと聞いていたのだけれど？」

いや、麗羽ってだれよ。

おそらく袁紹の真名なのだろうが、知らない人間の真名を告げられても困るんだよな。

そういうところだぞ。

別に他人のことだからどうでも良いのだが。

真名の話になると面倒な感じになりそうなので、とりあえず話を進めよう。

「私もそう聞いていました。だからここでこうして顔を合わせたことを驚いています」

いやマジで。お前は何をしにここに来たんだ？

あ、もしかして職員として派遣されてきたのか？

それなら納得だ。

それに、彼女が本気で工作をしたのであれば夏侯淵が出し抜かれても仕方がない。

書類仕事に関してはそれほど優秀なのだ、この猫耳は。

優秀だからこそ敵に回ったら厄介なのだ。

実際夏侯淵が出し抜かれたせいで、こうして面倒ごとになっているしな。

離間の計と考えればこの時点で成功しているのだ。

書類仕事一つでここまで陣営を苦しめることができるのだから、さすがの智謀と言えよう。

しかしながら疑問はある。

それは彼女が何故今もここにいるのか？　ということだ。

いや、策を実行したのはわかる。

だが物資を少なく用意させることで遠征を失敗させるにせよ、曹操

と他の部下の間に軋轢をつくるにせよ、我々に回ってくる書類の偽造に成功した時点で策は成っている。

そうである以上、この場に彼女が残っているのはおかしい。

具体的に言えば、彼女がさっさと陳留を脱出していないのがおかしい。

陳留から出ていればこうして夏侯淵に捕まることなどなかっただろう。

少なくとも数日は稼げたはずだ。

下手人に逃げられた夏侯淵の評価は地に落ちるし、実質的に武官の仕事を統括していた夏侯淵の評価が落ちればそれだけ曹操陣営の動きは鈍くなる。

策としては十分だろう。

しかしここで下手人として捕まってしまえば話は別。

事実、下手人が文若と知った俺や曹操は夏侯淵の能力不足ではなく、文若の手際に注目してしまっているのだからな。

これでは画竜点睛を欠くどころの話ではない。

下手人は現場に戻る。なんて言葉も聞いたことはあるが、彼女はその結果どうなるかを予想できないほど愚鈍ではない。

というか、自分で仕掛けた謀略を自分で台無しにするような愚か者にこんな真似ができるはずがない。

つまり彼女の知恵は曇っていない。

それなのに彼女はここにいて、こうして捕らえられている。

逃げる気配もない。

何故だ？ わからん。

わからんことは素直に聞こう。

「それで、文若殿。貴殿はなぜここにいるのだ？」

「あ、貴方が……言うに事を欠いて、貴方がそれを私に問うの!？」

なんだろう。めっちゃ驚かれたんだけど。

しかも恨みがましい口調と殺意が籠った視線付きで。

「……なるほど、そういうことね」

隣で観察していた曹操はこれだけでナニカを掴んだらしい。

さすが曹操。侮れん。

「荀文若。正直に答えなさい。貴女、私を試したわね？」

試す？ 曹操が物資の不足に気付くかどうかを試したのか？

何のために？ ああ、いや、見極めか。

「……はい」

「その理由は私が主君として正しいかどうか見定めるため。違うかしら？」

「はあ？」

横で聞いていた夏侯淵と曹洪が揃って声を上げた。

うん。わかる。わかるぞ。

そんなのに巻き込まれたのか!? って思ったんだろう。

気持ちはわかる。

ただな。この時代に限らず仕官する前に相手の器量を試すというのは稀によくあることだ。

それが名士だの知恵者と呼ばれるような、自分の価値を高いと思っている輩であれば猶更な。

ここでわざわざ曹操を試したということは、文若は袁紹の下を去ったのだろう。

で、自分の主君にふさわしい人物を探すことにした彼女は、最近名を上げている曹操を見定めることにした。

その方法が今回の策というわけだ。

これに気付くなら良し。

気付かないなら自分の主君にふさわしくない。

そんな感じだろう。

他の人間がやれば何かしらの罰を受けることになるだろうが、それをやったのが彼女となれば話は変わる。

なにせこれは名士を登用する際の通過儀礼のようなものだからな。

自分が試されたことを怒って罰を加えれば名が落ちる。

故に試された人間は鷹揚に受け入れるしかない。

その際どういう態度を取るかまでが試験である。

曹操とて、自分を試したのが一介の文官ではなく、世に名高き荀文

若だとわかれば不満はないのだろう。

実際先ほどの怒りは霧散しているように見える。

いや、怒りが霧散したどころか、近年稀にみるドヤ顔を披露している。

まあ、きつちり試験に合格したわけだしな。

それも名家として名が知られている荀家の人間が出した試験に。

そら誇らしくもなるだろうさ。

「ふふっ」

ご機嫌だ。かなりご機嫌だ。

今日は宴だろうか。

文若が来てくれたら文官が増えて楽になるな。

ドヤ顔でポーズングをしている曹操を横目にそんなことを考えていたのだが、現実はそのままで甘くなかった。

「違います！ 私は初めから曹操様こそが我が主君にふさわしい人物であると考えていました！ その私が曹操様の器を試すなんて不遜な真似をするはずがありません！ そう、そんなことは天地がひっくり返ってもありません！」

なんと。曹操に試験を課した当の本人が、血を吐くような声をあげて反論してきたではないか。

しかし、なんだ。その反論は良くないぞ。

「……………え？」

見ろ。ついさっきまで自信満々に「私はわかっているわよ」とドヤ顔していた曹操が、頬をヒクつかせて硬直しているじゃないか。

そりやな。自分が自信満々で言ったことが『天地がひっくり返ってもありえない』なんて言われたらそうなるよ。

文若。褒められながら梯子を外された曹操がどう思うかを考えろ。

「私がこのような真似をしたのは、曹操様に私の価値を知ってもらったためです！ それ以外の意図はありません！」

おお。止めを刺しにきやがった。

「……………え？」

おいおい文若。曹操に仕えたいというならちゃんと相手の顔を見

ろ。

曹操のライフはもうゼロだとなぜ気付かん。

「だから曹操様！ 私の策を聞いてください！」

献策？ 気になるが、それどころじゃないな。

「……」

なんだかんだで褒められているのはわかるので怒るに怒れない。

さりとしてこのまま献策を聞き入れるのもなんか違う気がする。

今の曹操の心境を言い表すならこんなところだろうか。

「あく曹操殿。差し支えなければ私が話を聞きましょうか？」

「……ええ。そうね。うん。お願いするわ」

結局どうしていいか分からなくなっただけで固まっていた曹操があまりにもアレ過ぎて見ていられなくなった俺は、差し出がましいとは思いつつ彼女に対して助け船を出すことにしたのであった。



## 11話。許されるはずもない曹操love

「文若殿。これからは曹操殿に代わって俺が問おう」

「な、なによ！ アンタなんかに答えることなんて……」

「いや、目の前で見て、そして聞いていただろう？ 俺が貴殿への対応を曹操殿に一任されたことを。つまり俺の問いは曹操殿の問いである。そうですね？」

「……ええ。そうね。この場に限ってはその通りよ」

「だ、そうだ」

「くっ」

当事者全員が認めたところで再開しようか。

「先ほどからの話を纏めると、貴殿は己の価値を曹操殿に知ってもらいたかった。その方法として直接献策する場を得るため、あえて今回用意する物資を減らすよう書簡に細工をしたのだな？」

言っていて意味が分からんが、そういうことだよな？

「……その通りよ」

「なるほど。では次だ。貴殿はその行いが罪になることを理解しているか？」

今も昔も公文書の偽造は犯罪である。

それが軍の進退に関わることとなれば、その罪はいかほどのことか。

これで誤魔化すようなら如何に名家の試しという名目があっても処罰をしなければならぬが……。

「……ええ。理解していたわ」

誤魔化しはなし、か。

「素直でよろしい」

本当は全然よくないが、曹操も一度は「それが自分を試すための所業だったらしょうがない」と認めたからな。

俺が混ぜ返す必要はない。

その上で文若も罪を認めた以上、あとは曹操と彼女の問題だ。

だから聞きたいのはそこではない。

「では詳細について問おう。先ほどの供述では『己の価値を知ってもらうため』今回の儀に及んだとのことだったが……曹操殿の器に不足がないとわかっていたのであれば普通に仕官したあとで献策でもなんでもすれば良かったのではないか？ 何故そこに策を弄する必要があつたのだ？」

「……そうよ。なんで普通にこないのよ」

曹操がボソツと言ったが。これが全てである。

荀文若が仕官しにきたと知れば、曹操は普通に迎え入れたはずだ。

それなのに曹操と会う前にこんな犯罪まがいのことをしていたら評価が落ちるだけではないか。

それも曹操だけではなく、今回迷惑をこうむることになった全員の評価が。

「……」

実際踏み台にされた夏侯淵は殺意を込めた目で見ているしな。

少なくともこの時点で相当マイナスだぞ。

「そ、それは……」

「それは？」

なんだ？ 嘘は吐くなよ？

俺はともかく、他がヤバいからな。

「そ、曹操様には荀家の人間だからどうこうではなく、私個人の能力を見て欲しかったのよ！」

「子供か」

いや、子供だったわ。

「なんですって!?!」

思わず呟いた言葉に噛みつかれてしまったが、そうとしか言えんよ。

「宗家の跡継ぎが家の価値を否定してどうする。それも含めて荀文若という人間の価値ではないか」

「うっ」

「だいたいだな。貴殿が曹操殿の下に仕えることになった場合、ただでさえ文官に乏しいことを自覚している曹操殿は、貴殿が持つ能力は

もとより荀家が積み重ねてきたその人脈も宛にするだろう。もし人材を斡旋して欲しいと頼まれたら貴殿はどうするつもりだ？ まさか『私を荀家の人間として見ないでください』と言って人材の斡旋を断るつもりか？」

「私が曹操様のお願いを断るはずないじゃない！」  
「だろいな」

文若個人の思惑はさておくとして。

人材の斡旋とは、紹介される側だけでなく紹介する側にも得があるものだ。

まして紹介されるのが、現時点でさえ徳政で以て名を挙げつつある勝ち馬候補こと曹操である。

曹操は人材を得てホクホク。

紹介された人材は曹操の下で働けてホクホク。

荀家は曹操に感謝された上で、紹介した人間から紹介料やら何やらを貰ってホクホク。

まさしく三方良し。

名家とはそうやって勢力を拡大してきたのだし、文若とてその恩恵を受けてきた人間だ。

まして彼女は曹操に認められたいと言っている。

で、あればこそ彼女が荀家の力を使わないなんてことはありえないのだ。

そのことをどこまで理解しているのやら。

それだけではない。

「そもそもの話、元々曹操殿は献策の内容を重視する人物であって、献策した相手の家柄を重視するような人物ではないぞ？」

「その通りよー。もつと言ってやってー！」

俺の影から小声で叫んでいる様からは想像できないかもしれないが、彼女はこの時代には珍しく『誰が言ったか』ではなく『何を言っただか』を重視する人物なのだ。

なんならその辺でうろついている賊の意見であっても、そこに理があると判断すれば採用するだろう。

それくらい器は有しているのである。

もちろん現実問題として、そう簡単に賊の意見が曹操の耳に入ることはない。

それで言えば一文官であっても同じだろう。

よって、もし文若が荀家の人間ではなくその辺にいる文官でしかなかったのであれば、今回のような小細工をする意味はある。

相当な無理をしなければ、一介の文官が出陣を控えた曹操に献策をするなんてことはできないからだ。

だが荀文若であれば話は違う。

荀文若からの献策であれば、その策を採用するかどうかは別として曹操は必ずやその献策に耳を傾ける。

だから文若はそこで策の内容の評価をしてもらえばよかったのだ。普通のルートで普通に献策できるだけの立場を有しているのだから、わざわざ小細工を弄して他人に迷惑をかける必要はないのである。

それともう一つ。献策ということだったが、俺が知る限り彼女は……。

「ねえ司馬朗」

完全に再起動を果たした曹操が動き出した。

「なんでしよう」

「彼女は献策したいって言っていたわよね？　貴方から見て彼女の能力はどうかしら？」

それな。

「私が知る限り、彼女は政略向きの人間です。人脈を駆使した宮廷工作や、都市の管理などであれば十分以上の力を発揮できるでしょう」  
さつき話していた土地の開発なんかであればかなり役に立つはずだ。

「軍才は？」

それな。

「……彼女は軍を率いた経験はありません。成功の経験も失敗の経験もしていない人間の能力を論ずる術を私は持ちません」

「それは、駄目ってことかしら?」

誤魔化しは許さないってことか。

正直こういうのは曹操自身に判別して欲しかったのだが、仕方あるまい。

「……向いていないと思います」

「んな?」

そうなのだ。俺が見たところ文若は確かに優秀な文官だが、その能力は政略向きであって軍事には、特に戦術的指揮官や戦術補佐官としての能力は低いと知っている。

無論、その辺の賊相手であれば策に嵌めることはできるだろう。だが、それだけだ。

本物の軍師を相手にしたら軽く捻られるのではなからうか。

それだけではない。

彼女には致命的な欠陥がある。

「あら。彼女は軍を率いた経験はないのでしょうか? それなのになぜそう断言できるのかしら?」

「そうよ! 曹操様の前で勝手なこと言わないで!」

お前はもう少し自分の立場を弁えろ。

というか、何故自分に軍事的な才覚があると思っているんだ?

逆だ。お前を軍事に関わらせたら軍が崩壊するぞ。

「能力がどうこう以前の問題ですよ。なにせ彼女は極度の男嫌いであると同時に、男性への差別意識が強く、その態度を隠すことができないという、軍師としては致命的な欠点を持っているのですから」

「はあ!? それの何処が欠点なのよ!」

「自覚がないのが最大の問題だな」

「なんですって!?!」

軍師が感情的になってどうする。

そういうところだぞ。

「いいか文若殿。将はともかく、兵の8割は男だぞ。それなのに男を差別するような人間が軍師になったらどうなると思う?」

曹操たちとの違いは、曹操たちは男を軽んじてはいるものの、差別

はしていないというところだな。

少なくとも夏侯惇や夏侯淵より強い男はいないのは事実だし、曹操や夏侯淵はそれを理由に兵士を無駄に殺すような真似をしていない。夏侯惇に至っては先陣を切って突っ込むからな。

あれで「男を殺そうとしている」という悪評を立てることはできないよ。

そしてそれは曹操や夏侯淵も同じだ。

だが戦場に出ない荀文若は違う。

「どうなるって、別に……」

「ああなるほど。そういうことね。それなら確かに彼女は軍師には向いていないわね」

「曹操様!?!」

さすがに曹操は気付いたようだな。

「いいか文若殿。兵の大半が男である以上、死傷する兵の大半もまた男となる」

「そんなの当たり前じゃない! 馬鹿にしているの!?!」

半分はそうだな。まだ気付かないお前を馬鹿にしているよ。

「では聞こう。軍の内部で『男の被害が多いのは軍師の荀文若がわざとそうなるように仕向けたからだ』という噂が立ったらどうなると思う?」

「はあ? そんなのただの讒言でしょ!」

「その通り。だが、噂を否定することもできない。何故なら男女比だけで見れば男性の方が死傷者が多いというのは紛れもない事実だし、貴殿が普段から男性を邪魔者扱いしているのもまた事実なのだからな」

「ぐっ!」

火のないところに煙は立たない。どこの話ではない。

すっかり燃焼させているのだ、この猫耳は。

「噂を払拭できない以上、兵の不信感を解消することはできない。そのうち更なる戦が発生し、男の兵に被害が出れば噂の信憑性が増す。そうして不信感は積もり続ける。そうなれば貴殿の立場はどうなる

と思う?」

「どうってそれは……」

兵からの恨みを一身に背負う軍師とか最低だろう。

それを使う主君もな。

「立場が悪くなるのは貴殿だけではないぞ。兵の不信感は、文若殿を軍師として使っている曹操殿にも向く」

「でしょうね。その時点で印象は最悪。もしかしたら暗殺されるかもしれないわね」

「そんな?」

「かといって、曹操殿とて事実無根の噂話を理由に文若殿を解任することはできぬ」

あくまで結果的に男が死んでいるだけで、意図的に男を殺そうとしているわけではないからな。

それを知りつつ罰を下せば、荀家を始めたとした名家たちからの反発は必定。

そうである以上、曹操は文若を罰することはできない。

だが文若を使い続ける限り悪評は止まないわけで。

「そうね。でも噂を払拭できない以上、兵の不信感は拭えない。兵の信頼を失った将がどんな末路を辿るのかは論ずるまでもない、か」

「そういうことです。霸道を歩むのは結構なことですが、末路まで項羽に倣う必要はありません。故に曹操殿には彼女を軍師として使うべきではないと進言します」

政務官として使う分には良いと思うがな。

李下に冠を正さずというが、彼女の場合はまさしくそれだ。

普段の態度が悪すぎて、そこにいるだけで悪意を疑われるのである。

悔い改めろ。

もちろん悪評が広まる前に態度を改めることができれば話は違いますが、正直無理だと思う。

三つ子の魂百までというし。

「なるほど。納得しかないわね」

「そんなあ……」

曹操の言葉を受けて絶望したような表情を浮かべる文若。

だがまあ、自業自得だと思うぞ。

あと、早めに夏侯淵に謝っておけよ。

自分はこの奴のせいで信用を損ねたのか……って感じて怒り狂っているからな。

つーか夏侯淵、目つき悪っ！

殺気が籠りすぎて変態紳士を見るような目になっているじゃないか。

……この後、一応彼女が考えていた策とやらを聞いてみたのだが、はつきりいつて策士としてはグダグダであって事を追記しておく。



## 12話。止まない痛み

ちん○痛いねん。

結局文若を処罰したり放逐したりすれば、事実はどうあれ『曹操が荀彧に試されたことを怒って処罰した』という風評が立つということ、文若が大つぴらに処罰されることはなかった。

夜に何やら叫び声が聞こえたらしいが、それは知らん。

さらに陣営として彼女が持つ能力や人脈を欲していることは事実であつた為、曹操は彼女を自陣営へ取り込むことを決定した。

もちろん扱いは軍師ではなく、政務官としてである。

これにより曹操陣営の中での役割分担が決まった。

軍権を預かる夏侯惇が太尉。

行政全般を預かる文若が司徒。

土地の開発や財政系列を預かる俺が司空と言った感じだ。

もちろん現時点ではそこまで厳密に役割が分けているわけではないので、何かあつたらそれぞれで融通するくらいの柔軟性は有している。

ただし、夏侯惇と文若の仲が極めて悪いため、うまく回すためには工夫が必要だろうと思われる。

ちなみに今まで面識がなかったはずの夏侯惇と文若の仲が悪いのは、もちろん文若のせいである。

具体的には、今回の件で夏侯淵の評価が落ちたことが原因だ。

まず、今回の件に於いて夏侯淵は『相手が悪かった』ということでお咎めなしとなっている。

主犯である文若を罰していないのに、その被害者である夏侯淵を罰するのは筋が通らない。

よつてこの判決は妥当といえれば妥当と言えるだろう。

しかしながら、夏侯淵からすれば曹操からの信頼を損ねたことや、能力に疑問を持たれた時点で十分すぎる罰だったようで、随分と気落ちしていた。

そうして凹んだ妹を慰める過程で事のあらましを知った夏侯惇が

文若を敵と認定したのだ。

気持ちにはわかる。俺だって肉親に似たようなことをされたら不快に思うだろうからな。

まして直情的な夏侯惇のこと。

彼女は敵と認定した文若に対する敵意を隠そうともしなくなったのだ。

曹操としては頭が痛い問題だろう。

この件における最大の問題は、夏侯惇が一介の武官ではなく武官の筆頭であることだ。

そのせいで軍部に所属している曹仁や曹純も文若とは距離を置くことになってしまったのである。

このままでは夏侯惇いる武官たちと、これから文若が連れてくるであろう文官たちの間で衝突が起こるのは必定。

と言うか、今でさえバチバチに火花が散っている。

存在するだけで内部に不和をばら撒くとは、なんとも恐ろしい女である。

そんな恐ろしい女が起こした騒動から二日後のこと。

俺は馬上の人となって遠征軍に帯同していた。

なんでやねん。

俺は留守居役じゃなかったのか？

せっかく曹操たちがいない間に他の県を見回って色々調査しようとしていたのに。

まあ俺とて『いくら政務官として受け入れるとはいえ、文官の筆頭が戦場を知らないのは困るわ。だから彼女には実戦を学ばせる必要があると思うのよ』という曹操の意見は尤もだと思う。

その上で『でも今のままでと春蘭とかに殺されちゃうと思わない？』という懸念も、まあわかる。

実際夏侯惇は「隙あらば殺してやる」ってのを隠さない程に嫌っているからな。

だが『だから貴方には桂花と春蘭たちの間を取り持つてもらいたいのよ』というのがわからん。

確かに武官と文官のトップの仲が悪いのは困るだろう。

君主である曹操が言えば矛を収めるだろうが、水面下で争うのは眼に見えている。

故に緩衝材が必要なのはわかるのだ。

だからと言ってそこに俺を使うのはどうだろう？

そういうのは一門であり武官と文官を兼任している曹洪にやらせるべきではなからうか。

いや、さしもの曹洪も曹操に対する献策と嘯いてあんなことを恥ずかしげもなく語れるような女が相手では無理があるかもしれないが。

いや、今思い返してもあれはない。

いくらなんでもない。

あまりにアレすぎて曹操も『それが、策？』と呆然としたくらいだからな。

そう。あのあと、曹操から「せっかくだから聞かせてもらおうかしら。荀家の神童が謳う献策とやらを」と告げられた文若が嬉々として口にしたのは、三つの理由とやらであった。

その一。

【曹操であれば自分が行った小細工に気付くことができる。だから問題は発生しない】

愕然としたね。

そうはならんやろと言いたかったのを必死で我慢した。

普通ならアウト寄りのアウトだが、名家からの試験として考えればまあ納得できなくはない。

かなりギリギリだが。

ただ所詮この時代は法よりも支配者の感情が優先される時代なので、曹操が納得すればそれでいいのだ。

そして曹操は苦虫を噛んだような顔をしながらも、文若に次を促した。

この時点で文若の意見は認められたというわけだ。

そして告げられたその二の理由だが。

その前に実はこの文若さん。

小細工が曹操にばれた場合は物資を積み直すのではなく、予定の半分の物資のまままで遠征を完遂させる自信があつたらしい。

その根拠が第二の理由。

「物資が少なければその分輜重隊の負担が減り行軍速度がはやくなる」であつた。

なんだその謎理論は。

さすがにこれには「そうはならんやろ」と突っ込ませてもらったぞ。減らせば早くなる？

ならば増やせば遅くなるのか？

二刀流なら倍になるのか？

準備期間が少なくて済むとか、物資が少なくなればそれだけ予算が浮くというならまだわかるが、数を減らしたところで輜重隊が居なくなるわけじゃないんだぞ？

行軍速度は変わらんやろがい。

そして驚きの三つ目。

「自分が指揮をとれば賊程度最短最速で片付けることができるし、事後処理も完璧にできる。だから食糧の量を減らしても問題ない」とのこと。

これには夏侯淵さえも「なんでそうなる」とツツコミを入れた。

まず自分が軍部からの信用を損ねたことを自覚していない。

この時点で軍は彼女の指揮通りに動かないだろう。

もちろん曹操が「彼女の指揮に従いなさい」と命じれば話は別だが、

さすがに無理があるだろう。

それだけではない。

そもそも荀彧は賊が何処にいて、どれだけの戦力があつて、どのような人間が率いているのかを理解しているのだろうか？

ちなみに曹操もそこまでは理解していない。

それらの情報を収集する時間も計算した上で曹操は物資に余裕を持たせていたのだ。

それを全否定する文若さんはちよつとおかしい。

また、遊びがないということは不測の事態に対応できないということ

とだ。

例えば賊が一か所に纏まっていなかった場合はどうするのか。具体的には一部の賊が食糧の調達の為に拠点を離れている場合だ。その際、遠征軍が賊の本隊を潰したところで賊は生き残ることになる。

通常であればその生き残りを探して討伐するのだが、そのためにはどうしても時間がかかる。

だが必要最低限しか物資を用意していない遠征軍に時間的な余裕はない。

そうなると向こうの太守に物資を要請するしなくなるが、向こうの太守は物資を素直に用意するような人間ではない。

それどころか曹操のせいで賊が分散してしまったと責めたてて、謝罪を要求してくるかもしれない。

曹操の面目は丸つぶれだ。

賊が逃走した場合も同様だな。

追撃する余裕がない以上、敵を逃がすしかない。

つまり討伐任務は失敗である。

どうしろというのだ。

別のケースもある。

賊が一か所に纏まっていた。

最短で討伐できた。

事後処理も最短で終わらせることができた。

と、全部予定通りに終わったとしよう。

……この時点でありえないが、そうだったとしよう。

だが、帰還の途中に別の賊を発見したらどうするのだろうか？

賊を前にして『食糧がないから放置します』だの『予定にないから放置します』だのと言えるのか？

そんなことをしてみろ。

すぐに『曹操が賊を見逃した』もしくは『曹操が賊から逃げた』と言われるぞ。

それだけではない。

賊を見逃すことで、その場で討伐していれば出なかった犠牲が出ることになる。

その場合被害者の恨みは誰に向く？

自分たちを襲った賊？ もちろんそうだろう。

賊を生み出した太守？ それも当然だ。

自分たちを見捨てた曹操？ これがまずい。

本来曹操がその賊に対処する必要はない。

故に放置したところで罪には問われないだろうし、太守に嫌味を言われてもいくらでも言い逃れはできる。

だが目の前で見捨てられた民の恨みは消えない。

なまじ助けることができるだけの兵力を持っているだけに、見捨てたという事実は重くのしかかることになる。

具体的には、曹操の支配領域が拡大したとき。

民や兵が自分たちを見捨てた人間を主として認めるかどうかという話だな。

それもこれも必要な物資を用意しなかったせいで発生するかもしれない事態である。

つまり今回文若が不要と切り捨てた物資とは、そういった不測の事態に対処するためのものなのだ。

それを捨てるなんてとんでもない。

というかだな。

今回の遠征に当たって用意した物資は、曹操が「今回の遠征であればこのくらいは必要だろう」と判断して用意させたんだぞ。

そこに何らかの理由があると考えなかったのか？

それとも曹操よりも自分の方が大局を見定める眼を持っていると思っただのか？

その辺を完全に失念していたのだろう。俺がそう確認したら、文若は顔を真っ青に染めて曹操に謝罪した。

見事な五体倒地であった。

それを受けて曹操は「荀文若に軍師としての適性なし」と判断し、彼女を政務官として登用することを決めた。

それから先ほと言った通り。

曹操は最低限の経験を積ませることが必要と判断して文若を従軍させたし、文若が武官に殺されないよう顔見知りである俺を帯同させたというわけだ。

もしかしたらこうして俺を傍に置くことで、男性に慣れさせるというのもあるかもしれない。

その辺は勝手にしてくれればいい。

暴言くらいなら聞き流してやろう。

それはもういいのだ。

だがち○こが痛いのは許せん。

ただでさえ馬に乗っているせいで常にプルプル揺れているのを見せつけられているというのに、こいつらミニスカのまま馬に乗るから色々ときどきすぎるねん。

履いているから安心しろ？　できるか。

お前ら、羞恥心はないんか？

せめて短パンを履け。

あるのは知っているんだぞ。文若が履いているからな。

このまま休憩までこれか？

休憩中に発散できるんか？

……無理だな。

誰かに見られたら『従軍中に元気になって暴走した変態の烙印』を押しつけてしまう。

だから鎮まってくれ我が息子よ。

そして息子を覆う貞操帯よ。

帰ったら休ませてやるから今は耐えてくれ。

俺も母上を思い出して頑張るから。

「ぬう……」

ああ。どうして今日もこんなに○んこが痛いんだろう。

### 13話。 やせいの ぞく があらわれた

「ぬう……」

……どうしたらいいのかしら。

司馬朗が物凄く不機嫌だわ。

怒りの気が周囲の景色を歪ませているくらい不機嫌だわ。

あまりの怒気で、周辺に人がいなくなっているじゃない。

私の護衛はどこに行ったのよ。

「華琳様……」

「ええ。 秋蘭。 わかっているわ」

護衛云々よりも、今の彼を何とかしろっていうのよね？

それはわかるわ。

軍事行動である以上適度の緊張は必要だけど、何事もやりすぎはいけない。

このままでは全軍が緊張のし過ぎで駄目になってしまう。

特に桂花が。

ただでさえ初陣ということで緊張しているのに、横にあんな憤怒の化身みたいなのがいるんですもの。

完全に委縮しちゃっているわね。

この有様では能力を發揮するどころの話ではないわ。

そういうところも可愛いとは思っただけど、彼女こそ元凶と言える存在なのが困ったところ。

大前提として、彼が春蘭が怯える程怒っているのは、賊退治ごときに自分を帯同させたことに不満があるから。

当然よね。

今回の遠征は彼ほどの武人が出るような状況ではないもの。

それだけでも彼が怒るのは当然だというのに、今回はさらに怒る理由がある。

それは私が「桂花と春蘭たちの間に入ってもらいたい」と頼んだことよ。

他に頼れる人材がいなかったとはいえ、彼にしてみれば完全にと



ばつちりですもの。そりや怒るわよね。

事の発端は桂花が小細工を弄したこと。

それだけならまだ良かったんだけど、その小細工に秋蘭が巻き込まれたのよね。

今なら相手が悪かったと言えるけど、あの時点では秋蘭が小細工を見破れなかったことだけが事実だった。

実際、私が最終確認していなかったら秋蘭はあのまま出陣していたでしょう。

今はまだいい。でも勢力が拡大すれば、逐一私が確認できるような状態ではなくなるわ。

それだけじゃない。いずれ秋蘭は別動隊を率いる将になる。

その将が小細工に気付かないのは論外よ。

だから今回の失敗に関しては『相手が悪かったから』と簡単に許すのではなく、しっかりと釘を刺しておく必要があった。

秋蘭にとってもそれは必要なことだったと確信している。

でも、それはそれとして、秋蘭が踏み台のように扱われたことを知った春蘭が怒るのは当然のことなのよね。

桂花が素直に謝罪できればまた違ったかもしれないけど、彼女は彼女で荀家を背負っているせいで、簡単に謝罪できる立場ではなかった。

主君である私や、司馬家の長男であり正式に官位を得ている司馬朗相手であればその限りではないけれど、武官筆頭とはいえ未だ無位無官の春蘭が相手ではそうもいかない。

その上、春蘭が書類仕事を苦手としているのも悪かった。

桂花は文官至上主義、とまでは言わないけど似たような価値観を持っている。

具体的には名家特有の武官を軽んじる悪癖がある。

そのせいで桂花は春蘭や秋蘭に素直に謝罪することができなかった。

素直に謝罪できなかった桂花に対し、春蘭が折れる理由はない。というか折れることができない。

もし彼女が先に折れてしまえば軍部全体が軽んじられてしまうから。

だから春蘭は謝罪を受けない限り敵意を解くことはないし、敵意を向けられた桂花も無抵抗ではいられない。

結果として武官の筆頭と政務官の筆頭がいがみ合う事になってしまった。

立場とはなんとも面倒なことね。

主君としては両者の間にあるわだかまりを解かなければならないのだけれど、その方法が難しい。

私が両者を叱責して仲良くするよう命じても意味がない。

それをやれば双方が『相手のせいで叱責をされた』と思い込むでこしよう。

状況が悪化するだけね。

だから一番簡単な解決策は、互いが互いを認めることだと思ふよ。

桂花が春蘭の武勇を認めて謝罪するに値する人間だと判断すれば良し。

春蘭も桂花の能力を認めて謝罪を受け入れればそれで良し。

これが一番無難な解決方法よね。

そう思つて桂花を今回の遠征に従軍させたのだけれども、互いを認める前に死にそうなのよね。

主に桂花が。

それも気持ちの問題ではなく、物理的に。

やるのは春蘭か秋蘭か、はたまた華侖か柳琳か。

それ以外の部隊長やなんなら一兵卒が動くかもしれない。

つまり軍部に所属している人間のほぼ全員が桂花を狙っているわ。

桂花つたらモテモテね。

……笑えない冗談はさておき。

いくらなんでも闇討ちはしないとと思うけど、従軍中に軽い嫌がらせをしたり、賊に奇襲を受けた際、故意に助けなかったりするくらいのことはいくらもやらしい雰囲気があった。

そんなことをされたら私は管理不行き届きを指摘されるでしょう。もちろん荀家や荀家に連なる家の人間から敵視されることになる。人材はいくらいても足りないというのに、こんなことでその伝手を失うのはよろしくない。

それを防ぐために桂花と同じ名家の出であり、武官にも顔が利く司馬朗に同行を願ったのだけれども、その結果がこれだものねえ。

いえ、まあ、春蘭も桂花も委縮しているし、こんな状況で嫌がらせだのなんだのができるはずがないと言えましょう。ただ、いくらなんでも度が過ぎてはいるわ。

だからなんとかしたいのだけれども、正直どうしたらいいのかわからない。

まさか不機嫌だからという理由で帰還させるわけにもいかないし。そんなことをしたら「何のために連れてきたんだ！」って言われて私が空を舞うことになるでしょう。

普段の彼ならそんなことはしないと断言できるけど、今の彼は無理。

相手が私であつても殴り飛ばす。

そんな雰囲気かブンブンするわ。

ああ。どこからか彼が怒りのままに斬り殺しても問題ないような相手が出てきてくれないかしら。

出てきたら即座に出撃させてあげるのに。

「か、華琳様ー」

「どうしたの、春蘭？ 彼についてならもう少し考えさせてほしいのだけど」

彼が放つ重圧に耐えるのがきついのはわかるわ。

でもね、いくら私でもできることとできないことがあるのよ。

「いえ、朗報です！ 先発させていた物見から報告です。前方で何者かが戦闘を行っているとのこと！ 詳細は不明ですが少なくとも片方は賊の可能性が高いそうです」

「なんですってー！」

賊。つまりは何をしても良い相手よね？

よくやったわ！ これで勝てる！

「司馬朗を向かわせなさい！」

「はっ！」

「前方で戦闘をしている形跡在り。相手が賊ならこれを討伐せよ、か」  
「う、うむ！ 司馬殿にとってはつまらぬ相手かもしれないが、退屈しのぎにはなるだろうか？」

「退屈しのぎ、な」

夏侯惇よ。お前は俺を何だと思っているんだ。

いくら相手が賊とはいえ、ストレス発散の為に人を殺すようになってたら人間お終いだぞ。

曹操はそのあたりもう少し教育するべきだと思う。

あと容易に間合いを詰めて来るな。

片乳と生足が見えるだろうが。

慎みを持って慎みを。

ちん○痛いねんて。

14話。 きよちよ が仲間になってくれた

夏侯惇への情操教育については後で考えることとして、とりあえず戦闘が行われていると思いき所に向かったところ、そこでは確かに戦闘が行われていた。

ただし戦っていたのは、数十人の賊とたった一人の子供だが。

「賊は出ていけえええ！」

「くそつ！ 強えええ！」

「強ええが所詮はガキ一匹だ！」

「そうだ！ 困め！ 困んでぶったたけ！」

「おおお！」

「負けるかあああ！」

戦闘は一進一退。というか微妙に子供が押しているようだ。

「ふむ。僅か数十人の賊を倒せぬ子供が未熟なのか、それとも僅か数十人で超人を抑えている賊が優秀なのか」

子供が現時点でもそこそこ強い超人なのは見れば分かる。

きちんとした師が鍛えれば今以上に強くなるだろう。

それはいい。問題はその超人である子供を抑えている賊の方だ。

子供がトゲ付きの鉄球を振る度に人が飛んでいるのだが、そんな中でも士気が挫けていないのは異常の一言。

なにが彼らを駆り立てているのやら。

それとも勝算があるのだろうか。

「見た感じ勝ち目なんざなさそうだが……」

いかに相手が子供であっても超人は超人である。

一般人がそれに勝つのであればそれなりの能力や手段が必要だと思っただが、そういったものの気配はない。

というか、普通に怖くないのか？ トゲ付きの鉄球だぞ？ 俺が超

人じゃなかったら一目散に逃げるぞ。

いや、もしかして彼らはああいう武器を相手にするのに慣れている

？ もしくは対超人用の技能を積んでいるのか？

「ふむ」

もしそんな技能があるのであれば、是非配下に修得させたいものだ。

夏侯惇クラスとまでは言わないが、超人を僅か数十人で抑えることができる集団が配下にいれば、今後の戦闘がどれだけ楽になることが想像に難くないのだからして。

「問題はあれがただの賊なのか、それとも何かしらの訓練を積んだ特殊部隊なのか、だな」

後者ならまだいい。

だが前者であれば、ただの賊が対超人用の技能を有していることになる。

「……侮れんな」

「そんなことを言っている場合か！ 子供が一人で戦っているのだぞ！ すぐに助けねば！」

「おいおい」

そう言って駆け出していく夏侯惇だが、世間一般の価値観からすれば彼女もまだ子供である。

発育は良いが、まだ子供なのだ。

だからこそ俺は大人に任せておけと思いつつ夏侯惇に並びかける勢いで馬を走らせる。

そう、大人の義務なのだ。

決して夏侯惇に前を走られると中腰になったケツを見せつけられることになってちん〇が痛くなるのが嫌だから全力で駆けだしたわけではない。

「うおおおおお！」

「なっ！ 新手だと!？」

「そこだあああ！」

「うわあああ!!」

如何に特殊な訓練を積んでいるとはいえ、超人に挟まれた賊に勝ち目などあろうはずもなく。

「こんなものか！ 他愛もない！」

「……とりあえず生きているのを捕えろ。アジトの位置や賊の数を確

認する」

「はっ」

夏侯惇が鎧袖一触で蹴散らした賊の中で生きているのを尋問用に捕まえた。

このうち半数は連中の眼の前で〇して、残りの半数を調べる感じがいいと思う。

「賊についてはこんなところだな。で、その少女に聞きたい」

「は、はい！　なんででしょうか？」

「そこまで畏まる必要はない。我は陳留太守曹孟徳旗下の遠征軍に所属する司馬伯達という。君の名は何という？」

「そ、曹孟徳さまですか！　聞いたことあります！　山の向こうの太守さまで、僕たちのところの太守と違って民に優しい政をしている人だつて！」

「ふむ」

隣の郡にもそう言った噂が立っているとは驚きだ。

いや、だからこそ難民が流入してくるのだろうか。

しかしこの少女。曹操には様付けなのに、自分のところの太守には敬称をつけないのな。

これが極々自然に行われているのだから、どれだけ民心が離れているのかが分かろうというものだ。

曹操の政が認められるのは良いことだが、他の太守との差が如実に出てしまっているのは問題かもしれない。

小人の嫉妬ほど面倒ものはないからな。

今回の遠征もその一端と思えば何とかした方がよさそうだが、はてさてどうしたものか。

つーか名前を聞いたんだから名乗って欲しいのだが。

「私の政が褒められるのは嬉しいわね。それもこんな可愛い子に」  
「ふえっ！」

これからのことや少女の名前を考えていたらいつの間にか曹操がきいていた。

機嫌が良さそうなのは、言葉通り政を褒められたからなのか、それ

とも優秀な人材を見つけたからなのか。

ともかく、少女の相手は曹操に任せておけば問題あるまい。

懸念があるとすれば少女を気に入った曹操が閨に連れ込むことだが、まあ如何に曹操でも他領の子供に手を付けることはあるまいよ。

……しかしアレだな。

あの少女もあの年で立派な痴女だったな。

見せパンかどうか知らんが、あんな形で下着を見せていたらあの年代の子供が好きな紳士を誘うようなモノだろうに。

もちろん俺の息子は反応しなかったが。

ああ、もしかしてアレか？

賊が戦い続けていられたのは連中がそういう連中だったからか？

……この国、終わってるな。色んな意味で。

とりあえず尋問するか。

「春蘭。貴女ねえ。何のために司馬朗を先行させたのか理解していなかったのかしら？」

「申し訳ございません。その、つい……」

「つい、じゃないわよ」

まったく。司馬朗の憂さ晴らしに丁度いいと思って賊と戦わせたはずなのに、そのほとんどを春蘭が倒してどうするの。

賊を尋問したことですっきりしたのか微妙に機嫌が直っていたから良かったものを、もし機嫌が悪いままだったらどうするつもりだったの？

彼の天幕に送り付けて欲しいのかしら？

「まあいいわ。次から気を付けなさい」

「はっ」

最初の目的であつた彼の怒りが鎮まったことは偶然だったけど、それ以外は立派に務めを果たしたからね。

なにせ賊の情報を得るだけでなく、有能な人材を得たんだもの。

多少の誤算は呑み込みましょう。

それにしても許緒、いえ、季衣ほどの人材を放置しているだなんて、



やっぱりこの領主は無能ね。

他にも人材がいなかどうか調べた方がいいかしら？

ああ、いや。今は賊の討伐を優先しなきゃ。

「それで、尋問の結果わかったことを確認するわ。賊の数はおよそ3000。最初からこの数だったわけではなく方々から賊が寄せ集まってできた集団。頭目はいるものの絶対権力者というわけではなく、発言力を持つ幹部が複数存在する。拠点はここから少し離れたところにある古い砦。基本兵装は剣。鎧はほとんどなし。食糧などの備蓄もあまりない。こんなところかしら」

「そのようだ」

「信憑性は？」

「虚偽の可能性もあるが、尋問した5人が5人とも打ち合わせもなしに口裏を合わせるの難しいだろう。故に全員の意見が一致している情報は正しいと考えて良いかと」

「なるほどね」

しかもその尋問が、目の前で仲間を殺した後にやったのであればなおさら嘘は吐けないでしょうね。

「ではその情報を念頭において策を練るとしましょう。司馬朗からは何かあるかしら？」

「策、と言つてもな。現時点ではなんともいえん。というか、策が必要な場面か？」

「……言わんとしていることはわかるわ」

実際、相手が寄せ集めの賊と分かった時点で策もなにもないのよね。

あ、そうだわ。

「桂花からは何かあるかしら？」

「私に仕える前から『賊如き完璧に処理できる』と豪語していた桂花なら何か凄い策があるかもしれない。」

「申し訳(ご)ざいませぬ。実際にその砦を見てみないことには……」

「でしょうね」

そうなるわよね。ええ、知っていたわ。

というか、ここに至つて砦も見ずに賢しらに策を立てていたら殺されていたわよ。司馬朗に。

とは言え成長の片鱗が見えたことは良いことだわ。

やっぱり現場を知ることが大事ね。

これで今後は桂花も無茶な献策はしなくなることでしようし。

うん。必要な情報は得た。思わぬ人材も得た。桂花に経験も積ませた。あとは勝つだけ。

「では全軍で向かいますしょうか。その砦とやらに」

「この太守が手も足も出なかつた賊を一方的に滅ぼして、この曹操の名を確かなものにするのよ。」

15話。賊の討伐で大事なことは逃がさないことである

おおよそ2000の官軍が来ていることを知った賊たちはどう動くか。

自分たちの方が兵が多いという事実を重視して野戦を挑むか、はたまた官軍と正面から戦うことを厭い籠城を選ぶのか。

野戦を挑むなら何処に陣を張るのか。

籠城を選んだ場合援軍の宛てはあるのか。

諸々の懸念事項はあるものの基本的には現場に到着してみないと分からないということで、砦付近に向かう我ら曹操軍。

当然途中に罠があつたり、奇襲を受けても良いように警戒しながら進んだため行軍速度はそれほど早くはない。

逃げ帰った賊から情報が伝達されたことは確実である。

ちなみに賊を尋問した際に対超人用の特殊部隊が存在するか否かも確認したが、結果は否。

許緒と戦っていたのは許緒に殺意がなく、攻撃が緩かったから。賊の士気が保たれていたのも許緒に殺意がないことがわかっていたからだった。

なんともつまらない結果である。

それはそれとして、軍議の時間だ。

「一番厄介なのは賊が一目散に逃げだすことね」

わかりきったことであるが、あえて口に出すことで注意喚起をしているのだろう。

夏侯惇とか言われなければ普通に忘れそうだしな。

「そうだな」

兵法上の考えでは『戦わずに勝てるのだから逃げられた方が良い』という意見もあるかもしれない。

だが相手は敵国の兵ではなく、ただの賊である。

逃げたからといって領地を接收できるわけではないし、略奪ができ

るわけではない。

むしろ一度も戦鬪をせずに逃げられた場合、こちらは追撃をしなければならぬのだ。

しかしながら、地の利が向こうにあるため潜伏されたら対処のしようがなくなってしまう。

こちらは遠征軍であり、物資に限りがある以上、搜索に割ける時間は多くない。

最悪、砦を破壊して「賊を蹴散らした」と宣言すればいいだけなのだが、当然賊が滅んだわけではない。

我々が帰った後に再度集結し、略奪を繰り返すだろう。

そうなればこの太守から曹操に対して苦情が入る。

此方としては援軍にそこまで責任を課せられても困ると言い切れれば良いのだが、それで困るのは民である。

特に今回は、村人である許緒を仲間に加えたことでこちらの民に対しても気を使う必要があるため、賊に逃げられるのは困るというわけだ。

「次点で困るのが野戦に持ち込まれることでしょう」

「そうね。その通り」

「え？」

俺と曹操の会話を聞いた夏侯惇と文若が同時に声を挙げた。

どうやら二人とも野戦で勝てばいいと考えていたようだ。

お前ら、仲良いな。なんて言わない。

絶対に面倒になるからな。

「二人とも、野戦がなぜ困るのかわからないのかしら？」

「……敵の方が数が多いので、野戦となればこちらにも被害が出るから、でしようか？」

「はっ。青びようたんにはわからんだろうが、我らは精鋭だ！ 賊如きに後れを取るような鍛え方はしておらん！」

「はあ？ いくら鍛えていても数が違えば不覚を取るでしょ！ それともなに？ アンタが鍛えた精鋭様なら3000の敵を相手にして1人も犠牲が出ないともいえるの!？」

「ぐっ。それは……」

「精銳なら猶更犠牲になる数は少ない方がいいでしょうが！ そんなこともわからないやつが武官の筆頭を名乗っていいと思っっているの!?!」

「なんだとー!」

言っていることは分かる。

だが感情的になるのは頂けんな。

「文若殿。そこまでだ」

「なによ！ アンタもコイツの味方をするっていうの!?!」

やれやれ。頭に血が昇るのが早すぎる。

ここまですると、呆れるよりも先に、それで良く軍師になろうと思っただと感心してしまう。

それはそれとして、さっさとこの不毛な時間を終わらせよう。

「夏侯惇殿の味方、というよりは曹操殿の味方、だな」

「はあ?」

冷静さを欠きすぎだ。

これだから猫耳は。

「わからんか？ 夏侯惇殿を武官の筆頭に任じているのは曹操殿だぞ」

「そうね。つまり桂花は私に見る目が無い、と言っているのかしら?」  
「あつ!」

俺の言葉に曹操が便乗したことであろうやく自分が何を言ったのかを理解した文若がその表情を絶望に染めた。

その顔を見た曹操が嗜虐的な笑みを浮かべるが、そういうのは後にしてほしい。

「とりあえず野戦になると困る理由だが、先ほど文若殿が言ったように無駄な犠牲が出ると言うのも確かにある」

「……それだけじゃないってこと?」

「無論。その理由だが……曹操殿、私が言っても?」

「かまわないわ」

「では、僭越ながら曹操殿に代わって説明しよう。野戦になって困る

理由、それは」

「それは?。」

「敵に逃げられるからだ」

「……はい?。」

はい、じゃないが。

「いいか? ここには曹操殿を始め、夏侯惇殿、夏侯淵殿だけでなく曹仁、曹純、さらには私と許緒がいる。これだけの将がいれば、多少向こうの方が数が多くとも正面から蹴散らすこと自体は簡単にできる」「うむ!。」

「……まあ、そうでしょうね」

「問題はその後。蹴散らした賊を全滅させることができるか否かにある」

「む?。」

「あ、そうか!。」

夏侯惇はまだ良くわかっていないが、文若は気付いたな。

「賊が散り散りになって逃げ出せばそれを追わなくてはならない。その後は先ほどの一目散に逃げられるのと同じだな」

違うのは数が減っているか否かだけだ。

いや、下手に頭目やら幹部を討ち取ってしまったら再結集せずにバラバラになって各地で略奪を行うようになるので、一目散に逃げられるよりも悪い結果になりかねない。

一応賊との戦いには勝利しているので曹操の名が落ちることはないが、あまり褒められたものではない。

「そういうわけで、我々としては敵に籠城してもらうのが好ましいというわけだ」

「それはわかったわ。でも」

「なんだ?。」

「攻城戦には三倍の兵が必要とされているわ。でも向こうの方が数が多いわよ? 籠城されたら勝てないんじゃないの?。」

「ああ、それか」

「桂花。兵法書に書いてあることはあくまで基本であって、それが全

てではないのよ」

「そ、それはそうかもしれませんが……」

「司馬朗。続きを」

「はっ」

これが文若の限界なのだろう。

曹操も完全に見切りをつけたようだ。

「確かに攻城戦に於いては攻勢側に3倍の兵が必要とされている。だが、それはあくまで籠城した側が籠城戦を行うことができる場合に限る」

「どうということよ?」

「籠城を行うには必要なものがいくつもある。それは堅固な城壁であり、堅固な城門であり、その上から射かけることができる弓兵であり、潤沢な矢であり、城壁から落とすことができる石や木材であり、なにより長期の籠城に耐えうる食糧が必要だ。連中はそのどれも持っていない」

もつと言えば外部からの援軍や兵を纏めあげて的確な指揮を行える大将も必要だな。

「そうね。今回賊が拠点としている古びた砦には堅固な壁もなければ城門もない。剣が主体の賊に潤沢な矢はない。元々籠城することを考えていないから石なども用意していない。それどころか食糧がない。つまり追い込んだ時点で勝ちが決まるわ。あとは逃がさなければいいだけね」

「こちらの勝利条件は賊を全滅させること。逆に言えば賊を逃がせば負けなのだ。故に下手に抵抗されるよりも籠城してくれた方がいい。ついでにいえば砦がある山林全体を囲むより、砦の出入り口を囲む方が楽だ」

「な、なるほど」

「よくわからんが、とりあえずこのままが好ましいということだな!」

「春蘭、貴女……」

「華琳様……」

本当にこんなのが筆頭で良いんですか? って眼だな。まあ気持

ちはわからんでもないが。

少なくともお前さんが兵を指揮するよりはマシだと思うぞ。

「ともかく、砦の正門と裏門に兵を配置しましょう。正門に曹操殿率いる1500。将は許緒、私、文若。裏門に夏侯惇殿が率いる500。将は夏侯淵殿、曹仁、曹純。本格的な攻勢はしないものの、城壁から顔を出した連中は必ず射殺しましょう。また城壁から飛び降りる形で砦から逃げ出す賊がいたら、曹純が騎兵で追う形とすればよろしいかと」

包囲を抜けたとしても、平地を逃げる賊が騎兵から逃れられるはずもなしつてな。

「城壁から飛び降りて逃げる事ができる数なんてたかが知れているものね。包囲はそれでいいとして、期間はどれくらいを予定しているかしら?」

「三日から四日もあれば十分でしょう」

元々籠城に慣れていない賊だ。それも物資の蓄えもない寄合所帯となればまともに籠城なんかできるはずがない。

絶対に内部でゴタゴタが発生する。それを傍観しつつ、出てくる連中を削ればいい。

ついでに、敢えて日数をかけることでここにいない賊を炙り出すことが出来るかもしれない。

「ふむ。それだけ囲んでいけば他の邑で略奪をしている賊がいた場合も発見できるわね。良いでしょう。その形で兵をかけるわ。聞いていた通りよ春蘭。秋蘭とともに見事別動隊を率いて見せなさい」

「お任せください! 秋蘭共々必ずや華琳様のご期待に応えて御覧に入れます!」

「ええ。期待しているわ」

さて、戦だ。

ヒモ、片乳、露出狂と、俺のちん○に刺激を与えてくる奴らは隔離した。

曹操は文若が相手をしてくれるはず。曹純は騎兵だから別だし、許緒には反応しない。



ふつ。完璧だな。

四日後。それまで同士討ちや逃亡などで士気が激減した賊徒は最後の賭けに出ようとしたものの、城門の近くで待機していた曹操軍に包囲され、満足に軍勢を展開できないまま一方的に殲り殺されることとなった。

この完全勝利を以て、曹操のもつ力と志に共感した許緒は正式に曹操陣営へ加入することとなった。

此度の遠征は、曹操にとって武功、人材、経験と、非常に得るものが多い遠征であった。

## 16話。ぞくぞくと現れる賊

賊を討伐し曹操の武名は高まった。

夏侯惇や夏侯淵を始めとして武官も遠征を経験したし、許緒が仲間になった。

文若も戦後処理を完璧に終わらせて政務官としての実力を証明できた。

これだけを見れば良いことづくめだが、何事もやりすぎは良くないもので。

「……また援軍要請が来たわ。今度は東郡燕県の県令から」

「自分のところの太守に頼め。と言いたいところだが……」

「できないから私たちに要請が来ているのよ。それと知っているかしら？ 私たち、外から見たら相当『暇』らしいわよ？」

「賊が発生していないから、か」

賊が発生する要因がないともいう。

「そうね。税が払えなかつたり生活ができなくなった民が賊となり、その賊によって居場所を失った民が新たな賊となる。逆に言えば居場所と食糧が得られる環境であれば賊は発生しない。つまり貴方の提唱した屯田政策は賊となる芽を摘んでいるのよね」

「まあ、そうだな」

賊をやるくらいなら働けという程度に考えていたのだが、正直ここまで効果があるとは思っていなかった。

しかし疑問がある。

なんで周囲の連中は我々と同じことをやらないのだろうか。

本気で理解できん。

やろうと思えば他のところでもできるだろうに。

最初の一步を踏み出すのが怖いのはわかる。

だがその一步は曹操が踏み出しているではないか。

効果の程が実証されているのに何故やらないのか？

「その疑問に対する答えは一つ。役人どもは民の為にナニカをしようとは思っていないのよ」

「ああ、なるほど」

彼らにあるのは己が栄達のみ。

そんな彼らは、民を豊かにすることが己の利益に繋がるとは考えていないのだろう。

そのため、一時的に物資を放出して難民を困い込むようなことは絶対にしないし、水利の問題を片付けるために地域の豪族や名士に妥協を求める交渉もしない。

結果として彼らは自覚もなしに民を追い詰めてしまっているのだ。

そうして追い詰められて生きていけなくなった民が賊となり、賊に襲われた民が難民となり、居場所を失った難民が賊となり、その賊が邑や役人を襲うという負の連鎖を止めることができないでいる。

まさしく賊のバーゲンセール状態。

対して曹操が治める陳留では、早くから屯田を行うことで難民を農奴にクラスチェンジさせるノウハウができているため、賊になろうとする人間は極めて少ない。

というか、賊になるよう誘いをかけてくるような輩がいた場合、彼らはそいつを袋叩きにした上で官憲に引き渡してくれるようになってる。

彼らからすれば、今の政策を維持してもらえれば普通に暮らしているのだ。

わざわざ危険を冒してまで徳政を敷いている曹操に逆らう理由などないのである。

それ以上に彼らが心配しているのは『難民の中から賊が発生してしまえば、自分たちに対する扱いが悪くなるかもしれない』ということだろう。

彼らの思いを言葉にするのであれば「賊になる前に働け」もしくは「お前の事情に巻き込むな」といった感じだろうか。

実に健全な考えだと思う。

誰も彼もが強盗騎士のように成功するわけではないのだから。

ともかく、曹操の支配地域に流れてきた難民たちはこんな感じなので、陳留では極めて賊が発生しづらい状況となっているのである。

賊が発生しなければそれを鎮圧するために必要な予算や労力を屯田を始めとした領内の整備に使うことができる。

土地開発が進めば領内が発展する。

領内が発展すれば噂を聞いた賊や難民が流入してくる。賊を片付ければ武名が高まるし、難民をうまく使えば国力が増える。

全てが理想通りとはいかないが、今の陳留はおおよそこのような感じで、好景気に湧いている状況であった。

「周囲の県令や太守はそれが面白くないのでしょね」

「ふむ」

彼らからすれば賊が自分たちに押し付けられていると思っっているのだろう。

最近では「お前たちが押し付けたんだからお前たちが処理するのは当然だ」と言わんばかりに援軍要請をしてくるようになったような。

正直何を言っているのかわからないが、向こうの中ではそうなっているのだ。

事実、中央に『曹操に賊を押し付けられた』という讒言を行った役人もいるらしい。

尤も、その役人が上奏した讒言は荀家や司馬家の関係者に潰されたあとで『お前の主が行っている政が悪い』と論破された挙句役人自身も行方不明になったし、その役人を派遣した県令も家族共々消息不明となつたらしいのでこちら側に害はないのだが、問題の本質は本気でそう考える阿呆が増えてきているというところにある。

「その程度の見識しか持たない連中が県令だの太守だの刺史だのをしているんですもの。賊が増えるのも、その賊を討伐できないのも当然よね」

さしもの曹操も各地から寄せられた援軍要請（この状況では討伐軍の派遣要請）の束を前にうんざりしたような表情を見せる。

俺としても無関係ではないのでなんとかしたいところだが、現状で俺ができることはあまりない。

せめて伝令がより早く動けるよう駅（馬と馬に乗れる兵士を待機さ

せた中継所）を増設したり、難民たちを使つたネットワークで賊の発生や接近をより早くつかめるようにしたり、いざという時に難民たちが自衛できるような簡単な訓練を施すくらいだ。

正直な話、さつきとこの状況から抜け出したいのだが、如何せん、黄巾の乱はこれまでこの国が経験してきた局地的かつ散発的に行われる農民反乱ではなく、最初から漢全土を巻き込むことを前提に考えられた計画的犯行の一端である。

故に、その大本を絶たない限り、反乱は終わらないのだ。

事実俺の下にも、洛陽では一斉蜂起を目論んでいた馬元義なるものは討たれたものの、荊州南陽郡や豫州潁川郡で大規模な反乱が発生したという情報が入っている。

これらに対しては官軍が鎮圧にあたる予定らしいが、今の彼らにどこまでできることやら。

尤も、それらは我々とは関係ないところで行われている軍事行動なので考えても仕方のないことではあるのだが。

……その報せが来たのは、とりあえず近場の援軍要請に対してどう対処するかを考えようとしたときのことだった。

「大変です、華琳様！」

「あら、どうしたのかしら春蘭？」

「数日前に秋蘭と季衣が巡回に向かった先で、大規模な賊を発見したとのことですよ！ それに伴い秋蘭から援軍を求める使者が来ておりますー！」

「……大規模とはどれくらいかしら？」

「凡そ4000〜5000とのこと！」

「中々の規模ね。それだけの数がどこから来たのやら。まあいいわ。確か、秋蘭が連れて行ったのは500人だったわね」

「はっ！」

10倍か。夏侯淵と許緒であれば野戦で蹴散らすことは不可能ではないかもしれないが、それをやれば巡回に向かった先の邑が襲われてしまう。

それを防ぐためには、邑に籠って防衛戦をするしかない。

その邑の防備がどれほどのものかは知らないが、時間を掛ければかける程不利になる。

少々厄介な状況だ。

「場所は……ここからだとして3日前後の距離か。秋蘭が賊を発見した時期と使者を出した時期にどれだけの差があるかが問題ね。とりあえず、司馬朗」

「はっ」

「兵5000人分の食糧を10日分。準備にどれくらいかかるかしら？」

「物資を準備するのに半刻(約一時間)。輜重隊を編成するにはさらに半刻程頂ければ可能です」

「よろしい。春蘭」

「はっ！」

「直ちに5000人集めなさい。将は私と貴女と栄華よ。あと、この数だと事後処理も煩雑になるでしょうから桂花も連れて行くわ。司馬朗、貴方と徐晃もついてきなさい」

「御意」

騎兵だけ先行させるという手段もあるが、各個撃破される可能性を考えれば下策、か。

最悪『生き残ったのは夏侯淵と許緒だけ』なんてことになりそうだが……そうならんことを祈ろう。

17話。ぞくぞくと集まる味方。味方？

「秋蘭様！ 北側の柵の強化、終了しました！」

「東側の準備もできました！」

「西もなの！」

「南も大丈夫です！」

「そうか、よくやってくれた」

賊の発見が早かったお陰で簡素ではあるが防衛戦の準備ができたのは僥倖だったな。

あとは使者がどれだけ早く華琳様の下に辿り着けるか次第だが、最低でも三日から四日は籠城する必要があるだろう。

……通常であれば10倍以上の賊を前にしての籠城戦などありえない。

なにせここには司馬殿がいうところの籠城に必要なもののうちの二つ。

堅固な城壁と堅固な城門がないのだからな。

よって、普段であればこの邑の防衛を諦めて敵中突破を図り陳留で組織しているであろう討伐軍と合流するのを目指すところだが、予想外のことがあった。

それが彼女ら、未熟ではあるが将才を持つ三人の少女と、彼女らが率いていた600の義勇軍だ。

これで兵力差は約5倍。

私が指揮官兼弓兵として働き、彼女ら三人と季衣が将として動けば時間を稼ぐことくらいは可能だろう。

そう判断したからこそ籠城を選択したのだが、私の判断は間違っていないかったようだな。

それに、向こうとて防備を固めた邑を襲った経験は多くあるまい。私を含めて5人の将がいる邑なら猶更、な。

「敵は大軍だ。だからこそ油断する。そこが我らの付け入る隙となる」

「と、こゝますとっ。」

「勝ち戦で怪我をしたくない者などいない。死にたい奴はなおさらいない。よって重要なのは最初の勢いを止めることだ。そこで向こうに『何か違うぞ』と思わせることができれば相手の動きは鈍る。そうならば我らの勝ちはきまっただようなものだ」

「えっと、どういうことなのでしょうか？」

「いいか楽進。もし攻勢側が華琳様が率いる軍勢であれば、多少の犠牲を払ってでも目的を果たそうとするだろう。それこそ自分自身がその犠牲になろうとも、な。だが賊はどうだ？　自分が多少の犠牲の中に含まれることを覚悟していると思うか？　自分が死んだあとに『彼が命がけで柵を破壊したおかげで俺たちが無傷で邑に侵入できました。無傷で邑に侵入できたおかげで略奪に成功して幸せになりました。すべては最初に命を懸けて柵を壊してくれたあいつのおかげです』なんて言われて喜ぶやつがいると思うか？」

「「ああ」」

始まりは圧政によるものかもしれない。そこには情状酌量の余地があるのかもしれない。

だが、略奪を繰り返すようになった賊にそんなものはない。

彼らはいくまで自分の欲を満たすためだったり、自分の家族を喰わせるために賊になった存在だ。

自分が死んだら欲を満たせない。

自分が死んだら家族が飢えて死ぬ。

そうであるが故に、自分は絶対に死ぬわけにはいかない。

これが賊の基本的な考え方である。

だからこそ……。

「賊の一人一人に『油断すれば自分が死ぬことになる』と自覚させることができれば、連中の勢いは止まるのだ。元々訓練を施されたわけでもない烏合の衆が、唯一の取り柄である勢いまで無くせば勝てる戦にも勝てなくなる。対して私たちは数日耐えれば華琳様が来てくれることがわかっている。故に最初さえ凌げば勝てるというわけだ。わかったか？」

「「は、はー」」



「うむ」

これでよし。先ほどは簡単なように言ったが、5倍の兵を相手にするのは簡単なことではない。

なにより義勇軍も邑の連中も、もちろん私たちが連れてきた兵たちも5倍以上の賊と聞いて怯んでいたからな。

怖気づいたまま戦っても敵の勢いを削ぐことはできん。

なにより賊という連中は弱者が醸し出す気配に敏感だ。

こちらの腰が引けているのを知れば調子に乗って襲い掛かってくるに決まっている。

故に、こちらが気持ちで負けないよう、彼らには確実に勝てると思ってもらわなければならない。

「その甲斐はあつたな。あとは華琳様が来るまで持ちこたえるだけだ。……分の悪い賭けとは思わない。思わないが、数日はまともに寝られないだろうな」

○んこが痛い。

何なのだ、これは。一体どうすればいいのだ？

「が、楽進です！」

「う、于禁なの！」

「り、李典言います！」

賊を退治しに来たと思つたら、痴女の群れが陣営に加わる事になった件について。

「……司馬伯達だ。よしなに頼む」

「二は、はい！」

本当になんなのだこの状況は。

百歩譲って偶然邑を回っていた義勇軍と合流できたというのは認めよう。

義勇軍を率いていた人間が一廉の人物であつたことも認めよう。

その連中が陳留で曹操らと顔を合わせていたということも、まああるかもしれない。

だが、その人物というのが複数の若い女性であり、それぞれが卑猥

な格好をしているのはどういうことだ？

いや、全員が全員アレな恰好であるものの、水着だと思えばまあなんとか……ならんな。

それに若い娘さんがこんな恰好をしていたら興奮しなければ男として無作法というもの。

だからちん○が痛いのは仕方がないことなのだ。俺が悪いわけじゃない。

ちなみに俺の息子を刺激して止まない娘さんたちの格好は以下のようなものだ。

楽進。ビキニアーマとでもいうのか？ 褐色の肌と鎧のコントラストだけでもエロいのに直垂みたいなのがあるから隠せているように見える生足が強調されてエロい。

于禁。ミニス力はもう諦めたが上はなんだ。柔らかさを強調か？ トップを隠せばいいというものはあるまい。色々エロい。

そして李典。水着にベルト？ なんだそれ。マントになんの意味がある？ あとでかい。

首にかけられたメガネがメロンを強調するスパイスにしか見えん。

曹操が谷間を強調する格好をするのが無意味に思えるくらいでかい。

貴様のソレはリーゼンロッテ並みに俺の息子を刺激する劇物だ。

問答無用でエロい。

結論。三人ともエロい。

見ているだけでちん○が痛くなる。

これで元氣にならないとかありえんだろ。

彼女らが連れていたという義勇兵たちの性癖は大丈夫か？

つーか、普通の服があるのになんでわざわざそんな恰好をしているのか全然わからん。

わかっているのは冷え性ではないことくらいだろうか。

本音を言えば三人が三人とも絶対に近付きたくない相手である。

主に俺のち○こと貞操帯と評判のために。

しかしながらそうもいくまい。

だって李典がその手に持つドリルが俺の男心を刺激してやまないからだ。

どんな原理なのか？

応用はできるのか？

土木作業に使えるのか？

別の重機は作れるのか？

くっ。どうしても調べねばならんが、近付けば息子が痛くなるのが今からでもわかる。

近付きたいが近付きたくない。なんとという二律背反。

これがヤマアラシのジレンマ、というやつか。

(凄い……気だ！)

(空気が歪んでいるの！)

(なんやあの人。めっちゃおこつとらん？)

(秋蘭様、司馬朗様は何に怒っているんでしようか？)

(さ、さてな。もしかしたら道中でなにかあつたのやもしれん)

「司馬朗。急いで助けにきたにも拘わらず賊が弱すぎたのが不満なのはわかるけど、もう少し怒気を抑えなさい。新顔の子たちが怯えているじゃないの」

「……そうか」

「そもそも賊が弱かったからこそ秋蘭たちも無事だったし、兵の犠牲が少なく済んだのよ。それは喜ぶべきことであって怒ることではないわ」

「……うむ」

別に賊に強さなど求めていない。

ただ息子が心配なだけだ。

なんて言ったら変質者扱いされるのだろうか。

というか、あんなにあからさまに強調されて誰も反応をしないのは何故だ？

俺がおかしいのか？

連中に羞恥心がないのがおかしいんじゃないのか？

衣類に気を遣っているはずの曹洪が何も言わないのは何故だ？  
そんな恰好をしていながら男を誘っていないって、本当か？

大きな一物を持った男を誘っているんじゃないのか？

しかも連中はそのまま馬に乗るし。

奥まで見えるやろがい。

やめろよ。そういうの。

ち○こ痛いねんて。

ああ。駄目だ。

このままでは息子が大変なことになってしまう。

言いたいことも言えないこんな世の中に内心で毒づくことは後でもできる。

今すべきは急いでこいつらと距離を取ることだ。

そのための口実は、ある。

「なあ曹操殿」

「何かしら？」

あの三人と比べればこの人の谷間も癒しだな。

油断すれば痛くなるが、逆に言えば油断さえしなければ大丈夫なのだから。

ああ、いや。今はそれどころではない。

「このまま全軍で帰還する気か？」

「と、いうと？」

「残党の有無や今回の連中がどこから来たかの調査に向かう必要があると思うが如何？」

「ふむ。残党に他の邑が襲われる可能性もあるし、新たに賊が流入してくる可能性もある、か。確かに調査は必要でしょうね」

「そうか。ならばその調査、俺と徐晃に任せてはもらえないか？」

「あら、いいのかしら？」

「この場で賊が流入した経路の調査ができるのは曹操殿か夏侯淵殿か俺しかおらん。夏侯淵殿は疲労しているし、曹操殿が長く陳留を空けるわけにもいくまい。わざわざ戻って休息させてから調査するわけにもいかんしな」

「それを言うなら桂花の得意分野では？」

「文若殿か。個人的な能力はあっても現場で兵を使いこなせるとは思えん」

周囲を全員女性で固めた執務室で指揮を執るならまだしも、男に囲まれた状況で仕事ができる人間ではないだろう。

「……そうね。いいでしょう。貴方に調査と、残党の処理を命じるわ。兵は2000程でいいかしら？」

「大丈夫だ。問題ない」

(まさか彼がここまで怒っているとは。巻き込まれる形になる賊にとっては最悪でしょうが、元より賊にかける情けなどあるわけでもない。なにより彼が暴れたぶん領内の治安が良くなると思えば悪くないわ。暴れば機嫌も良くなってくれるだろうし。……良くなるわよね？ 雑魚しかいなくて逆に機嫌が悪くなったりしないわよね？)

「御意。聞いたな、徐晃。ついてこい」

「はい」

よし。これでこいつらと距離を置ける。

ドリルについては惜しいが、後で個別で聞けばいいだろう。

三人纏まっているときに接触する？ そんなことできるか。

ちん○が破裂するわ！

## 18話。新顔と賊の情報

「あ、司馬朗様！ お帰りなさい！」

「ああ、許緒か。ありがとう。ところでその、横にいる子は友人か？」  
賊どもを殲滅し、彼らが辿って来た経路を確認して必要と思われる場所に罠を設置したあとで見張りを残して帰還してきた俺を出迎えたのは、ピンクの見せパンがトレードマークの許緒と、スパッツが特徴的な緑髪の少女であった。

なんだこれ。

その恰好は大丈夫なのか？

「はい！ 幼馴染の流琉……じゃなくて、典韋って言います！ 流琉、こちらは司馬朗様。とつてもお強いただけじゃなく、曹操軍の軍師をしているくらい頭も良いんだよ！ そして横のお姉さんが徐晃様！ とつても強いんだから！」

いや、軍師はしていないぞ。友達に嘘を教えるんじゃない。

「司馬朗様に徐晃様ですね！ 私は典韋です！ このたび曹操様にお仕えすることになりましたので、季衣共々よろしくお願いします！」

「そうか。司馬伯達だ。よろしく頼む」

「ふむん」

それと徐晃。お姉さん扱いされて嬉しいのはわかるが、胸を張るな。

そこの二人より無いのがばれるぞ。

というか、典韋よ。

スパッツがあるのは今更だからあえて突っ込まんが、その下にちやんと履いているように見えんのだが……本当に大丈夫か？

このさい紐でもなんでも良いから何かしら履いてあることを示唆するようなナニかを装備したほうが良いと思うぞ。

後ろ向いたら確実に半ケツだろうし。

いや、幼女の半ケツに欲情するほどアレではないが、勘違いするやつは絶対でてくるからな。

見せパンと生スパッツの幼女コンビとか。

……兵士の性癖がどんどん壊されていくような気がしてならん。  
話を聞けば、典韋は料理が上手なのだとか。

その上で許緒並みに力もあるので、曹操を護る親衛隊に所属することになったらしい。

指揮能力がない超人の使い方としては正しいと思う。

幼女なのが難点だが、このご時世子供だからと言って楽ができるわけではない。

邑で農作業をさせるくらいなら使った方がいいわな。

だからそこについては問題ない。

問題はこの子たちの将来が気になりすぎるということだ。

「とりあえず、そうだな。曹操殿に報告を上げるついでに君たちに服を用意してもらおうよう陳情しておこう」

「え？」

彼女らはまだ子供だ。だからまだ間に合う……と思いたい。

「南陽と潁川に向かった官軍が、負けた？」

「ああ。諸侯には隠しているようだが、宮中では結構な騒ぎになって  
いるらしい」

「ちっ」

洛陽の連中め。己の失態を隠したいというのはわからないではないけど、直接的な被害が出る可能性が高い近隣の諸侯にまで情報を隠すなんて何を考えているの？

ああいや。連中が近隣に分散すればその分立て直しの時間が稼げるし、何より立て直した官軍が再戦する際に賊が分散している方が数が減って楽だとも考えたのか。

連中ならありえない話ではないわね。

でもそれは、現時点で官軍には各地に分散して略奪を働こうとしている賊を止める手段がないということ。

つまり……。

「前回秋蘭が遭遇した賊はそいつらってこと？」

「その通り。潁川方面から流れてきた連中だった」

なるほど。それならあの規模の賊がいきなり現れたことの説明もつくわね。

「差し詰め潁川で略奪し過ぎて獲るモノがなくなったから裕福な陳留を狙ってきたつてところかしら？」

「そのようだな」

「はあ。賊ごときが舐めた真似をしてくれたわねっ」

重大な情報を隠蔽した洛陽の連中も問題だけど、それ以上に問題なのは賊が簡単に私たちから略奪できると勘違いしていることよ。

連中には分からせる必要があるようね。

分際というものを。

「そこで、不甲斐ない官軍と調子に乗っている賊の存在に怒りを覚えている曹操殿に奏上したい」

「ええ。聞きましよう」

この状況で行う奏上なんて一つしかない。

そうよね？

「潁川で展開している大規模な賊を根絶やしにすれば陳留は安泰となる。よって官軍の再編成が終わり次第になるが、彼らが賊と再戦するのに合わせてこちらにも討伐軍を派遣しては如何？」

「ふむ」

元を絶たなければ混乱が続くというのであれば、元を絶てばいい。

今まではその『元』が何処なのかはつきりしていなかったけど、今その情報を得た。

数に差がある以上、私たちが単独であたるのではなく官軍と合わせる必要があるから少し時間がかかるのが難点だけど、そこは諦めるしかない。

実際問題官軍が居なければ物量で押しきられてしまう可能性もあるからね。

このまま官軍が勝つのを待つのもいいかもしれないけど、それで官軍が負けたら話にならない。

だったら私たちが介入して官軍を勝たせればいい。

そんなところかしら。



「別に我々が敵を倒す必要はないぞ」

「あら、そうなの？」

「どういふことかしら？」

「なに、戦闘は官軍に任せて我々は物資を集積している拠点をとせば我々の勝利となる。それだけの話さ」

「それは向こうだって考えているでしょう？ 当然それなりの備えをして……ああ、だから官軍か。彼らを餌にするのね？」

「そうだ。向こうの本隊が官軍に釣られたところを叩く」

なるほど。確かにそれなら私たちだけでもいけるかもしれないわね。

「物資がなければ大軍は大軍足りえない。略奪して補給しようにも、すでに潁川では略奪できるものがない。そのうえ前方には官軍が展開、後方に私たちがいることになるわ」

「うむ。そうなれば連中は戦闘を継続することが困難になるだろう。多少抵抗はするかもしれないが、大半は逃げるだろうな」

「でしようね」

逃げる先はもちろん南陽。

でも南陽方面でも官軍が再編成されるだろうから、最終的に賊は洛陽方面からくる官軍と、潁川方面から来る官軍に挟まれることになる。

さすがにそんな状況になったら賊も終わりよね。

最悪勝てなくても囲んでいるだけで賊は餓死することになるんだし。

で、私たちは陳留に流入してくる賊の芽を根絶した上で、官軍の勝利に貢献したとして武名を高めることができる、と。

うん。悪くないわ。

一郡の太守風情がこの規模の戦の勝敗に寄与しようとするなんて、洛陽の連中からすれば誇大妄想に聞こえるかもしれないけど、私たちにはそれだけの力がある。

少なくとも司馬朗はそう判断している。

なら私がすべきことは一つしかない。

「良いでしょう。すぐに潁川方面へ向かう軍勢の編成をするわ。それで、遠征にあたって何か必要なことはあるかしら？」

「潁川の出である文若殿に地元の有力者と連絡をとってもらうことと、早いうちから官軍の將に協力を申し出ておくことが重要だと思う」

「桂花はわかるけど、官軍の將にも連絡をするの？」

わざわざ手柄を横取りすると告知するつもりかしら？

「新たに潁川方面の將となるのは朱儁殿だ。あの方は体裁よりも実を取る。であればこそ必要と判断すれば官軍の矜持などほっぽりなげて周辺の太守に対して軍を派遣するよう命じるだろう」

ああ、そういうことか。

「向こうから言われる前にこちらから申し入れることで二心が無いことを示すのね？」

「明察」

どうせ命令が出たら出兵を拒否できないんですもの。

だったら割り切った方が良い。

こちらは命令が出る前に動くことで準備の良さと有能さを示す。

さらに手柄を横取りすることになる以上、少しでも心証を良くしておく必要があるってことでしよう。

正直この辺の根回しは私の苦手としている分野だし、春蘭も秋蘭もこういうところまで気は回らないから、こうして指摘してもらえるのは助かるわ。

「わかったわ。桂花にもすぐに準備させましょう。疲れているところを悪いけど、貴方も働いてもらうわよ。もちろん今からではなく、明日からだけだ」

「問題ない。では失礼する」

「ええ。今日だけでもゆつくり休んで頂戴」

これでよし、と。

春蘭と秋蘭を呼んで遠征の準備をさせましょうか。

……そういえば、彼ってなんだかんだで最近は私の前では怒気を発しなくなつたわよね。

これは私を主として認めている、と思っても良いのかしら？

いえ、真名はまだ預けて貰えていないのだから自惚れることはできないのだけれども。

それでも少しづつ距離が縮まっているのは実感しているわ。

「ふふっ。貴方はいつになったら私に真名を預けてくれるのかしらね？」

## 19話。 潁川での戦の前に？

月日は流れて豫州潁川へ遠征に出た我ら曹操軍が目にしたのは、朱儁將軍率いる官軍に圧迫されて逃げ腰になりつつある賊たちの姿であつた。

「10万を超えと言われる賊徒を相手に3万足らずの兵で優勢に戦を進めるとは。さすがは朱儁將軍、と言ったところかしら？」

「ええ。一度官軍に勝つたことで調子に乗つた賊徒を死地に誘い込んだ手腕は見事の一言です」

緒戦で大敗北を喫した賊徒はそれ以降攻勢が鈍り、全体的に押され気味になっているのだとか。

そもそも賊徒は勢いで押すことしかできない集団なので、守勢に回つた時点で負けが決まるのだが、彼らにその自覚はあるのだろうか。

いえ、賊徒の思惑なんてどうでもいいわね。

「桂花。朱儁將軍からは何か言われているかしら？」

「合流してもよし、このまま遊撃に当たってもよし。華琳様の判断に任せるとのことでした」

ふうん。

「どちらを選択しても併せてみせるという自信が垣間見えるわね」

「はい。朱儁將軍にそれだけの手腕があることはこれまでの戦闘で証明されています」

「そうね。朱儁將軍の能力について異論を差し挟む余地はないわ」

相手が賊とはいえ、ここまで一方的に戦を進めることができる人物ならそれくらいは造作もないことでしょう。

ここまではいい。

「問題はこれからどう動くかなんだけど。桂花にナニカ意見はあるかしら？」

「……ここは戦場ですので、えっと、私よりも、その……」

桂花が視線を向けた先にいるのは、桂花でさえその能力を認めている男、即ち司馬朗がいた。

うん。わかるわ。

私だって、ことが戦術に及んだのであれば最初に確認すべき相手が誰かってことくらい重々承知しているのよ。

でもねえ。

「……むう」

(なあ秋蘭。なんで司馬朗殿は怒っているんだ?)

(し、知らんぞ。大方華命がナニカしたのではないか?)

(わ、私は何もしていないっすよ!)

(ほ、本当ですよ! 今日服を脱いでいませんし!)

(無駄が多すぎて怒っているのでは? いくら戦場でももう少し節約できますよね?)

(相変わらず凄い気だ!)

(普段以上に怒っているの! 蛆虫共は全部死ぬの!)

(機械いじりが好きな人に悪い人はおらん! でも、怖い人はおるんやで)

(流琉、司馬様はどうしたんだろうね?)

(うーん。なにか心配事かな? お腹が空いた、とかじゃないと思  
うけど……)

計画通りに事が進んでいるはずなのに、何故か怒っているのよ  
ねえ。

それも激怒していることが丸わかりなくらい周囲に怒気を撒き散  
らすくらい怒っているわ。

正直怖い。

こんな状態の司馬朗に話しかけたいと思う?

少なくとも私は思わないわ。

でも、そうも言っていられないのよね。

((((華琳様! お願いします!)))

「はあ」

戦には勝たなければならない。

怒り狂っている部下とも話し合わなければならない。

両方やらなくっちゃあならないっていうのが君主のつらいところ

よね。

……覚悟はできたわ。

周りの空気が歪むほどの怒気に慣れてきた私がおかしいのか、それともただそこにいるだけで春蘭や秋蘭を怯えさせる彼がおかしいのか。

間違いなく後者ね。

いえ、彼が怒っている理由もなんとなくわかるのよ？

おそらくだけど、彼が怒っている理由は賊が予想以上に不甲斐なかつたからよね？

兵法上敵が弱いのは良いことなんだけど、何事にも限度というものがある。

もちろん司馬朗は春蘭のように「手ごたえがないではないか！」と騒ぐような人間ではない。

だから彼が怒っているのはもっと別のこと。

そう、この戦場に於いて今回の目的の一つであった武名を稼ぐことができなくなつたからよ。

賊が想定以上に弱すぎたせいで、私たちが来る前から大勢が決してしまっている。

これが問題なの。

この状況では、これから私たちが何をしたところで名を上げるのは朱儁將軍となるわ。

朱儁將軍もそれを知っているからこそ私たちに行動の自由を許したのだろうし。

つまりこれからの戦いは全部……とまでは言わないけどかなりの部分が無駄なものになるわ。

無駄な戦で将兵を失うことほど愚かなことはないわ。

だから、もし彼が怒っていなかったら私が怒っていたかもしれない。

春蘭はまだしも秋蘭がこのことに気付いていないのは、彼女がまだそれだけの視野を得ていないから。

つまり彼の怒りは広い視野があればこそその怒り、というわけね。

……それがわかったから何だという話なのだけれど。  
ともかく、このままだと軍議にならないわ。

今は彼に怒りを鎮めてもらわないと。

「司馬朗。戦の前に猛るのは分かるけど、将たるもの軽々に感情を表に出すものではないわよ」

尤も、彼の場合は春蘭や桂花みたいな感情の発露ではなく賊に対する怒りの発露だから、兵に対して悪い影響を与えるものではないのだけれどね。

でもね司馬朗。兵にとって良いからと言って、味方の将を委縮させたら駄目だと思うの。

「……むう」

○んこが痛いっていつてんだろ！

女だらけの天幕に男が俺一人。

覚悟はしていたつもりではあったが、予想以上に酷い。

小学生のように「女の中に男が一人」なんて揶揄う輩はいないが、正直代わってくれる人間がいたら代わって欲しい。

なにが酷いって、甘ったるい匂いもそうだが、視覚への暴力が酷い。個別に接する分にはなんとか慣れてきたが、こうして纏まると駄目だな。

ちん○が痛すぎる。

そもそもここは戦場だぞ？

そんな装備で大丈夫か？

全身鎧とまでは言わないが、せめて金属で造られた胸当てくらいしたらどうだ？

もしかしたら特殊な繊維で造られた服なのかもしれないが、布がない部分の防御力は皆無だろう？

矢が飛んで来たら死ぬぞ？

楽進？ それはただのビキニアーマーだから出直してこい。

いやはや、コイツらを見ていると曹操はまだマシな部類なんだと心から思う。

まあ一番露出が少ないのは文若なんだが。

……前線に出ない文若が一番まともって、この陣営は大丈夫か？  
本当に勝ち馬なんだろうな？

「司馬朗。戦の前に猛るのは分かるけど、将たるもの軽々に感情を表に出すものではないわよ」

別に戦を前にして興奮しているわけではないが。

とはいえ、まさか馬鹿正直に「お前らの恰好を見て性的に興奮しているんだよ！」と訂正するわけにもいかん。

ここは曹操が出してくれた助け船に乗るべきだろう。

「……ふう。すまん。落ち着いた」

ち○こは痛いままだがな。

よし、今からは曹操のデコだけを見ることにしよう。

そうすれば少なくとも視界の上では大丈夫になるはずだ。

あとは鼻で呼吸せずに口で呼吸する。

これでなんとかこの場を凌いでみせる！

だからお前ら、これ以上俺のちん○を刺激をするなよ？

ぼこおつてなるぞ？

「そ、そう。それはよかったわね」

(確かに周囲を圧迫する怒気は消えたわ。でもその代わりに、なんか額を凄く凝視されているんだけど。これ、絶対怒っているわよね!?)

私は悪くないでしょ!)

なにやら曹操から抗議されているような気がするが、見られることに慣れている曹操がこの程度の事で動揺するわけがない。

つまり気のせいだな。

「で、司馬朗はどう動くべきだと考えているのよ?」

自分の中で結論付けていたら文若が問いかけてきた。

主語が無いのでアレだが、恐らく先ほどまで話していた朱儁將軍と合流するか否かについての問いかけだろう。

ふっ。○んこは痛いがそれはそれ。

話は聞いているのだよ。

その上で俺からの意見は一つだけだ。



「予定通り、朱儁將軍とは合流せず、敵の本拠地を叩くべきだ」

「あら？ それだと私たち単独で砦を攻めることになるけれど？」

「曹操殿も理解している通り、今更朱儁將軍率いる官軍と合流したところで手柄は得られん。ならここは敢えて単独で動いた方が良い」

「手柄の為に部下を殺せ、と？」

「敵の反撃を警戒するのも分らんではないが、今回に関しては杞憂だろう。賊の本隊が逃げ腰になっている今、恐らくそこまで強固な抵抗はないと思うぞ」

「その心は？」

「連中は、自分たちよりも数が劣る朱儁將軍との戦に敗れたことで、数で勝っていることが絶対の勝利を約束するものではないことを知った」

「……続けて」

「この期に及べば連中は撤退も視野にいれているだろう。最初から及び腰なのだ。そこに新たな援軍が参戦したと知ればどうなると思う？」

「賊たちからすれば、ただでさえ士気が落ち込んでいるところに敵の援軍が参加し新手として向かって来ていることを知らされる、か。士気は崩壊……いえ。そこまできなくても、相当焦るでしょうね」

「うむ。そこに夏侯惇殿を筆頭に、許緒や典韋といった力自慢を向かわせて正門を力づくでぶち壊すところを見せてやれば良い。それで連中の心は折れるだろう」

「数が勝利に直結しないことを理解しつつある敵に、あえて『数に勝る個の存在』を見せつける、というわけね」

「そうだ。心が折れればそれでよし、そうでなくとも士気が絶望的なまでに下がった時点で、連中は厄介な“賊の軍勢”から“民崩れの集団”となる。あとは突っ込んで掃討してやれば良い」

「悪くないわね。犠牲が少ないのもそうだし、私たちが単独で敵の本拠地を落としたとなれば朱儁將軍ほどではないけど功績にはなる」

「うむ。無論、他の方法でも手柄をたてることはできなくはないだろう。だが、別の場所で今回のように安全かつここを落とすほどの功績

を得られるかというところ……」

「無理でしょうね。少なくとも朱儁將軍の軍勢と合流すれば先鋒として使い潰される未来しかないわ。その際、武功は私ではなく朱儁將軍のものになる」

「そうだな。だがここを曹操殿が単独で落とすという実績があればどうなると思う？」

「朱儁將軍が私を使おうとしても、洛陽の連中が止めるでしょうね。これ以上私に武功を与えないよう戦場から引き離す、かしら？」

「ああ。我らはここに残されて残党処理にでもあてられるだろうよ」「逃げた賊も討伐する必要がある。……必要なことではあるけれど、武功にはならないわ」

「それでいい。いや、それがいい。誰も目を付けていない今だからこそ曹操殿が独占できるモノがある」  
「と、いうと？」

「我々は残党処理の他に復興の支援も行う」  
「残党処理はまだしも、復興支援？ それは……ああ、なるほど。流石によく見ているわね」

一瞬訝し気な表情をした曹操だが、文若を見て俺が何を求めているのかを理解したようだな。

話が早くて助かる。

そう。本来であれば武功にもならないし略奪もできない残党処理はおいしきの欠片もない仕事だ。

その上ここは曹操が治める土地ではなく他の人間が治める土地。そんなところの復興支援なんて、やったところで物資が垂れ流されるだけでしかない。

自己満足の類いだろう。

通常であればその通り、なんの得もない行為だ。  
しかしながらここは潁川。

荀家はもとより、いくつもの名家にとっての地元である。

故に復興の支援を行うことで、潁川の関係者に対して曹操の名を売ることができるのだ。それによって得られる名声は一時の武功以上

の価値がある。

「……いいでしょう。司馬朗の献策を受け入れるわ。春蘭は流琉と季衣を連れて先陣に立ちなさい。秋蘭は春蘭たちの援護。他の将は春蘭たちが城門を破壊したあとに突撃する準備をしなさい」

「はっ！」

よし。あとは勝つだけだ。

無論先ほど述べたとおりに進まない可能性は、ある。

敵の心が折れかけていなかったり、強固な抵抗をされる可能性は皆無ではない。

そういう意味では、賭けの要素がないわけではない。

しかしながら、そもそも戦なんてそういうものだし、なにより虎穴に入ろうとしない人間に虎兇を得ることはできないからな。

諸将には武功を得るために頑張つて貰いたいところである。

「そういえば司馬朗」

「なにか？」

「貴方は城門の破壊に向かわないのかしら？」

「……その必要はあるまい」

先陣は夏侯惇と決まった。

つまり俺が参加する場合は夏侯惇の後ろに配備されることになる。

それはよろしくない。

なぜなら夏侯惇の後ろにいたらちん〇が痛くなるからだ。  
故に断る。

ふっ。この完璧な理論武装、崩せるものなら崩してみよ。

## 20話。 潁川での戦の前に②

夏侯惇らが先陣を切ることなどが決まったことで軍議は終わったかに思えたが、まだ議題は残っていた。

と言つても、戦術的な話ではない。

戦後処理についての話である。

一部の武人などは「戦う前から勝ったときのことを話してもしようがない」などと嘯くかもしれないが、こういうのは戦が終わってから考えるのでは遅すぎる。

世の中には、自分で功績をたてるのではなく、他人の足を引っ張ることで自分が得をしようとしている人間がごまんといる。

そういう人間は誰かの揚げ足取りをするため、常に『付け入る隙はないか』と眼を光らせているのである。

そう言った輩に介入する隙を与えないよう振る舞うのも、人の上に立つ人間としての務めなのだ。

なにせ自分が足を掬われてしまえば、自分に付き従ってくれた将兵にまで類が及ぶのだから。

「そんなわけで、敵の本拠地を落とす後にするべきことを伝えるわ」「大事なことだから絶対に聞き逃さないでね！」

「……」

武官組は完全に沈黙したな。

まあ分らんでもない。

戦後処理は門外漢だし、何より曹操と文若の間で意思統一ができているという時点で政略向けの話だからな。

自分たちが口を挟む場ではないと考えているのだろう。

ちなみに俺も同じ意見である。

ことが政略関連なら、あのネコミミに任せておけば問題はない。曹操が同意しているのであればなおさら問題ない。

面倒なことは連中に任せて、俺は風呂にでも入っていればいい。

……そう思っていた時期が俺にもありました。

「では皆に命じるわ。敵の本拠地にある食糧は全て焼き払いなさい。」

米一粒たりとも持ち出すことを禁じます！」

「絶対にダメなんだからね！」

「「ええええ!」」

なん で そ う な る !

「そ、それはどういうことでしょうか？」

「そうなの! 食べ物を焼いたら食べられなくなるの!」

「んー。それはちよつとあかんかなあ」

「華琳様! そんなの駄目です! もつたいないですよ!」

「華琳様の命令でも食べ物を粗末にするのはちよつと……」

うん。やっぱり反対意見は出るわよね。

特に反対しているのは、義勇軍だった凧・沙和・真桜の三人と、季衣に流琉か。

民に近い立場だったからこそ、食糧を焼くことに抵抗があるのでしようね。

「我らは華琳様のお考えに従うのみ!」

「少しは考えて欲しいところだが、まあその通りだ」

「華琳様にはなにかお考えがあるはずっす!」

「そ、そうですね。私たちは華琳姉様を信じるだけです」

「本音を言えば私ももつたいないと思いますけど、理由があるのであれば仕方ないですよね」

うん。最初から武官として仕えていた春蘭たちも、積極的に賛成というわけではないけれど、それほど抵抗はないみたい。

栄華は金庫番としての意見だから少し毛色が違うけど、少なくとも感情的になっっているわけではないし。

欲を言えば春蘭たちには命令の真意まで理解してほしかったけれど、それはおいおいということにしておきましょう。

桂花はもちろん賛成。

今回の件を発案したのは私だけど、桂花も同じ意見だったものね。

そういう意味では司馬朗も賛成だと思うけど……っ!?

「食糧を焼く、だと? 正気か?」

え？ どういうこと？　なんでそんなに怒っているの？

彼ならここで食糧を焼かなくてはならない理由を理解しているでしょう！？」

「華琳様に対する暴言については後で咎めるとして……司馬朗。貴方は華琳様が決めた方針に反対するってことかしら？」

「当たり前だ。率直に言って正気の沙汰ではない。俺はそのような命令に従うつもりはないぞ」

怒気を受けて固まった私に代わって桂花が問い質してくれたけど、司馬朗の答えに変更はない。

つまり彼は食糧を焼くことを是としていないということよね。

それは何故？

「不思議そうな顔をされてもな。逆に問おう。何故食糧を焼く必要がある？」

「……華琳様。私が代わりに答えても？」

「え、ええ。お願いするわ」

本来であれば私が答えるべきなのだろうけど、もし私の考えに瑕疵があつた場合、私は先ほどの命令を取り下げなければならぬ。

でもそれは、配下である司馬朗との討論に負けて方針を覆すということになる。

それは君主としてあるまじきこと。

だから桂花はあえて自分が間に入ることで、この場を『司馬朗と桂花が討論する場』にしてくれた。

方針を転換することに違いはないけれど。討論で勝つた方の献策を受け入れるという形にした方が私の体面が傷付かないから。

……ごめんなさい。

そしてありがとう。

貴女のことは忘れない。

「いい？　まず、私たちは今までどこからも略奪を行わずに戦ってきたわ」

桂花の冥福を祈る私の耳に、司馬朗を説き伏せようとする桂花の声が届く。

「そうだな」

「それをよりにもよって、盗賊ごときの糧食を掠め取るような真似をしてごらんなさい。今まで築いてきた評価が台無しになってしまいうじゃない！」

そう。別に清廉潔白を気取るつもりはないけれど、わざわざ悪評を得る必要もない。

「ふむ。賊の溜め込んだ食糧は得られない。だが放置もできん。だから焼く、と？」

「そうよ！ それに、もし焼かないで食糧を接收した場合、アンタはそれを周辺の街や邑に配れというんでしょ？ 確かにそれをやれば周囲の評判は良くなる。でもね。ここで手に入れた食糧を近くの街に回せば今度はその街が略奪の対象になるのよ！ その場合略奪の規模は前回以上のものになる！ そうなったらアンタは責任を取れるの!？」

一時的な施しは害にしかならない。

私と桂花はそう考えた。だからこそその焼却。

「責任ねえ。ならばその後は『支援助物資は後から届くから我々は民を見捨てたわけではない。あとはここにある食糧を焼くことで、賊どもの怒りをすべて我らが引き受ければいい。それで他の街も安泰だ』とでも言うつもりか？」

「わかってるなら聞かないでよ！」

その通り。そこまで理解しているなら反対する理由なんてないじゃない。

それなのに何で……ああ、いや、そうか！

彼はこうしてみんなの前で問題提起することで私の考えを風たちに伝えようとしていたのね！

実際風たちの顔を見れば、さつきまでであった不満そうな気配が完全に消えているのが分かる。

もちろん春蘭たちの中にもあったであろう疑問も消えて、みんなスッキリしたような表情をしている。

これが彼の狙い。

わざと私に対して批判的な言い方をしているのも、私の意見を代弁している桂花の論調に花を添えるため。

つまりは武官から軽視されがちな桂花の立場を向上させようとしているのね！

まったく。それならそうと前もって言ってくれば良かったのに。でもまあ、先に知らされていたら桂花が恥ずかしがって提案を拒否していたかもしれないものね。

だからこういう形になったと思えば、先ほどまでの司馬朗の態度にも納得ができるわ。

私たちのために一時的に悪者になってくれた司馬朗に感謝しないと。

特に桂花はあとで直接お礼を言いなさいね。

なんて考えていたのだけれども……。

「ふむ。それで？」

「え？」

え？

「兵糧を焼く理由はそれだけか？ と聞いている」

「そ、そうよー！」

「浅い。浅いぞ荀文若っ！」

声を荒げながら桂花を見る司馬朗の眼には怒りしかなくて、そこには『桂花のため』なんて気持ちがあるようには思えなかった。

つまりそれは、彼はここで桂花を完全に論破するつもりだということとで……。

ああ、ごめんなさい。

そしてありがとう。

貴女のことには忘れないわ。

色々と悟った私は、これから私に代わって司馬朗に論破されることになるであろう桂花の冥福を再度祈ることにしたのであった。

こいつは何を口走っているんだ？ 本気、いや正気か？



もし政務官の筆頭であるこいつが正気のままこんなことを考えているようなら、即座に矯正しないと陣営全体が大変なことになるぞ。

故にこの司馬朗、容赦せん！

「……大前提としてだが、民の前で兵糧を焼くのは愚行以外のナニモノでもない。なぜそんなことがわからんのだ」

「愚行、ですって!!」

「そうだ。なあ文若殿。想像してみる。理由はどうあれ、食うモノがなくて死にそうになっている民の前で食糧を焼くのだぞ？ 目の前で食糧を焼かれた民がどう思うかわからんか？」

「だからそれは……」

「理由が有るのだろうか？ だがな。そんなものは関係ないのだ。貴殿は経験がないからわからんかもしれないが、餓えは人から理性と知性を奪う。故に餓えている人間に理由など説いても無駄だ。彼らは『曹操が食糧を焼いた』としか認識しない」

「そんな。それは、だって」

「後から支援物資が届く？ その支援はいつ届くのだ？ 夜か？ 明日か？ 明後日か？ その間に死んだ人間がいたら、その死んだ人間の身内や友人知人は誰を恨むと思う？ 食糧を奪った賊か？ それとも食糧を分け与えずに焼いた曹孟徳か？」

「……」

「もちろん賊も恨むだろう。だが本来賊とは不特定多数の存在。つまりは記号でしかない存在だ。人間、明確でないモノに怒りや恨みを抱き続けるのは難しい。ならば生きている個人、つまり曹操殿に恨みが向くに決まっている。その恨みは曹操殿の名が上がれば上がるほど溜まっていくだろう。なにが悲しくて賊を退治しにきた曹操殿が民からそんな恨みを向けられねばならんのだ？ よもや文若殿は曹操殿を恨む民が無尽蔵に増えても良いと考えているのか？」

「そんなわけないじゃない！」

「ならば食糧を焼くべきではないな」

「くっ」

はい論破。だがまだだ。まだ終わらんよ。

「次だ。文若殿は『賊から略奪したら我々の評価が落ちる』そういったな？」

「……ええ」

この時点でおかしいやろがい。

「ではそれが『賊から略奪した』ではなく『賊から取り戻した』となればどうなると思う？」

「え？」

「現在賊の陣地に溜め込まれている食糧は、彼らが土地を耕すなどして得たモノではなく、周辺の街や邑で略奪をして集めたモノだ。それはわかるな？」

「それがどうしたっていうのよー！」

「わからんか？ では一つたどえ話をしよう。もし陳留で大規模な賊が発生し、その賊によって大量の物資が略奪された場合、それらは誰の物資かね？ 賊の物資か？ それとも陳留の物資か？」

「そ、それは……」

誰がどう考えても陳留の物資だろうが。

「わかるだろう？ これを今回の件に当てはめれば、この賊が蓄えている物資の大半はここ潁川から略奪されたモノだ。ならばその物資を奪い返すということは、潁川の物資を取り戻すということだ」

「……」

「そして潁川の物資に対する諸々の決定権を持つのは潁川の太守であって我々ではない。それを勝手に焼いたらどうなると思う？」

「……潁川の太守、もしくは豫州の刺史から非難されるわ」

「その通り。結論としては、ここで食糧を焼いた場合、我らは民から恨まれ、賊から恨まれ、太守や刺史からも恨まれることになる。反対に、賊から奪われたモノを取り戻したことに對して文句を言う者はいない。無論独占しようとしたり大量に懐に入れようとした場合は非難されるだろうがな」

この辺のさじ加減が重要なのは事実ではあるが、だからって焼くのはあり得ないだろうが。

「それと近隣に食糧を配ることの是非についてだが、我々がそれを考

慮する必要はないぞ」

「は？」

「考えてみる。ここはどこだ？」

「どこって、どういう意味？」

「そのままの意味だが……まあいい。答えは豫州の潁川郡だ。先ほど  
答えを口にしていたな」

「だから、それがどうしたって言うのよ！」

「おいおい。なんでわからんのだ。」

「あのなあ文若殿よ。大規模な賊が健在である今ならまだしも、これ  
からここでは官軍と我らによって本格的な残党処理が行われるのだ  
ぞ？ その後に再度賊が発生するのか？ もし発生したとしても、そ  
れは豫州潁川郡のことではないか。何故我らが今後潁川で発生する  
かもしれない賊や、それらが行うかもしれない略奪に対して責任を負  
わねばならんのだ？」

「あっ！」

豫州の政は豫州の刺史が、潁川の政は潁川の太守が責任を持ってや  
るべきことであって、陳留の太守でしかない曹操が責任を負うこと  
ではない。

「当たり前の話だよなあ？」

「少し考えれば分かることなのに、何故気付かなかったのか。」

「恐らく曹操至上主義などところがある文若にとって『すでに自分の地  
元である潁川は曹操の領地である』という認識があるからだと思  
うが、それはあくまで文若の脳内設定であって現実ではないからな。」

「それともう一つ。勘違いを正しておこう。」

「あとな。元々俺は取り戻した食糧の使い道を周辺の街や邑に配布す  
ることだなんて一言も言っていないぞ」

「はあ？」

「先ほどは文若殿がそう主張したからこそ「もしやるとしてもそれを  
考慮する必要はない」と伝えるために反論しただけであって、俺の意  
見ではない」

「……いや、確かにそうかもしれないけど」

無然とした表情でそう呟いた文若。

彼女はその目に「だったらどうするっていうのよ!」という疑問を浮かべていた。

周囲にばら撒かないし懐にも入れないとなれば、やることは一つしかないではないか。

「なに、朱儁將軍に一言断りを入れた上で一部を周辺の街や邑に分配し、残ったモノを中央に献上すればいい。それで諸々の問題は解決する」

「はあ!?!」

お。文若だけでなくこれまで黙って聞いていた曹操まで反応したな。

そんなに意外だったか？

## 21話。 潁川の戦、終了

軍氣、もしくは戦気と呼ばれるモノが有る。

これは我々超人がその身に宿している気とは似て非なる物で、軍全体が醸し出す雰囲気というか、そういう類のモノである。

たかが雰囲気と侮るなかれ。

それなりの眼がある人間が見れば、向こうの陣営の士気がどのような状態にあるのかを理解することができるし、もつと優れた眼を有している人間であれば部隊ごとの士気の差を判別し、明らかに士気の低いところを攻めることで敵軍を貫くことさえ可能となるのだ。

そんな軍気だが、種類は多々ある。

簡単に例を挙げると、勝ちに浮かれているものだったり、負けに沈んでいるものだったりする。

その中で特に警戒すべきは敵が決死の覚悟を決めている場合である。

死兵は怯まない。

死兵は退かない。

死兵は諦めない。

そして死兵は一人では死なない。

戦場に於いて黄巾賊が恐れられたのは、一人一人が漢の圧政によって後を絶たれた人間であるためほとんどの兵が生きるか死ぬかの瀬戸際に追い込まれていた兵だったところにある。

勝てなければ死ぬのだ。

それが飢えによってのものなのか、官軍によるものなのかの違いはあれど、後がなかったことに違いはない。

故に彼らは強かった。

緒戦で官軍を打ち破り、潁川や南陽と言った要衝を制圧できるように強かった。

そう、強かったのだ。

「だが今の彼らは違う」

「そうね。ここからでも彼らが及び腰なのがわかるわ」

賊でしかなかった彼らが官軍を打ち破った。それは快挙だ。しかしその勝利が彼らに余裕を与えてしまった。

その余裕は大勢の仲間を引き寄せた。

大勢の仲間を得た彼らは、さらに気持ちいが緩んでしまった。これだけいけば負けないだろう。

自分が逃げてても他の人たちが頑張ってくれるだろう。

そう考える人間が出てくることは当然であった。

また、潁川で略奪を繰り返した結果、彼らは食糧を手に入れた。

この食糧がある間は戦わなくてもいい。

戦いがしたいなら、戦いたい人間だけが戦えばいい。

元々戦いを生業としていなかった彼らの中にそんな気持ちが生まれてしまったことを誰が責められよう。

そして、沢山いたはずの仲間が負けたことを知った者たちの心が挫けていることを、誰が責められよう。

「負け犬とはいえ賊は賊。容赦はしないわよ」

「当然だな」

責めることはない。

ただ攻めるのみ。

我らは官軍。国家の守護者にして民の守護者。

略奪者と成り下がった彼らにかけける情けはないのだから。

そう、異論はない。ただ懸念はある。

「……なごうよ」

「いや」

俺が抱える懸念とは、戦に先立ち文若が提唱した、敵の本陣を落とした証としてそれぞれの将旗を立てるというものだ。

それに曹操が便乗し、より高い場所に旗を立てた者に報奨を与えると言ったことだ。

文若の顔を潰すまいと思ってその場で異論を唱えはしなかったが、こんなことならしっかりと反対しておけばよかったと思う。

効果の程は理解はしている。

多少は曹操の名を高める効果はあるだろう。

だがそれが必要な事か？ と考えれば、そうは思えない。そもそも我らは朱儁將軍に断りを入れた上で洛陽に兵糧を献上しようというのだ。

この時点で誰が砦を落としたりか、なんて明白ではないか。それなのにわざわざ落としたりした砦に軍旗をたてまくるなど、朱儁將軍とともにいる諸侯に対する煽りと、金と資財の無駄でしかないように思えてならない。

それだけではない。

「司馬朗様」

「……ああ」

徐晃は痛ましいようなモノを見る目で敵陣を眺めている。

その瞳に映るのは、夏侯惇らに門を破られたことで心が折れた賊であり、心が折れたところに追い打ちを喰らい今も殺され続けている賊であり、その賊と戦う兵たちだ。

無論略奪を繰り返していた賊に同情の余地はない。

だが賊になつた経緯には酌量の余地がある。

彼らの大半は元は罪なき漢の民であつた。

彼らが賊に堕ちたのは、偏に役人や太守らの腐敗が原因だ。

一部の政治犯を除き、彼らは追い詰められて、どうしようもなくなつたからこそ賊に堕ちたのだ。

その末路がこれ、か。

何度も繰り返すが、賊に同情の余地はない。

たとえここで夏侯惇らに遊び半分で殺されたとしても、たとえここから逃げ出した後に南陽まで地獄の逃避行を行わねばならぬことも同情はしないし、するべきではない。

ただ、彼らの家族はどうなるのだろうか、と思う。

賊の家族は賊なのか、と。

そのまま死んでもいい存在なのか、と。

徐晃も同じことを考えているのだろう。

稼ぎ頭。というには殺伐しすぎているが、それでも彼らは家に帰れば親や妻や子がいるはずだ。

家族を喰わせる為に賊になった者もいるはずだ。

賊にならなければ身内が殺されていた者もいるはずだ。

そういうのを十把一絡げにして賊として滅ぼすことに違和感を覚えるのは悪いことだろうか？

いや、悪いことなのだろう。

我が妹も言っていたではないか。

戦における要点は5つ。

戦意があるときは戦い。戦えなければ守り、守れなければ退く。それができなくなったら降るか、死ぬかの二つしかない、と。

彼らは戦うことを選び、そして負けた。

ならばあとは降るか死ぬかしかない。

だが官軍は賊徒の降伏を認めない。

故に残るは死あるのみ。

我らがそれを執行することに是非はない。

それでも、遊び半分で処刑を執行するのが正しいとは思えない。覚悟があれば何をしても良いというわけではない。

神妙にしていれば何をしても許されるというわけではない。

しかし、物事にはそれに相応しい所作というものがある。

それに鑑みて、笑いながら敵を切り飛ばす必要があるのか？

旗を刺す場所を探しながら敵兵を殴り飛ばす必要があるのか？

なあ曹操よ。曹操殿よ。貴殿は覚悟しているのか？

遊び半分で子を、夫を、家族を殺された者が抱く恨みの先に立つことを。

とを。

文若よ。貴様は理解しているのか？

手柄を奪われ、略奪も封じられた上に面目まで潰された連中がどう

動くかを。

そして旗を指す場所を探しながら砦を攻めている諸将よ。

貴様らは理解しているか？

どれだけ圧倒的な勝ち戦であっても、配下の兵に犠牲が出ないなんてことなどありえないということ。

傷を負った兵は思うだろう。あるとき將軍が真面目に戦っていた



ら自分は傷を負わなかったのではないかと。と。

死んだ兵の友や家族は思うだろう。あのとき將軍が真面目に戦っていたら仲間は死なずにすんだのでは？ と。

無論、兵とて諸將が本気で戦っていることは理解しているだろう。だがどこか遊びが混じっているのも確かなのだ。

その部分がある以上、兵は、その家族は諸將を恨むだろう。

方針を決めた文若を恨むだろう。

方針を採用した曹操を恨むだろう。

その恨みがいずれ曹操を蝕む時がくるのかもしれない。

我らはそれから曹操を護らねばならない。

この乱世を終わらせる為に曹操は必要な存在だから。

だが、だがこうも思うのだ。

こうして面白半分で恨みをばら撒くような存在が天下を統べることのできるのだろうか、と。

どこかで自覚してもらい、態度を改めてもらわなければならないのではないかと。

勿論この場で指摘して自覚を促すことはできるだろう。

だが人は勝ちの中では学ばない。学べない。

まして相手は滅ぼすべき賊なのだ。

それを擁護するようなことは口にするべきではない。

また、勝利しているところに冷や水をかけてはならない。

彼女らの中に遊び心があるのは確かだが、命懸けで戦っているのもまた事実なのだ。

そうして勝利を掴んだところに説教をされては面白くないだろう。士気にも関わる。

なにより今回の件は曹操が認めたことだ。

反論すべき場で反論しなかった俺が口を出してはならない。

それはわかっているのだが、な。

「なんともままならぬものだ」

ああ、悲しいな。

さつきまであれほど痛かったちん○が、今はぜんぜん痛くない。

——この日、潁川に集った賊徒は大勢の仲間と共に本拠地を失うこととなった。

戦に敗れたものの、運良く南陽方面に逃げ延びることができた賊たちは、口を揃えて『曹操が如何に悪逆な存在なのか』を仲間たちに伝えたという。

## 22話。出世の兆し

「は？ 私を×州の刺史にする？」

「ああ」

豫州への遠征を終えてから数ヶ月経ったある日のこと。

神妙な顔をした司馬朗から告げられたのは、洛陽で私を州刺史にしようとする動きがあるという報告だった。

ちよつとなにを言っているかわからないわ。

「いや、色々とおかしいでしょう？」

漢全土が混乱している最中に郡の太守でしかない私をいきなり刺史にするとか、どう考えても異常だわ。

それになによりここには……。

「私が刺史になるとしたら、現在の刺史である劉岱様はどうなるの？ 罷免されるわけではないでしょう？ もしかして洛陽で何かしらの要職に就くのかしら？」

劉岱は宗室の出であり、兄弟である劉繇と共に二龍と謳われる程度には優秀だとみなされている人物だ。

と言っても、私からみれば彼の能力は極々普通の官吏に毛が生えた程度。

つまり特段優秀というわけではないと思っている。

ただまあ、宗室という血筋は馬鹿にはできないので、私としても上司として立てる分には問題ないと考えている程度の人物と言えはいかしら。

今のところ彼に失策らしい失策がないというのも、私が一応の評価をしている理由でもあるわね。

もちろんここ×州にも賊は蔓延っているけど、それだって豫州の潁川や荊州の南陽ほど大規模なものではない。

いや、これに関しては私たちが精力的に働いたからというのが大きいけれど。

それはそれとして、現在確認できている集団も一つ一つの規模はそんなに大きなものではないので、このままであれば官軍に頼ることな

く鎮圧できる状況よ。

つまり、血統が確かであり、特段失策もない劉岱が罷免される理由は無いのよね。

それなのになんでいきなり私が刺史になるの？

ああいや、もちろん彼が中央での立場を欲したが故に洛陽に戻るといふのであれば、それはそれで勝手にしろとは思うけど、今はさすがに時期が悪いでしょう。

さらに、その後任として私が充てられるとなると、ちよつと面倒なことになりそうなのよね。

主に宗室である劉岱に従っていた文官どもが宦官の孫である私に素直に従うかって方向で。

(まず無理でしょうね。だからもし本当に私が刺史になるのであれば、まず最初に私に従わないであろう連中をどうやって罷免するかを考えなくてはならなくなるわ)

面倒ね。なんて思っていたのだけれど……ことはもつと単純で、単純だからこそ断れない。そんな話だった。

「その劉岱殿だがな。先日死んだそうだ」

「はい？」

なんて？

「先日青州方面から雪崩れ込んできた賊の軍勢と戦い、討ち死にしたらしい。配下諸共、な」

「……本当に？」

「ああ。曹操殿にこの情報が届いていないのは、この情報が機密として扱われているからだろう」

「それは、そうでしょうね。宗室である劉岱様が賊に討ち取られた、なんて情報が軽々に広がったら困るもの」

「うむ」

賊が調子に乗るのもそうだけど、なにより『皇帝陛下の一族に連なる人間が賊に討たれた。主犯である賊は今も元気に□州を荒らしている』なんてことが広がれば朝廷の威信が落ちるわ。

故に劉岱が討たれたことを公表するとすれば、それは彼の仇を取つ

たあとでないといけない。

「つていうか、そもそも州刺史が戦で死ぬってどんな状況よ」

しかも賊相手に。

「おそろくだが彼は賊を舐めたのだろうか。なんでも数が勝る敵に対して正々堂々と正面から挑みかかったらしい。で、奮戦したものの武運拙く敗北したそうだ」

は？ 自分より多い敵に対して正面からぶつかった？

「それは武運がどうこうではなく、油断慢心の間違いでは？」

兵法を何だと思っっているのかしら。

「それも含めて、だよ」

「……なんとも言えないわね」

そう言えば官軍も一度南陽と潁川で負けていたわね。

それを考えれば劉岱だけのせいとも言えないのかもしれない。

ついでに言えば、劉岱の立場であれば賊如きに背を向けるわけにはいかなかったのでしょうか。

当然自分の領地に攻め込まれたら迎え撃つ必要があった。

戦い方については、どうせアレでしょう？

賊を過小評価した武官が『賊如き如何に数が多くとも鎧袖一触で打ち破って見せましょう』とか威勢のいいことを言ったんでしよう？

戦を知らない劉岱はその言葉を信じて戦った。でも賊の数と勢いに抗しきれずに威勢のいいことを言った部下諸共討ち死にした、と。

憶測でしかないけど大体間違っていないと思うわ。

主従揃って間抜けもいいところね。

まあ賊を前にして全てを投げ出して逃げ出した挙句、逃走に失敗して殺されるよりはマシってところかしら？

うん。劉岱の死にざまについてはそれでいいとして。

問題はここからよ。

「それで、なぜ私が彼の後任に選ばれるのかしら？」

問題はこれよね。

洛陽には私よりも刺史にふさわしい人間……はいないかもしれないけど、刺史になりたがっている人間はいくらでもいるでしょう？

洛陽の連中だって、自分に沢山貢いでいる子飼いの部下に役職を与えるいい機会じゃない。

なんで一切付け届けを行っていない私を刺史にしようとするの？  
それがわからないわ。

「曹操殿には刺史に就任するに足る実績がある。具体的には、以前の遠征の際に敵の本陣を落とした武功。潁川近郊の復興支援に助力した徳政への評判。さらには賊に奪われていた大量の食糧やら何やらを取り戻した功績。それらを評価したため、だな」

なるほど、それっぽい名目はあるのね。  
でも騙されないわよ。

「で、本音は？」

「現在洛陽を牛耳る人物の一人大將軍の何進としては、宦官の孫である曹孟徳に中央の役職や官位を与えたくない。何進と敵対している十常侍も宦官閥とはいえ自分たちと派閥が違う人間であつた曹騰の孫に役職や官位を与えたくない。何進とも宦官とも敵対している名家閥も宦官の孫に役職や官位を与えたくないと考えている。それはわかるな？」

「まあ、ね」

「しかし功績を挙げた者に褒美を与えないわけにもいかん。なにせ同様のことをしたときに自分たちが褒美を貰えなくなるからな」

「なるほど。向こうからしたら中央の役職や官位を与えたくないと考えていたところに丁度良く刺史の座が空いたって感じなのね。だからそれを私にくれてやるって？」

「だろうな。ついでに言えば、彼らの子飼いの部下たちの中に、現在進行形で賊に荒らされている州の刺史になりたいと名乗り出る人物がいなかったのだろうかよ」

「それはありそうね。彼らになりたいのは、あくまで平穩無事に暮らせて州の予算を懐に入れることができる立場であつて、本格的に兵を指揮して賊と戦ったり、州の予算を使って復興支援をするような立場ではないもの」

まかり間違つても前任の州刺史が殺されるような場所には赴任し

たくないでしょうね。

「そうだな」

「深読みすれば、刺史にしてやるから賊を何とかしろって意味もあるのかしら？」

「あるだろうがそれだけではない。もし曹操殿が賊の討伐や統治に失敗すればそれを口実に曹操殿を罷免、もしくは処罰できる」

「ふん。前任を支えた優秀な武官も文官もいない状況では、大宦官の孫娘でしかない小娘の私にまともな戦もまともな統治もできるはずがない。連中はそう考えて私を刺史にしようとしているのね？」

「だろうな。所謂位打ちというやつだ」

位打ち、ね。聞いたことはないけど何となくわかるわ。

元々褒美として刺史にするという話が、そのまま私に面倒ごとを押し付ける形になってるってわけね。

相変わらず洛陽の連中は、そういうところだけは抜け目ない。

でも、甘い。

「ねえ司馬朗。もし私が刺史に任じられた場合、司馬家と荀家から人員は紹介してもらえるのよね？」

「荀家に関しては文若殿に確認を取る必要があるが、司馬家は問題ないな」

「そう。それならいいわ」

直近で必要なのは洛陽の人間から見て優秀な人材ではない。

あくまで私の指示に従う人間よ。

それでは、理想は他の郡の無能な太守や役人も賊にやられてくれることだけれども、そこまでは望まない。

いきなり州の全土から太守や役人が消えたら政が覚束なくなるからね。

今は劉岱に従っていた文官や武官が居なくなったということだけで十分。

これだけでも前任者を気にすることなく春蘭たちを役職に就けることができるんですもの。

足手纏いがないのであれば、多少賊の数が多くとも何とかなる。

いいえ、なんでもして見せるわ。

「で、その内示はいつ正式なものになるのかしら？」

問題はここよね。

賊と戦うことが決定している以上、準備を怠るわけにはいかないもの。

敵の情報も集めないといけないし。

「曹操殿が望むのであればいつでも可能だ。最速を希望するのであれば、来月にでも正式な通達を携えた勅使が来るだろう」

「んん？」

どういうことかしら？

「母曰く『いきなり刺史へ任命されても困るでしょう？』だそうだ」

「ああ、なるほど」

それはそうね。

いくら私でもなんの準備もしていないところに洛陽から使者が来て『曹孟徳を刺史に任ずる。刺史としてこれより即刻×州に蔓延る賊徒を滅ぼせ』なんて言われても対応できないわ。

だから今は司馬防らが止めてくれている、と。

私に対する嫌がらせを止めて司馬家の立場は大丈夫なのか？ と  
思わないでもないけど……。

「心配無用。洛陽の連中からすれば、我が母が曹操殿を昇進させることを渋っているようにしか見えんだろうからな」

「それはそれは」

確かに、見ようによつては司馬防が宦官の孫である私の出世を押しとどめているように見えるわね。

実際は時間を稼いでいる間に諸々の準備を済ませろつてことなんだけど、そこまで理解できている連中がどれだけいることやら。

「そこまでしてくれているのであれば是非もなし。司馬防の期待に応えなくてはならないわね」

本当に、司馬防と誼を通じていたことは間違いではなかった。

ふふふ。いきなり現れた多数の賊に対して、事前に準備期間や情報  
がなかったうえ碌な経験を持たない兵を引き連れて正面から戦わね



ばならなかった劉岱と、事前の準備期間を用意してもらったうえ幾多の戦を経験した将兵を率いて戦に臨むことができる私と一緒にしたことを後悔させてやるわよ！

## 23話。出世の前の騒動

準備期間を含めて二か月後に□州の刺史になることを決意した曹操は、着任すると同時に命じられるであろう賊討伐の命令に対応すべく、これまで「今の自分には関係ないから」とおざなりにしていた□州内にある各郡の情報を集めることにした。

と言っても、今までも文若や彼女が連れてきた人員が根回しのついでに必要な最低限の情報は収集していたので、政治的な情報は求めている。

今回曹操が求めたのは軍事的な情報だ。

とくに、刺史であった劉岱が青州から来た賊に討ちとられた地、泰山郡に於ける賊の数や分布の状況である。

「私たちは宗室にして前任者である劉岱様の敵討ちを最優先で行わなければならぬ。でも、それはそれとして州全体を見る必要もあるわ」

「道理だな。差し当たっては泰山、否、山陽郡か」

「ええ。賊が暴れている泰山郡よりも、政治的に混乱している山陽郡を重視しなくてはならないかもしれないわね」

次いで行われたのが、□州刺史やその取り巻きが失われたことで混乱状態にあるであろう山陽郡の情報であった。

山陽郡は□州の州治所（県庁所在地のようなもの）が置かれている地である。

そこが混乱したままでは州の統治に差しさわりがあるし、なにより洛陽には山陽郡が混乱していることを理由に曹操を責め立てようとする人間がいるのはわかっているのです、こちらもすぐに対処する必要があった。

そこで曹操は、自分が新たな州刺史になるという内示が出ていることを理由にして腹心である夏侯淵に楽進・于禁・李典の三人と三千の兵を預けて山陽郡へ派遣し、現地で狼藉を働いている賊を討伐するよう指示を出した。

「書類仕事はその後でもできる。取り急ぎすべきことは今も民を苦し

める賊を討伐して武威を示すこと。違うかしら？」

「その通りだ」

着任してから数か月で前任の仇討ちと治安の安定化に成功する。

新任の刺史としては十分すぎる功績だろう。

民も喜ぶし曹操の立場も盤石となるのだから、異論などあろうはずがない。

並行して曹操は夏侯惇に曹仁と曹純及び軍勢五〇〇〇を預け、泰山郡の隣である済北国へ向かわせた。

彼女には泰山郡に向かう途中にいるであろう賊を討伐しつつ、現地での情報収集をするよう指示を出したわけだ。

泰山郡にいる賊の数が夏侯惇でも対処できると判断できる規模であれば、そのまま攻め入って賊を滅ぼす。

賊の数が多くてどうしようもないと判断したら、夏侯惇らはこれ以上賊の行動範囲を広めぬようけん制に専念。

その間に曹操自ら他の地域を完全に平定した後で夏侯惇に合流し、  
☒州の全軍で以て賊を殲滅する。

曹操はだいたいこのような感じの計画を立てていた。

「これで最低限の仕事は果たせるわ。あとは状況次第ね」

「そうだな」

予定通りいけば刺史に着任したあともそれなりに上手くいくと思われた。

しかし予定は未定とはよく言ったもので……。

「夏侯淵殿の下に豫州沛国の相から使者がきた、だと？」

「……ええ。今の相は陳珪という人物なのだけれど、彼女から援軍を要請する使者がきたそうよ」

なんで州を跨いでくるかねえ。権限の問題で面倒ごとになるから正直関わりたくないのだが。

「豫州は潁川の件でガタガタなのはわかるのだが……同じ豫州にあり沛国と隣接している汝南にいる袁家の連中は何をやっている？」

確かに山陽郡は沛国と隣接しているが、基本は同じ州内で片付ける

ものだろうかよ。

なんのための州刺史だと思っっているんだ。

「もちろん刺史や袁家にも援軍は要請したようだけど、期待はできないそうよ」

「まさか断ったのか？」

名家として名声を重視する袁家が同輩からの要請を断るとは思えないのだが。

「いえ、正式に断ったわけではないわ。ただ今の袁家には援軍を出す余裕がないの」

「それは何故？」

四世三公の家と謳われる袁家には、莫大な力と財力がある。

それこそ陳留一郡の太守でしかない曹操では及びもつかないほどの。

その袁家に余裕が無いとはどういうことだ？

「なんでも何進からの要請で、袁家で雇っている戦に使えるような人員の大部分を麗羽が洛陽に連れて行ったらしいのよ」

「……なんと」

洛陽絡みか。それではどうしようもないな。

確か豫州潁川と荊州南陽の他に冀州鉅鹿にも大規模な集団が確認されたんだったか。

それで、何進は冀州を敵の本拠地と判断し、それを討伐するため諸侯に兵を出すよう求める予定だったらしい。

袁紹には勅令が正式に発令される前に何進が洛陽にいる親族を経由して内示が出ていたのだろう、彼女はそれに従っただけだ。

それはわかった。袁家が意図して沛国を見捨てたわけではないことも理解した。

しかしその結果、我々に皺寄せがきているのはどうかと思わなくもない。

まあそれもこれもこの時期よくあることと言えばそれまでだし、なによりこちらはこちらで「他の州のことなど知らん」と言えばそれで終わる話なんだよな。

本来であれば。

実のところ今回に関して言えば、我々、というか曹操は援軍要請を断ることができない。

何故なら援軍を要請してきた相手が豫州沛国の相、つまりは曹操らの出身地を治める人物からの依頼だからだ。

当然沛国には曹操の知り合いや親類縁者が多数いるだろう。

それを見捨てることはできないのである。

道義的にも、実利の上でも。

儒教が蔓延るこの国は、基本的に法よりも孝徳を重視する時代なので法を理由に親類縁者を見捨てることができない。

それをやった時点で曹操の評判は地に落ちることになるからだ。

評判が落ちるだけではない。

沛国の賊を放置した結果被害が拡大してしまえば、出身地とそこにいる身内という地盤まで消失してしまうことになるのだ。

それなら現在山陽郡にいる夏侯淵を向かわせればいいのでは？

と思うかもしれないが、そこにも問題がある。

「現在秋蘭が率いている軍勢はあくまで山陽郡を鎮めるための軍勢だから、秋蘭をそのまま豫州へ行かせるわけにはいかないのよね」

これだ。基本的に公私混同となる行為はできるだけ控えねばならないのである。

孝徳を重んずる上に、中抜きなどは好き勝手やるくせに軍事に関してだけはおぎなりにできないのだから、実に面倒な時代だと思う。

いや、面倒なのは他人の行為を監視してしたり顔で評価を下す儒家連中なのだが。

「だから向こうには私が行くしかないわ」

「そうだな」

法のことこそそうだが、自分の親類縁者を自分で助けに行くのは理に適っている。

これなら儒家の反対もないだろう。

ついでに向こうで豫州の刺史とかに絡まれても曹操本人が行けば対処できる。

もちろん曹操自身の能力も問題ない。

理と利の両面から見て、曹操が出れば万事解決するだろう。

というか、曹操が出ないと解決しない問題だ。

難点があるとすれば、曹操が抜けることで陳留の政が滞ることくらいだろうか。

まあその辺は文若が上手くやるだろう。

あとは俺がどこに配属されるか、だが。

「沛国には栄華と季衣と流琉を連れて行くわ。貴方と徐晃は万が一に備えて待機していて頂戴。私がない間に何かあつたら貴方の判断で出撃してもいいわよ」

「了解した」

俺は留守居役か。

留守を預けるほど信頼されていると思えば良いのか、それともここに残って司馬家が推薦してきた人材を監督しろと言われているのかは微妙な所ところだが、フリーハンドで動けるのは悪くない。

もし俺が出撃しなくてはならなくなった場合、一人残されることになる文若が大変なことになりそうだが、まあそうなったときはそうなったときだ。

未来の文若に期待するしかない。

弱音を吐いたら「数か月の留守も守れず何が荀家の神童か」とか言つて煽れば馬車馬のように働くだらうしな。

俺は俺で無理をしない程度に頑張るだけだ。

——そんな感じで留守を守ること一か月と少し。

夏侯惇や夏侯淵が頑張つたおかげか、陳留では大規模な賊が発生することはなかった。

当然俺は一度も出撃することなく、もっぱら城内で文若と難民を使った開拓についての打ち合わせを行う日々であった。

その間に曹操は山陽郡の賊と戦っていた夏侯淵と合流して沛国に入り、あっさりと沛国周辺の賊を一掃した。

目的を果たしたのだからそのまますぐに戻ってくるかと思つたら、何を思ったか曹操は沛国方面から泰山郡に侵攻し、東から泰山郡に

入った夏侯惇とともに賊を挟撃。そのまま泰山郡に蔓延る賊を討伐してしまった。

正直やりすぎと思わなくもないが、この刺史になるのは俺ではなく曹操なので、自分の所領に蔓延る賊を滅ぼそうとした彼女の判断に文句を言うつもりはない。

予定していた以上の捕虜を持ち込まれたせいで一時文若が倒れそうになっていたが、それもまあ風物詩のようなもので問題なし。

暫くは文官仕事に励もうかと思っていたところに曹操らが帰還してきたので、留守の間にあつたことや他の地域の情報を伝えるために文若と共に曹操の執務室へと向かうこととなった。

「文若は論功行賞が先だと思うか？ それとも曹操殿が刺史に任命されてから論功行賞を行うと思うか？」

「……難しいところね。論功行賞はできるだけ早く行うのが望ましいけれど、陳留の太守である華琳様が賞するのと、刺史になった華琳様が賞するのでは同じ褒賞であっても価値が違うもの」

「うむ。理想は今の段階で一度、刺史になってからもう一度行うことだ。だが曹操殿の性格であれば報酬の二重取りは行わないから、論功行賞は一度しかできん。そういう意味では、武功になる泰山の賊は刺史になってから滅ぼして欲しかったというのが本音ではある」

「……いくらあんたでも、華琳様の決定に文句をつけることは許さないわよ」

「過ぎたことに文句は言わんよ。意見具申はするがな」

「違い？ 本人の受け取り方だな。」

「屁理屈を……まあいいわ。華琳様、桂花です。司馬朗と共に報告に参りました」

「なんやかんやで執務室へ到着である。」

わざわざ文若が俺が同行していることを告げたのは、ここで俺の存在を明確にしておかないと曹操がお楽しみの中だったときに困るからだな。

「入りなさい」

「はっ」

「失礼する……む？」

どうやらお楽しみではなかったらしい。

俺にとつても曹操にとつても不幸な事故は起こらなかった。

それは良いことだ。良いことなのだが……。

「あの、華琳様、そちらの二人は？」

文若が見つめる先には、見覚えのない二人の女性の姿があった。

「報告を受ける前に紹介するわ。豫州沛国の相・陳珪とその娘の陳登よ」

「陳元龍です！ よろしくお願ひします！」

一人は褐色と青い髪とメガネ（この時代にメガネがあることについてはもう突っ込まん）が特徴的な健康そうな少女だ。

露出も普通（ミニスカは諦めた）なので、特に問題はない。

問題はもう一人の方だ。

「陳漢瑜です。華琳様にお仕えすることになりました。これからよろしくお願ひしますね？」

青い髪は娘と同じ。だが同じのはそれだけだ。

なんだその胸部装甲とそれを強調する服は！

なんだその生足とそれを強調する服と紐は！

しかもこの見た目で陳登の親だと？

夫はどうした？ まさか……未亡人だともいうのか!?

くっ。鎮まれ俺の息子よ！

ここで立ち上がったら、生涯変態として扱われるぞ！

母を、あの厳格な母を思い出すのだ！



## 24話。不穏な噂

「天の御遣い？」

我が身の為に、美白・巨乳・未亡人と、色んな意味でリーゼンロツテを想起させてくる陳珪とは暫く一定の距離を取ると心に決めたものの、今すぐ距離を取れるかと言われれば答えは否。

報告はきちんとしなさいといけないし、何より今の俺の立場で初対面の相手と露骨に距離を取るの俺にとっても相手にとっても問題にしかならないので、今はなんとかこらえるしかないのだ。

いつもながら息子に苦勞を強いることについては本心から申し訳ないと思わなくもないが、悪いのは俺ではなくて周囲に沸いてくる痴女たちなので、ここはなんとか広い心でもって怒りを抑えて欲しいと切に願う次第である。

それはそれとして。

今回は、こちらから曹操の留守中にあつたことを報告するだけでなく、曹操からも遠征を通じて観たことや感じたことを聞かせてもらったのだが、その中に一つ聞き捨てならないものがあつた。

それが陳珪が耳にしたという『天の御遣い』を名乗る人物に関する情報である。

俺としては『話の内容よりも、まずその名乗りはあかんやろ』と思つたのだが、そう思つたのはどうやら俺だけらしい。

なんで？　と思つて細かく聞いてみれば、なんと曹操たちは陳桂らに話を聞く前から『天の御遣い』のを知つていたとのこと。

「噂自体は少し前から世に広まっていたわよ？　内容的には『天から御遣いが遣わされ、漢の乱れが正される』って感じなんだけど、知らないかしら？」

「知らん。聞いたこともない」

正直そういう噂話に興味がなかったし、そもそも俺の周りにそういう噂をする人間がいなかったし。

友達？　なんのことやら。

「どうせあんたのことだから、聞いた瞬間に『無価値』と判断して忘れ

たんじやないの?」

「……その可能性は否定できん」

「まあ、所詮は占いですものね。司馬朗が放置した気持ちもわかるわ」  
うーむ。二人の反応を見たところ、どうやら曹操と文若は噂を知りながらも与太話の類いと判断していたらしい。

情報を知った上で無視していたのだから、ある意味では俺と同じ穴の貉というやつなのではなからうか。

いや、記憶にさえないのと一緒にしたら駄目か。

というかだな。なんだ『天』の御遣いつて。

普通に不敬だろう。

洛陽におわす皇帝陛下を何だと思っっているのか。

噂では南陽の賊を率いていた張なんたらが神上使を自称したらしいが、同じ類の阿呆か?

ああ、いや、まて。

もしかしたら皇帝陛下が誰かを大將軍や相国に任じて天下を纏めさせるということなのかもしれん。

現在大將軍となっている何進あたりが自分の行動に大義を持たせるために流した噂と考えれば辻褃もあう。

……なるほど。この時代の民が持つ信心深さを利用した策ということか、さすがは身一つで成り上がった女傑。あなどれん。

「あら。華琳様の懐刀と謳われている司馬朗様が知らないとは意外でしたわ。でもまあ、基本的にこういった噂は民の不安の裏返しですから、治安が良い陳留では広まらないのも無理はないかもしれませんね」

「ふむ」

言われてみれば、すでに救われている人間は天に助けを求めないからな。

そういうものなのかもしれない。

「べきぎゃー」

俺が何進への警戒を新たにしつつ陳珪の言に納得している間に、自分が曹操の懐刀扱いをされていないことを知った文若が何やら悔し

そんな眼を向けてくるが、そんなの知らんがなと言いたい。

それよりも気になるのは、俺と同じように噂なんぎ一切信用していない現実主義者の曹操が自分からこの話題を振ってきたことなんだが。

「陳珪が言うには、その御遣いが幽州方面に現れたらしいのよ」

「……幽州に？」

「ええ」

妙だな。幽州は黄巾よりも鮮卑や匈奴の勢力が強いところじゃないか。

確かに連中も漢に混乱を齎す存在と言えそうだが、乱世云々でいえばあまり関係がない連中だぞ。

漢の混乱を正すという内容であれば、腐敗の源泉である洛陽か、最低でも何進の管理下でなくてはならないだろうが。

もしくはこれから黄巾を討伐する予定である冀州あたりでないとおかしい。

いや、幽州ならそのまま南下すれば冀州だな。

『天の御遣い』が賊の主力を討伐する場になれば漢王朝の面目は保たれる、か？

ふむ。だから何進は冀州を敵の本拠地と認定した？

なるほど。色々繋がったな。

まったく、我が妹であればもっと早く気付けたであろうに、我がことながらなんとも愚鈍なことよ。

「それでその彼、ああ、御遣いは男らしいわ。で、その御遣いは現在義勇軍を率いて幽州啄郡の太守である白蓮……公孫贇の下にいるそうよ」

「ほほう」

公孫伯珪は幽州の武人として名が知られている人物だ。

政治的な色が付いていないという意味では、何進が目をつけてもおかしくない人物である。

御遣いとやらが公孫贇の配下ではなく義勇軍として加わっているのは何進の指示だろうな。

公孫贇としては『天』の御遣いを受け入れることで洛陽と繋がりがあ  
ることを主張できるといふ利がある。

ここで御遣いの存在を大々的に主張して、文官や武官を得る足掛か  
りとするつもりだろう。

であれば『天』の遣いを送り込んで公孫伯珪を抱き込んだ何進の狙  
いは、幽州が抱えている精鋭部隊を手中に収めることだろうか？

皆無とは言わないが、何進の性格を考えると少し冗長な気もしない  
ではない。

……なんとも違和感は拭えないが、まあいい。

「その噂を知った上で、新たに×州の刺史となる曹孟徳はどう動く？」

とりあえずの問題は、天の御遣いとやらが実在することを知った曹  
操がどう動くか、と言うことに尽きる。

「どうしようかしら？ 桂花はどうするべきだと思う？」

「はっ。まずは洛陽に人員を送り『天の御遣い』を幽州に送り込んだ人  
物を特定することと、その意図を探るべきかと」

「確かにそうね。送り込んだのが誰か、そしてそこにどんな意図があ  
るのかを探らないと話にならないわ」

まあな。ここまで明け透けに『天』の名を使っている以上、御遣い  
とやらが朝廷の関係者から何かしらの密命を帯びているのは明白だ。

それに協力するにせよ邪魔をするにせよ、誰がどんな意図を込めて  
幽州に派遣したのかを知らなければ動きようがない。

俺は何進の策だと思っているが、実際にはそうとも限らないわけ  
だ。

思い込みや情報の不足から選択を誤って敵に利することをしたら  
目も当てられん。

まさか十常侍が公孫贇を抱き込むために人材を送るとは思えんが、  
万が一もある。

なにせ今の洛陽で最も武力を欲しているのは、大將軍としての武力  
を持つ何進でもなければ、地元に戻れば自前の武力を持つ名家ではな  
い。

直接的な武力を持たない宦官だからな。

故に連中が公孫贇と繋がりを設け、外から圧力をかけることで何進らの動きを掣肘するという策を用いないとも限らない。

その場合、十常侍と敵対している我々は公孫贇の邪魔をする必要があるだろう。

この理屈でいけば、こちらを嫌っている何進の味方をする必要もないのだが、問題は何進が他の二つと違って皇帝陛下を抱え込んでいるところにある。

何進や宦官の思惑を潰す分にはかまわんが、皇帝陛下の命に逆らうのはよろしくないと言うわけだ。

「これから桂花と司馬朗は洛陽方面の情報収集を行うとともに、冀州方面に展開している賊の情報も集めてもらうつもりよ」

ん？　今なにか妙なことを言われたような？

「冀州の賊、だと？　まさか遠征に赴くつもりか？」

「ええ。どうせ洛陽の連中は、私が□州の賊を平らげたことを知れば冀州へ出陣をするよう促してくるわ。そうでしょう？」

「その可能性は確かにある。だが治安維持を理由に断ることもできるだろう？」

というか、普通は断るだろうが。

遠征なんざ資源と労力の無駄。

別に武功が欲しいわけでもないんだし。

なにより張角らを討ち取れば賊の残党から恨まれることになるんだぞ。

そんな危険を冒してまで冀州に遠征だと？

それで一体我々に何の得があるのだ？

「あら。貴方は出陣に反対するのかしら？」

「無論だ。戦をするなどは言わんが、何から何まで曹孟徳が顔を出す必要はあるまい。潁川とここ最近の討伐で十分武功は稼いでいる。これ以上は他者からの僻みを買うぞ」

いやマジで。功績の独占はやめた方が良いぞ。

「今は様子見でよかろう。動かざること山の如し。地を廓めて利を分かつとも言うしな」

孫子も言っている。ほどほどにしろ、と。

「確かに、冀州で得られる武功を利とすれば、今回は他の諸侯に分けたほうがいいのかもしれないわね。でも権を懸けて動くとも言うわよ？」

状況に応じて臨機応変に、と言ってもなあ。

「曹操殿が居なければ負けるというのであればそうだろうな。しかし冀州の賊は曹操殿が動かずとも片付くだろう？　ならば必ずしも曹操殿が出る必要はあるまい。賊を叩くために遠征するよりもその分の予算を政に回した方が良いと思わないか？」

潁川のと看ときは状況が違ふ。そもそも復興の為にはいくらあつても足りんのだが。

「それは認めるわ。でもここまで賊と戦つてきた私が賊の本隊を滅ぼす戦に参加しないのは些か以上に不自然ではないかしら？」

「自然、不自然でいえば確かにそうだ。だが新任の刺史として民を慰撫するという名目を覆すほどではなからう。それで、本音は？」

「あら？　もう終わり？」

もう少し貴方との会話を楽しみたかったのだけれど。と笑みを浮かべる曹操。

彼女は、内心でずっと（下手に賢そうな会話をするとボロが出るからさつさと切り上げたい）と考えていた俺に何を期待しているのやら。

そう言うのは我が妹とやって欲しい。

彼女なら喜んで論破してくれるだろうからな。

それはともかくとして。

なんでここまでして賊退治に行きたがるのか。

そこがわからない。

そう思っていたのだが、どうやら今回に関しては俺の視野が狭かつたらしい。

「……私の眼で冀州の地形を見ておく必要があるわ。加えて、冀州の人間との繋ぎを取っておきたいの」

ああ、なるほど。言われなければわからないなんて、本当に俺は愚

鈍だな。

「袁家との戦を見据えて、か」

「「えっ!?!」」

「そうよ」

「「ええっ!?!」」

文若らがなにやら驚いているがそんなに驚くことではないだろう。

曹操の冀州刺史就任と前後して袁紹が冀州の刺史、もしくは州牧になることが内定しているという情報はすでに得ている。

そして曹操が天下を目指すのであれば、袁家とぶつかることになるのは明白。

当然、その時になってから調べるのでは些か以上に遅い。

なにより向こうも警戒しているだろうから情報を得る労力は多大なものになるだろう。

だが、今は違う。

多くの人間が曹操という人物を正しく認識していない上に、そもそも曹操と袁紹が本格的に争うと考えている人間がほとんどいない。

故に、動くなら今なのだ。

こちらは冀州の情報を得るために多少無理をしても遠征に参加したい。

そして、遠征に参加する名分は向こうが用意してくれる。

ここままで状況が整っているのであれば乗るべきだろう。

いや、乗るしかない。

「兵は2万程、期間は半年程度で大丈夫か?」

「ええ。それで問題ないわ」

賊を相手にするには多少多いかもしれんが……なに、州刺史としての初陣だ。

華々しく飾り立てても文句は言われんだろうよ。

周囲の連中にも『曹操が本気で武功を求めた』と思って貰わねば困るしな。

## 25話。思わぬ出世

刺史の代理として政をこなしつつ洛陽から、刺史への就任とそれに併せて冀州へ兵を出すよう命令が来るのを待つこと約一か月。

向こうとしては半分以上嫌がらせだろうが、こちらとしては待ち望んでいた使者が訪れた。

「曹孟徳を州牧へ就任させるのです。同時に、冀州への出兵をするよう命じます！」

「勅、謹んで拜命致します」

「ならば後は任せるのです！ 恋殿、さっさと洛陽へ戻りましょう！」

「……わかった」

「……」

歓待を受けることなく洛陽へと帰還していく二人を見て、どこか啞然とする表情を見せる曹操がいたとかいなかったとか。

勅使を名乗った呂布とやらではなくその横にいた陳宮とやらが全部話を進めていたような気がしないでもないが、細かいことは気にしないことにする。

曹操としても、陳宮がこちらに喧嘩を売っているように見えたとか、歓待の準備が無駄になったとか、色々と言いたいことはあるだろうが……今はそれよりもっと大事なことがある。

「冀州云々はともかくとして、その前。私の耳がおかしくなっていないければ、アレは私を州牧に就任させる。そう言ったわよね？」

ここで「残念だったな。それは嘘だ」と返せば良かったのだろうが、現実是非情である。

「間違いなく。洛陽ではこちらが予想している以上に人材が不足しているらしい」

「……そのようね」

元々州刺史になるはずだったのが、まさかの州牧への就任である。

それも司隸の隣に位置する州の、だ。如何に今が非常事態とはいえ、常識では考えられない扱いと言ってもいいだろう。

ちなみに州刺史と州牧の一番大きな違いは、軍権を持っているか否



かにある。

州刺史とは日本で言う都道府県の知事である。

政治を司る最高責任者であるものの、官軍（正規軍）とは別系統とされているので、彼らに対する命令権は持っていない。

軍の指揮権は中央から任命された司馬（ウチのことではない）や都尉と呼ばれる高級士官が持っている状態である。

なので、いくら州刺史が命令しても、司馬や都尉が領かなければ軍は動かない。

この辺は日本における知事と駐屯地司令官の關係に近い。

しかし州牧は違う。

州牧は司馬や都尉の上に立つ存在であり、本来中央に任命権があるはずの司馬や都尉の任命権も移譲されているほか、兵を率いる権利も持っている。

例えるならアメリカの州知事と州軍の關係に近いだろうか。

軍事力を持たない州刺史であれば、中央に反逆の意思を見せた時点で即座に左遷させたり司馬などに討伐させることができるが、自前の軍事力を有する州牧は簡単に排除することができないので、中央集権を是とする漢帝国にとってはあまりよろしくない存在である。

もちろん曹操は刺史に任命される前から夏侯惇らを始めた自前の部隊を抱えているため軍権云々が有名無実化しているとさえ、その通りなのだが、そもそも刺史として個人が持つ兵を扱うことと、州牧として州が持つ軍事力を万全に利用できることは決してイコールではない。

また州牧は、その軍事力を背景にして州内に存在する各郡の太守や県令に対しても強い影響力を発揮することができる。

その権力は、県令や郡の太守を自分で任命できるまでである。

これにより曹操は今まで自分が治めていた陳留はもとより、それ以外の郡を治めていた太守らに対しても強制力を持つ命令を発令することができるようになったというわけだ。

これらのことを鑑みれば、通常中央の権力者である何進にも十常侍にも名家にも靡いていない曹操のような存在に対して独自の軍権を

与えるかのような官職を与えることはない。

通常ではありえないことが成された理由はただ一つ。

『洛陽には□州で司馬や都尉になりたがった人間が居なかった』ということだ。

まあ気持ちはわからんでもない。

なにせ向こうからすれば、ここは賊によって前任の刺史や司馬などの武官が全滅させられた危険地域である。

甘い汁を吸いたいだけの人間にとって、ここは死地以外のなにものでもないのだろう。

そんなところの司令官になりたい人間などいるはずがない。

故に彼らは貧乏くじを押し付けあい、結果として曹操を州牧とすることにしたのだろう。

向こうからすれば『軍権をくれてやるから俺らに関係ないところで賊と戦え』と言ったところだろうか。

「……向こうの思惑はさておくとして、こちらからすればありがたい話、よね?」

「まあ、そうだな」

元々陳留で用意した兵と物資でやりくりする予定だったのが、州全体の予算をえるようになったのだ。

しかも冀州への出兵は勅令である。つまりどれだけ使っても反対意見が出ることはない。

いや、さすがに限度はあるだろうが、相当やらかささない限りは大丈夫だろう。

これによつてどれだけ財政的に助かるかは言うまでもない。

金庫番をしている曹洪などにとってはいい意味での青天の霹靂と言える人事である。

当然曹操としても悪いことではない。

権力が増えた分苦労も増すが、そんなことは刺史になると決めた時点で覚悟をしていたはずだ。

問題があるとすれば、洛陽の連中の劣化が予想以上に激しいことだろうか。

別に、今更連中に改心して欲しいわけでもなければ、覚醒して欲しいわけでもない。

ただ、中央の劣化が進めば進むほど地方の軍閥化が進むという事実が問題なのだ。

これにより、我々が出世するのはいい。

だがそれは、他の面々も同時に出世するということでもある。

今後、曹操が敵視している袁紹はもとより、豫州の袁術、涼州の馬騰、幽州の公孫贊、益州の劉焉、荊州の劉表、揚州の劉繇、徐州の陶謙などの地方軍閥が乱立する乱世となるだろう。

当然、それぞれが出世すれば、それぞれが人材を求めることになる。それはつまり曹操が得ることのできる人材が減るということだ。

もちろん司馬家ゆかりの人物や、荀家ゆかりの人物は優先して紹介できるだろうが、この圧倒的な売り市場の中、選ぶのはこちらではなく向こうである。

そんな状況で、大宦官の孫である曹操の下に来てくれる人間がどれだけいることか。

「せめてもの救いは、この乱が終わってから州牧に任じられるであろう麗羽たちと違って、私は現時点で州牧に任じられているってことかしら？」

「だな。今のうちに曹操殿が正式に州牧となったことを広く伝え、人材が外に行く前に囲い込むべきだ」

「無理やりは好きじゃないのだけれど、そんなことも言っていられないものね」

「ああ」

優秀な人材をむぎむぎと敵に仕官させるのもおかしな話だし、なにより読み書き算術ができる役人の確保は絶対に必要となる。

故に争奪戦が始まる前に動き、囲い込むことこそが肝要となるだろう。

差し当たっては潁川の陳羣と戲志才。山陽郡のちりよ郝慮。東郡の程立だろうか。

「潁川に関しては桂花に任せるとして、郝慮と程立は早めに招聘した

ほうが良さそうね」

「そうだな。向こうも名の知れた名士だし、なにより早急に曹孟徳が×州の人間を軽んじているわけでないということを示す必要があるだろう?」

「ああ。そうね。これからはそんなことも気にしないといけないのね」

「州牧だからな」

現在曹操の部下として働いている者のうち幹部とされているのは、一門衆の他は夏侯姉妹と荀彧、それから俺だ。

曹操や夏侯姉妹は豫州沛国の生まれだし、荀彧も豫州潁川郡の生まれ。俺にいたっては司隸の河内生まれときている。

……おわかりいただけだろうか。

これから×州の州牧になるという陣営の幕僚の中に×州出身者がいないことを。

ちなみに新たに配下になった陳珪母娘は徐州出身にして豫州沛国の相なので、これまた×州とは無関係だったりする。

一応将軍クラスである李典・楽進・于禁・許緒・典韋は全員×州出身ではあるものの、全員が全員名家の生まれではないし、なにより本人たちが文官向けではないということもあり、発言力という点では数段劣る立場にあるのが現状である。

地元の出身者が少なくても別に問題がないように見えるがさにあらず。

このままでは『曹操が×州の出身者を軽んじている』という風評が立ってしまう可能性がある。

これの何が問題かと言えば、この噂を耳にした×州の豪族たちが曹操に反発してしまうのである。

それも理屈ではなく、感情的な意味で。

この時代、地方の豪族を無視して政を執り行うことは不可能に近い。

いや、やろうと思えばできなくはないが、かなりの労力と時間が必要となる。

具体的には、命令に従わない豪族を片っ端から肅清する労力と、その後釜を用意するだけの時間が必要となる。

故にこれまで曹操は陳留郡の太守でありながら、郡内にある各県の県令や邑の豪族には一定以上の配慮をすることを余儀なくされていたのだ。

そういった事情から、我々は早いうちに×州出身の名士を招聘することで、自分が×州の人間に隔意を持っていないということを示さなければならぬのである。

もちろんいくら地元を配慮すると言っても無能な人間を取り立てる必要はない。個人的にもできるだけ優秀な人材を確保したいというのがある。

その優秀な人物というのが、先に挙げた郗慮と程立だ。この二人を得ることができたなら、あとは二人が推挙した人間を取り込めば下ごしらえとしては十分だろう。

向こうとて自分たちが×州の政に関わる機会を棒に振るような阿呆ではないはずだ。もしもこの招聘の意味さえ理解できない阿呆であつたならば、そんな人物はこちらから願い下げである。

こちらは最悪『曹操から招聘した』という事実があればそれでいいのだから。

付け加えるならば、あまりにも地元を軽視し過ぎていると判断されたら、張邈や鮑信のような×州出身の太守が人員を推挙してくるだろうから、それを待つという手もある。

どちらにせよ曹操から手を差し伸べるのは一度だけ。

その一度を掴むことができるかどうかは向こうの器量次第。そういうことだ。

「願わくば優秀な文官に来て欲しいところだな」

「ええ。そうね。心からそう願うわ」

どんな人材が集まることやら。

無能な働き者がこないことを切に願うところである。

## 26話。未知との遭遇①

招聘した人材の評価や確保に関しては帰還してからにすることにしている。

当座は勅命を果たすことを優先することにした曹操は、即座に冀州へ向けて進軍を開始した。

ちなみに留守居役は曹洪と陳珪親子である。

本音を言えば文官仕事ができる曹洪も従軍させたかったところだが、勅令とはいえ州牧である曹操が州の外に出る以上一門の人間を残さないと問題が発生した時に色々困るということで、泣く泣く彼女に留守を任せている。

純粋な武官である曹仁には無理だし、妹の曹純も曹仁と離れ離れにすると情緒不安定になるからこの配置は仕方ないのだ。

陳珪母娘？ 豫州沛国の相が兗州の州牧に忠誠を誓ってるのを見られたら困るだろう？ だから留守番である。

幸い二人とも書類仕事を苦にしないタイプの人間なので、曹洪とも仲良くやれているはずだ。

別に、母親の方が俺の息子の情操教育に悪いという理由で置いてきたわけではないのである。

それはそれとして。

「……ここ周辺は河が入り乱れているわね。この地形であれば大軍を用意しても満足に展開できない。だから、籠城する場としては最も適しているでしょう。問題は反撃手段だけだ」

「兵糧だろう。短期決戦を望むのであれば本格的なものを造る必要はないが、長期戦をする覚悟があれば河を渡った先に集積場を造る必要がある」

「大軍の弱点は物資の消耗が激しいこと、か。物資を補充するにしても、その都度河を渡った先から運ぶのは労力がかかり過ぎるものね。故に河を渡った先に集積場を造るというのは尤もな意見だわ。それを狙えというのもね」

「うむ」

基本中の基本だな。だからこそ相手も警戒しているだろうし、細かい兵数や展開具合もわからないのでこれ以上は細かいことは言えない。

だがまあ、現在敵が目の前にいるわけでもなし。今行っているのは飽くまでシミュレーションなので、妄想を膨らませても何の問題もないのである。

むしろ妄想を膨らませるのが仕事と言っても良いかもしれない。

ある意味一番楽しい時間だな。

「で、私たちが官渡に城塞を築いたとして、麗羽が物資の集積地として選ぶのはどの辺だと思う?」

「曹孟徳を最大限警戒するのであれば主戦場から離れた地、白馬の近くに分散するだろう。中程度の警戒であれば陽武か延津周辺。警戒が少ないのであれば南阪周辺だろう」

「いくらなんでも南阪はないわね。いや、麗羽ならありえないとは言いつれないのだけど、部下が全員アレなはずがないもの。だから延津周辺が怪しいわ」

「その辺の判断は任せる」

なにせ俺は袁紹と直接接したことがないからな。

為人を知っている曹操の判断を信用するしかないわけで。

「桂花、聞いていたわね?」

「はっ! これより陽武と延津周辺の地図を作成させます!」

「よろしい。それと別に急ぎではないから、早く終わらせるよりもより精密なものを作成するよう命じなさい」

「御意!」

文若にも仕事を与えられてなによりである。

そんなこんなで、陳留を出た軍勢はそのまま東郡へ入りつつ、戦場となるであろう官渡・白馬・延津などをつぶさに確認した後、黄河を渡り、冀州は魏郡・黎陽に上陸。

「ここが魏郡……」

ここから北へ行けば魏郡、いや、冀州最大の都市である×県がある。我々が×まで到達しているということは即ち袁家との戦いにも勝

利しているということなので、今の我々が見るべきは□ではなく□に至るまでの道、つまり今進軍しているこの周辺こそ最も力を入れて探るべき場所なのだが……どうも曹操が浮かれているように見えるな  
くもない。

なんだ？　と改めて考えてみれば、心当たりが一つだけあった。

それは以前『もし自分が国を興すとすれば、その国の名は魏にしよ  
うとしていた』なんて感じのことを言っていたような言っていないなかつ  
たような気がするというものだ。

当時は『そう言えば三国志つて魏と呉と蜀だったな』とか『戦国七  
雄の一角ではあるものの、結構序盤の方で秦によって滅ぼされた国の  
名を使うことになにか意味があるのだろうか？』などと思っただものの  
『漢に滅ぼされた国の名を名乗るよりはずっと穏当だ』と思っていた  
から国名に関しては口を挟もうとは思わなかったのだが、今の曹操の  
様子を伺うに本人的には結構大事なことだったようだ。

魏について曹操がその身に宿す情動については後で聞いてみると  
して、だ。

そろそろ現実を見ようか？

「華琳様！　前方にて砂塵が上がっているのが見えました！　おそら  
く数千単位の軍勢がぶつかっているものと思われまます！」

夏侯淵も捉えたか。中々いい眼をしている。

「……へえ？」

なにやら『せつかくいい気分浸っていたのによくも邪魔をしてく  
れたわね』なんて副音声か聞こえた気がするが、きつと気のせいだろ  
う。

まったく、賊か何か知らないけど、せつかくいい気分浸っていた  
のによくも邪魔をしてくれたわね！

とは言っても、ここ魏郡は洛陽の連中が『賊の本拠地がある』と名  
指ししていた鉅鹿郡に隣接している土地だから、向こうからしてみれ  
ば私たちが邪魔をしにきた感じなんでしょうけど。

まあ賊徒の気持ちなんてどうでもいいわ。



「お互いが数千規模となれば戦っているのは官軍と黄巾の賊でしょう。もし官軍が苦戦しているようだったり賊の規模が大きかった場合は助勢する必要があるわね」

「はっ！」

規模からすれば刺史ではなく県令か郡太守が率いる軍勢だと思うけど、数千単位の賊に勝てるのかしら？

もし官軍側が不利だった場合、見殺しにしたら文句を言われるわよね。

もし官軍側が勝っていたら、向こうから『功績を掠め取るつもりか？』なんて邪推されるでしょう。

でも、散り散りに逃げる賊を全滅させるのは容易いことではない。

また連携訓練をしていない相手と連携するくらいなら各自で動いたほうが効率が良い。

つまり我々がすべきことは、直接賊とぶつかることではなく、賊の逃げ道をふさぐことよね。

「秋蘭」

「はっ！」

「五千の兵と共に先行して賊徒の背後に展開。逃げてくる連中を片付けなさい。捕虜はいらないわ。副将として凧と沙和。移動の際は連中から捕捉されない距離を保って弧を描くように移動すること」

「はっ」

「了解しました！」

「了解なの！」

秋蘭であれば細かく指示を出さなくても自分で最も適した場所を見つけられるでしょう。

これで退路は絶った。

次は正面。

「春蘭」

「はっ！」

「貴女は五千の兵と共に本陣の前に展開。副将は華命と真桜。もし連中がこちら側に来た場合は容赦なく掃り潰すからそのつもりでいて

頂戴」

「御意！」

「気合入れるっすよー！」

「了解や！」

これで最低限の備えはできたわね。

あとは取りこぼしがないようにしておこうかしら。

「柳琳」

「は、はい！」

「貴女は二千の騎兵と共に秋蘭の後方に布陣して。敵が散り散りに逃げたところを追ってもらうわ」

「はい！」

これでよし。残りは本陣ね。

「季衣と流琉は私の護衛よ。桂花と司馬朗は向こうの将との交渉に付き合ってもらうわ」

向こうの素性がわからないものね。

都尉や県令なら州牧である私の方が上位だからそれで良いのだけれど、もし相手が洛陽と繋がりが強い名家の人間であった場合、指揮権を奪われる可能性がある。

故に同じ洛陽に繋がりを持つ桂花と司馬朗に同行してもらおうのよ。

「はい！」

「わかりました！」

「承った」

徐晃は言うまでもなく司馬朗の護衛をするからこのままでよし、と。

「こんなものかしら」

あとは戦場の風向き次第。

賊が勝つようなら横槍を入れる。

官軍が勝つなら後詰に入る。

どちらに転んでも私たちにとっては良い経験となるわ。

なんなら見ているだけでもいい勉強になるのよね。

数千単位の軍勢のぶつかり合いなんて早々見学できるものではない

いし。  
「さあ、見せてもらうわよ。私たちの前方で戦っている連中の手並  
みってやつを、ね」

## 27話。未知との遭遇②

数千単位の軍勢のぶつかり合いを第三者として見学できる機会など早々ない。それが訓練ではなく、お互いが命懸けで戦う真正銘の戦となれば尚更である。

簡単などころでいえば、敵の動きに対して将が下す指示や、その指示を出すまでの時間を見れば将の質がわかるし、将に従う兵の動きや、指示が行き渡る速度を見れば兵の練度が伺える。

また、先陣を任されている将と全体を指揮する将との関係を見ることで、軍全体の練度も見ることが出来る。

見事な動きをするならそのまま参考になるし、未熟な動きをするのであれば反面教師として利用できる。

どちらに転んでも損をしないため、我々にとっては非常に都合の良い教材であると言えよう。

もちろん自分たちが命懸けで戦っているところを見世物のように見られて面白いと思う輩はいない。そのため、こちらもただ見学しているわけではないことを示す必要があるだろうが、今回に関しては敵の逃げ道を遮断したり、さりげなく圧力をかけたりと援護としてみれば十分以上に配慮しているため、戦が終わった後に文句を言われる可能性は極めて低いと思われる（どれだけ配慮してもわからない馬鹿もいるので、皆無ではない）

向こうにその『度の超えた馬鹿』という想像上の生物が実在するかどうかは後で判明するので今は考えないことにして。

我々の前方で行われていたのは、確かに数千単位の軍勢のぶつかり合いであった。

それだけであれば特に問題はなかったのだが、ここで一つの問題が発覚してしまう。

「片方は黄巾の賊だけど、問題はその賊と戦っている方よね。官軍ではないようだけど……」

「うむ。一部を除いて装備が貧弱すぎる」

所属は旗を見なければわからないが、装備を見れば相手が官軍か否

かは一目瞭然である。

「自警団、いえ、義勇軍、でしょうか？」

「可能性はあるわね」

「数千単位の義勇軍か。ぞつとせんな」

楽進らがそうだったように、官軍以外でも黄巾と戦おうとする者たちはいる。

しかしながら、そういった者たちは大半が自警団として、自分たちが住む街や近隣の邑を護るために組織されているものだ。

彼らはその性質上、補給に難を抱える傾向にある。

もちろん自分たちの街を防衛している最中であればその限りではないが、軽々に賊の討伐などできるような余裕などない。

さらに、基本的に兵士となる者は若い男、つまり労働力として欠かせない人材である。

故に彼らは、戦わなくて良い敵と戦って数を減らすわけにはいかないのだ。

そのため彼らは自分たちが住んでいる街や近隣の邑を防衛するために見回ることはあっても、積極的に賊と戦うことはない。

まして敵が数千単位の賊ならば尚更だ。街に籠って防衛することに専念しようとするだろう。

自警団にとって大事なものは街の防衛であって、賊の首を取ることはないのだから。

賊だつて数千単位の自警団が籠る街を攻めようとは思わないはずだ。

彼らにとって重要なのは物資を得ることや、官軍を打ち倒すことであつて、自警団と死闘を繰り広げることではないのだから。

それ以前の問題として、数千単位の規模となった賊を討伐するのは官軍の仕事である。

確かに冀州も他の地域と同じように賊によって荒らされているのだろうが、郡はそれほど荒れてはいない。

つまり官軍でも十分対象できるはずだ。

……もしかしたら賊を恐れた官吏が義勇軍に戦わせたという可能

性もないわけではないが、そもそもこれからここ冀州には黄巾の本拠地を叩くために何進に集められた諸将が続々と乗り込んでくることになっていく。

その誰もが武功を求めていると考えれば、現時点で県令や郡太守が義勇軍に数千単位の賊を討伐させる理由がない。

よってまともな官吏であれば、義勇軍に解散する（もしくは官軍の指揮下に入る）よう命じるだろう。

それを拒否された場合は、賊が街を襲わぬよう都市の防衛に専念させるはずだ。

もつと言えば、県令や太守の命令に従わない数千単位の軍勢が当たり前に存在していること自体がおかしい。

一体全体冀州の統治はどうなっているのだろうか？

「冀州の統治について思うところが無いとはいわないけど、今は眼前の戦よ。賊が約五〇〇〇程度で、もう片方、面倒だから義勇軍つてことにするけどそちらが三〇〇〇程度。数の上では賊が勝っているようだけど、優勢なのは義勇軍の方みたいね」

「そのようだな。勝敗を分けているのは率いている将の差、か」

「でしょうね。あの黒い髪を靡かせた武将が先陣を切ることで敵を翻弄しているようだけど……」

「無駄の一言に尽きる」

「ええ。そうね」

将による単騎駆けが悪いわけではない。

問題なのはその将に兵が付いていけないことだ。

ウチの陣営で言えば夏侯惇も似たようなことをするが、彼女の場合は己が鍛えた兵卒やそれを率いる夏侯淵や曹操を信用して突っ込んでいるのであって、闇雲に突っ込んでいわけではない。

しかし向こうの将は違う。アレは兵を信用しているわけでもなければ、後ろで指揮を執っている人間を信用しているわけでもない。

ただ『己の武があれば賊程度何とでもなる』と思って突っ込んでいくだけ。そこに連携の文字はない。

まともな目を持っているのであれば、前線で勝手気ままに暴れる将

に褒めるところはない。

むしろあれを補佐するために必死で兵を動かしているであろう指揮官に哀れみさえ覚えるだろう。

「夏侯惇殿と文若を組ませればアレと同じようなことがおこるやもしれんな」

「……ちっ」

兵の質が違うので一概に同じことになるとは言えないが、おそらく似たような感じになるだろうと思われる。

「尤も、あれが義勇軍と考えれば、あれだけの将と兵との間に差が生じるのも仕方のないことではあるのだけれど」

「官軍だろうが義勇軍だろうが自警団だろうが兵を信用していない時点で将としては無能だぞ」

「……そうね」

どれだけやれても所詮は一人なのだ。できることには限りがある。事実、俺とて向かってくる賊の首を取ること自体は難しくくない。

しかし逃げる敵を追って全滅させるのは不可能なのだ。

故に、あの黒髪の女の暴走を暴走で終わらせぬよう兵を動かしている指揮官こそ、義勇軍を勝たせている要因と言えよう。

「なににせよ、戦の終わりは近いぞ」

「ええ。ここまですれば両軍とも私たちの存在に気付いているでしょうから、これからは官軍を敵と認識している方が崩れるわ」

両方崩れたら面白いが、さすがにそうはならんやろ。

「賊が崩れたとしても、数に劣る義勇軍が逃げる賊を全滅させることはできない。夏侯淵殿たちの活躍が期待できそうだなによりだ」

相手が義勇軍であれば、戦闘の前に懸念していたようなことにはなるまい。

むしろ、賊が逃げた際のことを考えていなかった向こうの指揮官に対して叱責しなければならんだろうが、その辺は曹操に任せよう。

「あの黒髪の将、ウチに来てくれないかしら？ 私たちなら上手く使えらと思うんだけど」

「なっ！」

「勧誘したいのであれば好きにすればいい。ただ、見た感じ夏侯惇殿とは相性が悪そうだし、文若とも相性が悪いだろうから、使いどころは考えねばならんぞ」

「……貴方との相性はどうかしら？」

「悪いだろうな」

「あら、即答？」

「理よりも私情を優先するような人間とは合わん」

夏侯惇？ 彼女は曹操を優先することが最も合理的だと確信した上で依存しているからな。

結果として曹操が間違えない限りは合理的なのである。

また、夏侯惇は曹操の命に逆らわない。

仮令激昂しても、曹操に諫められれば止まるのだ。

だが、あの黒髪の女が唯々諾々と曹操に従うようには思えない。

万人が納得する義や理を用いて反論するのはいい。

だが情に従って主君に背くような人材は組織にとって害悪でしかない。

そういう意味では文若もそうなのだが、彼女は感情的な部分はあるけどその主張には一定の理があるし、なにより書類仕事や人材の斡旋によつて結果を出しているので文句を封殺できている。

……封殺できているだけで、火種が燻つたままなのはよろしくないが、それも時間が解決するだろう。きつと。多分。

だがここでアレを加えるのであれば、その限りではない。

曹操は新たな火種が陣営の全てを焼き払わぬよう、相当気を遣わなければならぬだろう。

そこを自覚した上で陣営に加えると言うのであれば、好きにすればいい。

この陣営の主は飽くまで曹孟徳であつて、俺ではないのだから。

「理と情、か。……とりあえず勧誘云々は後にして、まずは向こうの話を聞いてみましようか。桂花は義勇軍を率いている人物に、こちらに来るよう使者を出しなさい。使者には向こうの陣容を探れる人員を当てること」



「はっ！」

「司馬朗は二〇〇〇の兵を率いて賊を追撃してもらうわ。秋蘭や柳琳にも指示を出して頂戴。一人も逃がさないようにすること。いいわね？」

「御意」

会谈の前に賊が滅ぶ様子を見せつけることで曹操軍の怖さを義勇軍に示す。ということだろうな。

あまり物騒なのはどうかと思わなくもないが、主がそれを望むのであれば是非もなし。

「いくぞ、徐晃」

「はい、司馬朗様」

賊徒死すべし、慈悲はない。

冀州の賊どもに曹孟徳が軍勢の恐ろしさを知らしめてくれるわ。

## 28話。未知との遭遇③

公孫贄のところでは義勇軍を募って、黄巾賊と戦うことはや数か月。黄巾賊の首領である張角が冀州にいて、それを討伐するために官軍が集まると聞いた俺たちは、冀州に入り張角の居場所を探していた。

その途中で賊の大軍に遭遇したので戦っていたのだが、いくらこつちに関羽愛紗や張飛鈴々という猛将がいて孔明朱里や龐統維里という軍師が指揮を執っていたとしても数の差つてのは大きいもので、こちらよりも数が多かつた賊を鎧袖一触で蹴散らすというわけにはいかなかった。

結局、申し訳なきような顔をした雛里から『戦いを優勢に進めてはいますけど、彼らを討伐するにはもう少し時間が掛かりそうです』と告げられることになった。

時間はかかるけど負けるわけではないとのことだったので、俺は『関羽とか孔明がいてもそういうもんなのか』と思いつながら戦場を眺めているだけだった。

兵の指揮を雛里に任せ、敵に援軍などがこないことを確認していた朱里が声を上げたのはそんなときだった。

「はわっ！ ぐ主人様！ 桃香様！ 向こうに官軍が展開しています！ 援軍です！」

ちなみに桃香つてのは劉備のことだ。

俺には北郷一刀つて名前があるんだけど、何故かご主人様と呼ばれている。

いや、何故か、ではない。

なんでも俺は彼女らのいう「天の御遣い」ってやつらしく、以前から結構な噂になっていたんだとか。

その有名になった名前を最大限利用するため、桃香たちは日本から来たばかりで右も左もわからぬ俺を主君として仰ぐことにしたのである。

これだけ聞けば桃香たちの性格が悪いように聞こえるが、そんなことはない。

彼女たちは桃香の夢である「みんなが笑って過ごせる国」を造るた

めに、利用できるものはなんでも利用すると決めただけなのだ。

俺だって彼女らの夢に共感したからこそ、こうして彼女らに担ぎ上げられることを認めているしな。

だから桃香たちの性格が悪いなんてことはない。

武官である愛紗と軍師である朱里の仲が微妙なところはあるが、それだけだ。

まあ、彼女らの仲については時間が解決してくれるだろうから、今は目の前の戦に目を向けよう。

援軍と言っていたよな？ 確か官軍つてのは正規軍のことだったはず。

それなら確かに賊と戦っている俺たちの味方だ。

だから朱里も正体不明の軍勢を援軍と断定できたんだろう。

「やった！ これで勝ちが決まったね！」

「はい。でも……」

「どうしたの雛里ちゃん？」

「所属を示すのは陳留や兗州の旗。そして将旗は蒼地に黒の曹。あの旗は賊滅で名高い陳留太守曹操様の旗です。これでは賊討伐の手柄は全部向こうに流れてしまいます」

「ええ!？」

「そ、曹操だつて!？」

曹操と言えば三国志の英雄にして劉備のライバルじゃないか！

この世界の人間関係はわからないけど、もし向こうが劉備を敵視したらここで殺されちゃうんじゃないか？

手柄云々よりもそっちの方が問題だぞ！

「ご主人様は曹操様のことを御存知……あ、天の知恵ですか？」

「ああ、そうだ。俺が知る限り、曹操つてのは桃香にとって最大最強の敵だった人物だぞ！」

「ええ!?! 私の最大最強の敵!？」

「間違いない」

向こうがどう思っていたかは知らないが、少なくとも劉備にとって曹操は最大最強の敵だった。

「しゅ、朱里ちゃん。その、曹操さんってどんな人なの？」

「ええつとですね。私が聞いた限りでは賊には一切容赦しない人ですけど、民には徳政を敷く人物と聞いています」

「あ、民に優しい人なの？ なら……」

「で、でも桃香様。曹操様の苛烈さは、桃香様が想像しているようなものではないんです」

「そ、そうなの？」

「はい。【曹操の前に賊はなく、曹操の後ろにも賊はない。曹操が率いる軍勢にとつて賊は遊具。笑って殺し、殺した数を競う】【先陣切つて賊を両断するのは大剣担いだ夏侯惇。夏侯惇が切り開いた道を拡げて均すは夏侯淵。その両者が積み上げし賊の頸を前に啗うは曹孟徳】なんて詩が広がるくらい容赦のない人なんです」

「そんな！」

「大げさ……ではないだろうな」

俺が知る曹操ならそれくらいはやりそうだ。

やっぱり民草を大事にする桃香とは反りが合わないだろうな。

「でもでもご主人様。曹操様は賊にとつては悪鬼そのものですが、民からすれば紛れもない英雄なんですよ！」

なにやら曹操に嫌悪感を抱いていそうな朱里とは違って、雛里は曹操を悪い人とは考えていないみたいだ。

確かに、民からすれば、曹操は自分たちを苦しめている賊を率先して討伐してくれている人物だもんな。

それに後世曹操は英雄と言われるだけのことをしているのだから、雛里の言い分も間違つた評価ではないのだろう。

賊の側からすれば悪鬼。

民の側からすれば英雄。

両極端だが、それもこれも『治世の能吏、乱世の奸雄』と謳われた曹操の評価としては正しいものなのかもしれない。

「それと、曹操様の下にはたくさん英傑が揃っています。そのことも無視するべきではないかと」

「あく確かに、曹操の四天王と言えは夏侯惇と夏侯淵以外にも曹仁と

曹洪もいるよな」

四天王なのに四人しかいないってのがネタにされてたけど、確かその下に張遼とか徐晃とか楽進とか李典とか于禁の5人がいるんだよな。

そう思っていた時期が俺にもありました。

「曹仁様に曹洪様、ですか？」

「お名前からすると一門の方でしょうか？」

「あれ？ 違うのか？」

朱里も雛里も知らない？

もしかしてまだ有名じゃないのかな。

「えっと、ご主人様が持つ天の知恵にその名があるのであれば、きっとそのお二人も優秀な将なんだと思いますけど」

「でも私たちが言いたいのはそのお二人ではありません」

「四天王より優秀？ そんな人材が曹操のところにいるのか？」

曹操の初期メンバーと考えればその四人だと思うんだけど。

「はい。私たちの師である水鏡先生は彼のことを『竜も鳳も射殺す羿』と評していました」

「彼ってことは男なのか？ ん、いや、ちよつ、ちよつと待って」

「はい？」

「そ、その人って、ゲ、ゲイ……なの？ 本当に？」

竜も鳳凰も殺すゲイって、相当ヤバいだろ。

いや、個人の趣味に文句をいうつもりはないけど、そういうのは俺の知らないところでやってほしい。

「そうですね。だから水鏡先生は私たちに『彼とは絶対に敵対してはいけない。もし敵対することになったのであれば、絶対に戦場にて顔を合わせないよう、戦場以外の場所で戦うように』と強く戒められました」

「いや、戦場どころか日常でも会いたくないんだけど」

戦場で捕虜になったら大変なことになりそうだし。

日常で出会っていきなり目を付けられても大変なことになりそうだから普通に嫌なんだけど。

「あ、でも、天の知恵を持つご主人様であれば、もしかしたら彼にとつての逢蒙ほうもうになれるかもしれませんよ！」

「確かに。古来より【羿を殺すのは逢蒙】とも言います。桃香様の下に逢蒙たるご主人様がいて、ご主人様がいう桃香様の最大最強の敵である曹操様の下には羿たる彼がいる……もしかしたらこれは運命なのかもしれませんね」

「いや、おれはホモじゃないぞ」

なんなら普通に女の子が好きだけど。

っていうか君らもそのことはわかっているよね？

あとゲイとホモの違いってなんだよ。

別に詳しく知りたいわけじゃないけど。

それと個人の趣味嗜好に口を挟む気はないが、掛け算とかゲイとホモが運命で繋がっているとかみたいなの腐った思想の押し付けはやめて欲しい。

「あくまで例えですから……」

例えにしたって物騒すぎるわ。

そう言い募ろうとしたら、向こうの陣を眺めていた朱里が顔をしかめている。

「……どうやら向こうから使者が来るようです。これには私が応対しますが、おそらく後から桃香様とご主人様を交えての会談を行う必要があると思います」

「こ、断れないかな？」

桃香と曹操の相性も気になるけど、向こうにいるっていうゲイの人が怖すぎる。

せめて覚悟を決める時間がほしい。

「ご主人様の懸念は御尤もなのですが、今回は断れないと思います」

「え？ そうなの？」

「はい。官軍である曹操様からすれば、私たちは黄巾の賊ではないだけで正体不明の軍勢であることに違いはありませんので」

「あ、ああ。そうか。義勇軍なんて、向こうからすれば不正規に集まった怪しい集団だもんな」

治安を担っている立場からすれば怖い存在だよな。

そりやどんな集団で、どんな人間が率いているのかを確認するのも当然だよ。

「そ、そんな！ 私たちはみんなの為に戦っているのに！」

「それを確かめるために来るんだよ。そうだろう、朱里？」

「はい。その通りです。本当はご主人様だけでも隠れて頂きたいのですが、ここで隠すと逆に警戒されてしまいますので……」

下手に隠しても兵士さんたちに聞けば俺のことは分かるからな。

会談を断つたら賊として追い立てられる可能性があるし、変に誤魔化せば曹操からの印象が悪化することは否めない、か。

もう職務質問だと思って諦めるしかないな。

……ゲイの人だけは何とかして欲しいけど。

あ、そうだ。

「朱里。さっき言っていたゲイの人の名前はわかるか？」

ゲイな時点であれだけど、曹操四天王より有名って相当ヤバいからな。

俺が知っている人なら何かしらの準備ができるかもしれないし。

「あ、そうでした。まだお名前を言っていないませんでしたね」

うん。ゲイのインパクトが強すぎたからね。

「ご主人様にとつての羿となるかもしれないその御方」

うん。その言い方はやめようか。

「……その名は司馬伯達様。憤怒の将と呼ばれ、恐れられている御方です」

「な、なんだってー!？」

曹操の配下で司馬って、司馬懿!? 孔明のライバルの司馬懿!?

なんでこの時期に司馬懿が曹操の配下になっているんだ!?

い、いや、この時期に孔明と龐統が劉備の仲間なんだから司馬懿が曹操の配下でもおかしくはないかもしれないけど、司馬懿がゲイってのはおかしいだろ!

そんなのと相対しないといけないって拷問じゃないか!

……やばい。会談に行きたくない。

後で怒られてもいいから、体調不良ってことでなんとかならないかな？



## 29話。未知との遭遇④

あの後行われた殲滅戦に関しては特にいうことはない。

そもそも、三〇〇〇の兵に勝てなかった上に俺たちの存在を知って士気が崩壊した賊を四倍以上の兵で包囲していたんだ。

これで苦戦するようならその方が問題だからな。

故に、問題があるとすれば仮称義勇軍との接触だと思っていたのだが、俺の考えは半分正しく、半分間違っていた。

なにせ連中を率いていたのが噂の【天の御遣い】と【劉備玄德】だったのだ。問題どころの話ではなかった。

こんな想定すらしていなかったわい。

劉備といえば、魏と呉と蜀が争った三国志に於ける蜀の主で、漫画とかだと主人公みたいな感じのやつだったはず。

ちなみに劉備が主人公の場合、曹操がライバルみたいな感じになっていた、と思う。

正直前の前のことはよく覚えていないんだよな。

前世ではそれどころじゃなかったし。

そもそも俺が知る限り曹操は男だったはずだ。

この時点でもう色々違うから、たとえ俺が三国志のことに詳しくてもあまり参考にはならなかったと思う。

いや、まて。前の世界にもモンゴルがあった以上、歴史を辿れば三国志っぽいのもあったのかもしれない。

というか、もしかしてこの世界つて前世の過去だったりしないか？女性優位だし、歴史上の有名人物が女性だし。

このまま数百年くらい経ったら男女比がおかしくなったりしないか？

で、こちらにユエ殿の故郷だったフェイロンとかいう国ができて、向こうに神聖グステン帝国やアンハルトやヴィレンドルフのような国が興るのでは？

それを考えれば、東西の歴史を学んでいればこの後のことも予想できたかもしれないな。

まあ今更言つてもしようがないことなのだが。

……いやいや。まてまて。

もしそうなら凄いことを思いだしたぞ。

この時代、向こうはローマだよな？

今つて十字教が国教になるかどうかの時期じゃないか？

贖罪主はさすがにいないだろう。だが、原点に近い新世紀贖罪主伝説が残っているのではないか？

「……掘り下げて調べる必要があるやもしれん」

無論今の俺はポリドロ領の領主でもなければケルン派の信徒でもない。

そもそもこの時代にケルン派があるかどうかは分からん。

だが彼らの思想と行動は万民にとって正しく、そして尊いものであつたことに違いはない。

故に、もしケルン派の祖となつた方やそれに近い方がいるのであれば話を聞いてみたいと思うし、弾圧されていたら援助したいと思うのだ。

宗教戦争とかに巻き込まれたくないので、助けるのはあくまでケルン派だけだな。

「……掘り下げて調べる必要があるやもしれん」

義勇軍と思しき連中に接触し、向こうの情報を携えて帰ってきた使者から話を聞いたところ、真つ先に反応したのは司馬朗だった。

私としても同意見よ。

義勇軍だと思つていた連中が【天の御遣い】を奉じている集団だなんて思いもしなかつたもの。

しかも簡単に確認したところ【天の御遣い】は天の国から降りてきた人間であつて、洛陽から遣わされた人物ではないらしい。

つまり連中は【天】を僭称する賊。

漢の被官たる私からすれば即時討伐すべき対象なのよね。

漢を救う人物を殺すのか？　と言われるかもしれないけど、それだけなら特に問題はない。

たとえ漢の乱れを正す存在と噂されようと、所詮は噂。

現在進行形で罪を犯している者を裁いたところで不都合はないもの。

むしろ噂に肖って「天の御遣い」を僭称した賊を討伐したことになれば功績にすらなるでしょう。

でも、ことはそんなに簡単ではない。

何故か。「天の御遣い」を奉じているのが一般の諸侯ではなく「劉備」とかいう属尽だったからだ。

属尽は皇族や宗室のような権力はもたないものの、劉氏の一族であることに違いはない。

もし私が彼女を裁いたら、各地に散らばる劉氏が黙っていないわ。

少なくとも私の足を引っ張りたいと思っている俗物どもは劉氏に働きかけを行うでしょう。

結果、私は劉氏とその関係者の手によってあらゆる方面で邪魔を受けることになる。

有象無象が集まったところで……と言いたいところだけど、連中に裏でコソコソ動かれたら足を掬われかねないわ。

では取り込めばどうかという話になるのだけれども、これも駄目。

「天の御遣い」を僭称する賊を取り込めば、私も賊とされかねないもの。

あれは、向こうが属尽だからこそ、劉氏だからこそ抱え込むことが赦されているのよ。

故に、アレを裁けるのはアレと同じ劉氏しかない。

罪を鳴らしても駄目。抱え込んでも駄目。そういった事情があったからこそ白蓮は「天の御遣い」を抱え込むことをせずに放逐したのでしょうかね。

尤も、その代償として、ただでさえ人口が少ない幽州で義勇軍として三〇〇〇人も働き盛りの人間を引き抜かれたのはどうかと思うけど。

白蓮の放逐の仕方が悪かったのか、それとも漢を救うとか謳っておきながら幽州の政を崩壊させるような真似をする連中が外道なのか

はわからない。

だけど、少なくとも【劉備】や【天の御遣い】は幽州の政よりも己の功名心、もしくは野心を優先させる人物だということがわかる。

そんな野心を持つ彼女らが目指す先がどこなのか。

それによつては私と敵対することもあるでしょう。

司馬朗がいう『掘り下げる』のはここの部分よね。

それと、水鏡女学院の伏竜と鳳雛の狙いもわからない。

……私の率直な意見としては、あの二人はあの集団にふさわしいとは思わない。

才能と労力の無駄遣いでしかないと思っているわ。

もし洛陽に出仕したくないと言うのであれば、白蓮の下で研鑽を積みつつ彼女を幽州の州牧に出世させるなりなんなりすれば良い。

これから訪れるであろう乱世に於いて、幽州の精鋭の価値は限りなく高いものになるでしょう。

それを知っているならば、白蓮から恨みを買うような引き抜きなんて絶対にしないし、できない。

いえ、白蓮の性格であれば恨んだりしないと思うけど、彼女の配下の心証は最悪になっているはず。

そんなことくらいは理解しているでしょう？

そうであるにも拘わらず、連中は引き抜きを行った。

それは何故？

確かに、白蓮たちにとって働きざかりの三〇〇〇人は大きいでしょう。

でもその程度の民を引き抜いたところで、戦場でできることはたかが知れているわ。

事実、彼女らは五〇〇〇の賊を相手に有利には進めていたものの、彼女たちだけでは賊を殲滅させることはできなかった。

彼女らにできるのはその程度のことではしかないのよ。

でも、伏竜・鳳雛と謳われる知恵者が【劉氏】と【天の御遣い】を奉じておきながらそれしかできない。なんてことはないと思うのよね。

故に、彼女らはナニカを企んでいることは確實。

これから行われる会談で向こうの狙いがなんなのかを探るつもりだけど、それだけでは足りないわ。

「桂花」

「はっ！」

「これまで連中が歩んできた足跡を追いなさい。それと洛陽に報告と調査の依頼を出して頂戴」

「はっ！ 報告する内容は【天の御遣い】を名乗る賊の扱いについて。調査は【劉備】を名乗る属尽の素性についてでよろしいでしょうか？」  
「ええ。それでいいわ。無論、洛陽の連中とは別に、独自に連中の調査をすることも忘れないでね」

「はっ！」

これで幽州の属尽が【天の御遣い】を手中に収めて何かをしようとしていることが洛陽にも伝わるでしょう。

その結果、討伐命令が出ればそれに従って討伐すればいい。  
何も命令が出ないのであれば放置の一択。

どちらにせよ【劉氏】とのいざこざは回避できる。

今の私ができることはこれくらいだと思うのだけれども。

「司馬朗はどう思う？」

「……ん？ ああ。まあ、それでいいんじゃないか？」

……妙に軽いわね？

まあ今のところこれ以上できることがあるわけでもないし、反対意見がないのであればそれでいいわ。

「では顔合わせといきましょうか」

【天の御遣い】は【天】を僭称する賊なのか、それとも本当に漢を救う英雄なのか。

見定めさせてもらおうわよ。

### 30話。未知との遭遇⑤

「曹太守様におかれましては、お初にお目にかかります！ 私が義勇軍を率いる劉玄德と申します！ そしてこちらが私と志を共にする仲間の……」

「……関雲長です」

「張翼徳なのだ！」

「諸葛孔明でしゅー！」

「龐士元でしゅー！」

「ほ、北郷一刀だ。よろしく頼む」

「……州牧、曹孟徳よ」

「州牧様!?!」

「州牧?」

(ま、まさかご主人様曰く桃香様の最大最強の敵である曹操様がすでに州牧になっていたとは……)

(これでは桃香様との差が……)

(州牧ってなんなのだ?)

(太守よりは偉いんだろうな)

義勇軍の幹部連中がきて挨拶を交わしたんだけど、なんとというか、うん。

率直に言って幻滅したわ。

特に伏竜と鳳雛。

私が州牧になったことを知らないのはまだしも、それを表に出すのはどうなの？

主席と次席がこの程度では、水鏡女学院とやらの質もたかが知れていると言わざるを得ないわ。

いやまあ、伏竜は文字通り未だ伏せている竜で、鳳雛は今だ羽も揃っていない鳳の雛のことですものね。

水鏡は二人が未熟であることを前提として、その将来性を高く評価したのかもしれないけど、そんなものに意味はない。

敵は貴女たちの成長を待ってくれないのだから。

たとえ子供であつても戦場に立つ以上は一人の軍師。

戦場の指揮をみれば全く使えないというわけではなさそうだけど、交渉の場でこの様ではね。

誰よりも冷静でなければならぬ軍師が狼狽することの意味を理解していないのは問題でしかない。

……そう言えば、ウチの軍師になろうとしていた荀家の神童さんも感情的な人間だったわね。

感情豊かな人間の方が優秀だとも言いたいなの？

詩ならそうだけど、それ以外では感情を表に出さないのが正解でしように。

まったく、儒家の評価ってどうなっているのかしら？

神童も伏竜も鳳雛もそうだけど、そもそも二龍とか三君とか八俊とか八顧とか八及とか八廚とかさあ。

大げさすぎない？

八俊の関係者である桂花の前では言わないけど、もう少し客観性を持つて単純明快な評価をして欲しいものだわ。

司馬の鬼とか憤怒の化身みたいに、ね。

周囲が勝手につけた評価についてはさておくとして。

密かに注目していた伏竜と鳳雛が未熟なのを理解した以上、私が見るべきは義勇軍を率いている属尽の劉備と、それが奉戴する「天の御遣い」よね。

御遣いが男であることについては今更驚きはしないけど、この男が纏っている空気というか、雰囲気がおかしい。

農業従事者のような泥臭さもなければ、兵士のような血の臭いもない。

かと言って名家の子供や商人の子でさえ持つ警戒心すら薄いのはどういうこと？

農民でもなければ商人でもない。

文官でもなければ武官でもない。

強いていうなら、特権に胡坐をかいている劉氏に近い存在かしら？

天の国から降りてきたと聞いたときは戯言かと思っただけど、ここま  
で不可思議な存在ならそう言われるのも納得できる。

最大の問題は、その不可思議な存在がどうこの国を救うのかってこ  
となんだけどね。

何を以て救いとするのか。

何を以て救いを成すのか。

手持ちの戦力は、属尽である劉備とそれを支える武人が二人。さら  
に、荊州に強い影響力を持つ水鏡女学院出身の二人と、幽州で募った  
三〇〇〇の義勇兵のみ。

さて、御遣いはこれでどうやってこの国を救うつもりなのかしら？

私なら強者の庇護下に入って内側から改革を促すけど、彼女たちは  
白蓮の下を去っているのよね。

そのうえ伏竜と鳳雛にとっても強い地盤があるはずの荊州にも赴  
いていない。

つまり彼女たちは他者の下で改革を成すのではなく、己の手で十二  
力を成そうとしていると見て良いでしょう。

もしかして天の国が有する知識や技術を濫用して国家を建て直す  
つもり？

光武帝がそうだったように、過程はともかくとして、最終的に劉氏  
が皇帝になればその国は漢と言えなくもないのは認めるけど、それで  
新生した国は天の国の属国と何が違うのかしら？

あと、この御遣い。妙に司馬朗を怖がっているように見えるのよ  
ね。

なんならこの私よりも警戒しているかもしれない。

それは何故？

普通に考えて、司馬朗の実力を知らない人間が男である司馬朗を恐  
れる理由はない。

それが憤怒の将と謳われる男であっても、男というだけで警戒に値  
しない。

実際、武人である関雲長と張翼徳は司馬朗よりも春蘭や秋蘭を警戒



しているもの。

でも御遣いは春蘭や秋蘭よりも司馬朗を警戒している。

もしかして御遣いは司馬朗の本当の武力を知っているのかしら？

そうだとしたらどこでそれを知った？

水鏡女学院を運営する司馬徽が伏龍や鳳雛に漏らした？

そうだとしても、所詮は伝聞。実力は実際にその戦いを見ないことには実感できないはず。

それこそ私たちがそうだったように、ね。

でも御遣いの警戒は本物だわ。

そうになると、御遣いは司馬朗の実力を知っているということになる。

さて、御遣いはどこで司馬朗の実力を知ったのかしら？

司馬朗は司馬朗で無言で顔を顰めているし。

まあこっちは会談の前から劉備の陣営とは合わないと公言していたから、彼女らの話を聞いて怒らないよう自分を抑えているのでしうけど。

「華琳様？」

「……桂花？」

「熟慮中恐れ入ります。ですが、その、彼女らが……」

ああ。他勢力の面々を前に考え込み過ぎたか。

「ごめんなさい、少し考えごとをしていたわ。客人を前にしてすることではなかったわね」

「い、いえ！ お構いなく！」

うん。考え込むのは後でもできる。

まずは聞きましょう。

彼らの目的と、これからの予定を。

「最初に聞かせてもらいたいことがあるのだけれど、いいかしら？」

「は、はい！」

「では聞きましょう。貴女たち、ここで何をしているの？」「え？」

「質問の意図がわからなかったのなら言い直しましょうか。貴女たちは何故幽州から出て、ここ冀州にいるのかしら?」

だから、ちん〇が痛いねんて。

戦闘後劉備軍を呼び出してみれば、我々の前に現れたのは、ミニスカとプルプルが二人にスパッツの幼女が一人とミニスカ幼女が二人。さらに白い服を着た男が一人というなんともアンバランスな一行であつた。

傍から見ればハーレムパーティか! と言いたくなるどころだが、それを言えばそのまま俺に返ってくるので無言を貫くのは間違っていないだろう。

しかし男が増えたとは言え、女の比率が多すぎる。

ただでさえ戦闘の後で昂っている中で、この甘ったるい匂いに包まれるのは拷問以外のなにものでもない。

ち〇こがいたくなるから本当に勘弁してほしい。

話に集中することで息子を抑えるしかない。

……そんなことを思っている中でも会談は進む。

「わ、私たちはこの乱を一刻も早く終わらせて皆が笑って暮らせる世の中にしよって思つて!」

ふむ。一念発起する理由としてはありがちな理由ではある。

だが、それはあくまで彼女らが起つた理由であつて、冀州にいる理由ではないんだよなあ。

「義勇軍ならそういうこともあるでしょうね。で、私の質問に答えてもらえるかしら? 貴女たちはどうして冀州にいるの?」

「う……」

なんいうか、単刀直入というか、誤魔化しようのない質問だ。

だが曹操がそう問いたくなるのもわかる。

実際三〇〇〇という数は、義勇軍として見ればかなりの大所帯だが、軍勢として見た場合はそうではない。

もちろん、先ほど戦つていたように五〇〇〇程度の賊ならば相手に

できるのだろう。

だが、数万を超える賊を相手には無力だ。

それと勘違いしそうになるが、彼女の目的は『乱を終わらせること』だけではない『皆が笑える世の中を創ること』でもある。

この乱は漢の腐敗が生み出したモノ。

ならば彼女の目的には漢の腐敗を正すことも加わる。

故に、彼女たちが目的を叶えるためには、大樹に寄って内側から世を変えるか、己が大樹になって外側から世を変えるしかない。

しかし彼女たちは公孫賛という大樹の下を離れている。

ならば彼女たちの目的は己が大樹となることとなる。

義勇軍である彼女たちが大樹になるためにはそれ相応の武功を立てて権力者に認められる必要がある。

その武功が黄巾の首であり、その場が我々が合流しようとしている討伐軍と考えれば、なるほど彼女たちがここにいる理由としては理解できる。

とはいえ、まさか水鏡女学院の主席と次席がいて、三〇〇〇程度の義勇軍で黄巾賊の主力に勝てるとは考えてはいないだろう。

即ち連中の狙いは。

「き、冀州に黄巾賊の頭目がいるって聞いたので！」

「それを討伐しにきた。いえ違うわね。討伐軍に加わることで名声を稼ぎにきたってところかしら？ 加えて、あわよくば私たち官軍を出し抜いて武功を立てるつもりね？」

まあそうなるわな。

己の武功を稼ぐために幽州から三〇〇〇もの人間を引き抜いた外道働きを咎めるべきか、それとも根無し草の属尽が三〇〇〇もの人間を連れ回すことに成功していることを褒めるべきか。

「め、名声や武功を得ようなんて考えていません！ 私たちはただ一刻も早くこの乱を終わらせたいだけです！」

劉備がそう叫ぶが、まあ彼女の立場ではそういうしかないわな。

なにせ曹操の言を認めるといことは、自分たちは官軍のおこぼれを貰う……どころか、官軍を出し抜こうとしていると認めるようなも

のだし。

いや、もしかしたら劉備は本気でそう考えているのかもしれない。ぱっと見た感じただの小娘だからな。

だが集団とは小娘の幻想で動くものではない。

「あら、そうなの？ 伏竜と鳳雛の考えは違うみたいだけど？」  
「っ！」

容赦がない。いや、これは表情に出した二人が悪いな。

ただ、この二人の気持ちもわかる。

主君に功績を立てさせるために必死になって考えているのに、それを当の主君に全否定されたんだ。

しかも本心から。そりや面白くはないだろう。

表情に出るのも無理はない。

それを曹操が見逃すかどうかは別問題だが。

部下の心を理解できない主君と、その主君の為に尽くす部下、か。なんとも歪な関係だ。

「ふむ。とりあえず貴女たちの目的は理解したわ。その上で告げましょう。さっさと幽州に帰りなさい」

「「ええ!？」」

「そんなに驚くことかしら?」

「そ、それは、だって!」

「何か問題でも? 貴女の目的は黄巾の賊を討伐することなのでしょ  
う? なら貴女たちがいなくとも討伐は成るわよ。なんなら私たちが  
を出し抜こうとする貴女たちがいない方が指揮系統の乱れが無い分、  
戦いは円滑に進むわ」

曹操の言い分は正しい。今更三〇〇〇程度の義勇軍が加わったと  
ころで戦力にはならない。むしろ邪魔だ。

「みんなが笑って暮らせる世の中にしたいのでしょう? ならばなお  
さら貴女が集めた民はすぐに幽州へ返してあげるべきよ」  
だよな。

「え?」

「ねえ劉備。三〇〇〇もの働き手がなくなった今、誰が田畑を耕す

の？ 誰が田畑から収穫をするの？ 誰が田畑を守るの？」

「……」

「皆が笑って暮らせるような世の中にしたい？ とても素晴らしい志ね。で、貴女に働き手や守り手を奪われた幽州の民は笑っているのかしら？」

「そ、それは……」

自覚もなし、か。これは相当ヤバいな。

「貴女たちがこれまでどうやって食糧を得てきたかは知らないわ。でも真つ当な手段ではないのでしょうか？」

「そんなことはありません！ お願いしたらみんな快く譲ってくれましたー！」

おいおい。それはないだろう。

「快く、ね。それはそうでしょうとも。だって彼らは、そうしないと邑が滅ぼされると思ったんですもの」

「……え？」

「考えてもみなさいな。いきなり武装した三〇〇〇もの義勇軍が来て、食料を援助してくれと言ってきた。それを断れる邑があると思つて？」

「あ」

「そんなお願いはね、脅迫というのよ」

「わ、私はそんなつもりじゃ……」

それは主君としては絶対に言つてはならんやつやぞ。

「どんなつもりでも結果は結果。貴女の行動は、皆を笑顔にしたいといいつつ、これまで接してきた邑や街の住民を絶望に叩き落してきたのよ。それを自覚なさいな」

「そ、そんな……」

「桃香様!？」

「お姉ちゃん!」

「桃香!」

……いつら、なんで被害者面してんだ？

「民を脅して得た食糧によって維持した義勇軍を率いて討伐軍に参加

し、官軍を出し抜いて武功と名声を得る。なるほど、水鏡女学院の主席と次席は随分と下劣な策を講じることができるとね」

策士としては誉め言葉だな。諸葛亮と龐統がどう思うかはしらんが。

「っ！」

「しゅ、朱里ちゃんと雛里ちゃんを悪く言わないでください！」

「そうね。悪いのは、結果に責任を取るのには策を採用した主君、つまり貴女ですもの」

「あっ!？」

あっ！ ではないだろう。

これが劉備？ 第一印象で見たまんまのただの小娘ではないか。

この時代の人間として見れば甘すぎる。

もしかしたらその甘さが周囲の人間にも夢を見せるのかもしれないが、今は夢で飯が食える時代ではない。

現実主義の曹操とは絶対に合わんな。

「もういいわ。これ以上貴女たちと関われば、私も略奪者の関係者だと疑われてしまう。いえ、もう手遅れね」

まあそうだ。こうして会話をした以上、何かしらの手を打たねばなるまいよ。

「桂花。私が彼女らとは違うということを証明するために必要なことはなにかしら？」

「……この連中を処刑する。もしくはこの連中が巻き上げてきた食糧を補填すること、でしょうか」

「そう。ならば調査の上で彼女たちが奪った食糧を補填するよう手配しなさい」

「……はっ」

凄く嫌そうな顔だな。まあわからんでもないが。

なんでこいつらの為に労力を割いたうえで物資まで放出しなきゃならんのかって話だよ。

殺した方が早いし、俺としても今のうちに劉備を殺せばそれに越したことはないと思うが、かといって今の曹操が属尽である劉備を殺

すのはまずいというのもわかる。

各地方にいる属民たちが反発するのが目に見えているからな。

邑や街を脅迫して食糧を奪った罪人として裁くにしても、こいつらが脅迫してきたのは幽州と冀州の邑や街なので、そもそも□州の州牧でしかない曹操にはその権限が無い。

ならば、ここで劉備を捕らえて劉氏に敵対したと思われるよりは、劉氏のフォローをしたという実績にしたほうが良いというわけだな。なんとも面倒なことだが、これも政治。

少しでも損失を取り戻せるよう動くべきだろうよ。

「とりあえずこんなところね。劉備」

「……はい」

「聞いていたでしょう？ 貴女たちの尻拭いは私たちがやるわ。だから貴女はできるだけ早く彼らを幽州に帰還させてあげなさい」

「……はい」

うむ。さつきと帰れといえれば反発されるから、民を帰還させろって感じにしたんですね。わかります。

実際いいように言いくるめられて悔しいのか諸葛亮がなにか言いたげにしているが、何も言えていないし。

結局彼女たちの決起は無駄骨に終わったが、曹操が尻拭いをしたおかげで連中は罪人として裁かれるのではなくただの民として帰れるのだから、感謝して欲しいくらいなんだがな。

というか、天の御遣いが妙に俺を警戒しているように見えるんだが……俺、なにかしたか？

### 31話。黄巾の終わり①

劉備一行を完全論破した後、我ら曹操軍は特に妨害を受けることなく、黄巾の乱の首謀者である張角がいると言われている冀州は鉅鹿郡に到着した。

「中々壮観ね」

「数だけは、な」

今のところここにいるのは、洛陽から派遣されてきた皇甫嵩率いる官軍と、冀州牧になることが内定している袁紹が率いている冀州の軍勢で計六万程。

これに我々兗州勢の二万と、汝南袁家の代理として孫策が率いる軍勢が一万程。その他にもパラパラと軍勢が加わって、合計で十万程度の軍勢となっている。

対して敵は凡そ十二万程度らしい。

数の上では向こうが上だが、質ではこちらが上。

……微妙な連中もいるが、まあ今の賊どもよりはマシだろう。

さらに向こうはここまで敗戦に敗戦を重ねて追いやられた軍勢であることに加え、長期の籠城ができる状況ではないので、勝つだけならばこの状態を維持しているだけでも勝てるという有様である。

ここで問題になるのが我々の去就である。

「ここまで来た時点で私の目的は達成されているのだけれど、このまま何もしないと言うわけにはいかないわよね？」

まあな。曹操にとって重要なのは冀州の地理や人材を確認することであって、黄巾の賊をどうこうすることではない。故に積極的に動く必要はないのだが、そもそもここに集った連中の狙いは武功を上げることだし、なによりこうしているだけでも維持費が馬鹿にならないので、包囲して飢えさせて終了、なんてことはない。

必ず攻撃行つて勝利を掴もうとするはずだ。

とはいえ相手は鼠、否、追い詰められた鼠である。

わざわざ突いて噛まれるのは馬鹿らしい。かといって何もしないのではやる気を疑われる。



この状況で、我々の目的である『ほどほどの戦果を上げること』は結構難しいのだ。

よって曹操が聞きたいのは「この結構難しいことをどうすれば達成できるのか？」ということだろう。

聞きたいというよりは、各々に考えさせたいのだろうか。

それはそれとして、俺には気になって仕方のないことがある。

劉備が奉じていた【天の御遣い】こと北郷一刀と名乗った男のことだ。

あのかきは場に女が多すぎて無心になることに専念していたせいで深く考えなかったし、これまでも行軍中に色々とやっていたので気が付かなかつたが、今ならわかる。

あれ、日本人だろ？

着ていた服が白い学ランだった時点で気付けと思うかもしれないが、水着だのスパッツがある世界で白い学ランに違和感を覚えるのは無理だろ。

だが、あの名前と雰囲気醸し出す違和感を無視するには大きすぎる。

もちろんこの時代に 北 一刀 という人物がいらないとは断言できんが、あの雰囲気はなあ。

何度思い返してみてもこの時代の人間とは思えんのだ。

あと、彼が日本人であるなら、夏侯惇や夏侯淵よりも俺を警戒していた理由もわかる。

日本人としての価値観があるならば、美少女よりも筋肉モリモリのマッチョマンを警戒するのは当たり前のことだからな。

それらを理解した上で問題なのは、劉備が夢見がちな小娘で、御遣いがぬるま湯に浸かった子供だったってことだ。

もちろん、どちらも天下を差配するには値しない。

というか、連中に差配させたら間違いない国が亡ぶ。

それこそヴァリエール様を女王にするようなものだ。

リーゼンロット陛下もアナスタシア殿下もアスターテ公爵も、なんならザビーネだって絶対に認めない。

それを認めるのは、あの行軍に付き従った結果妄信の徒となった騎士やその従者たち、あとは行軍を共にした馬借たちくらいのものである。う。

「ふむ」

そう考えれば、連中はあのときのヴァリエール様に似ているのか。

大義名分を担当する第二王女であるヴァリエール様が、劉氏である劉備と天の御遣いこと北郷。

策略の面でヴァリエール様を支えるザビーネが、諸葛亮と龐統。

武力の面でヴァリエール様を支えた強盗騎士と俺、ではなくデカマラス卿が、関羽と張飛。

うむ。考えれば考える程似ている。表面だけは。

そう考えれば、連中が極々少数ながらヴァリエール様を守るために死兵となれる集団のような存在になる前に排除、解散させることができたのは僥倖だった。

しかし、だ。

北郷が日本人である場合、今後面倒なことになることが確定する。

なにせ相手は未来を知っている相手だ。

三国志に詳しいなら厄介極まりないし、三国志に詳しくなくとも、未来の知識を有しているというだけでも厄介である。

小僧でしかない本人にできることは少なくとも、関羽や張飛といった武力と、諸葛亮や龐統という知力が加わればできることは格段に跳ね上がるのだから。

故に、あの連中が、ぬるま湯に浸かった小僧と夢見がちな小娘が掲げる生ぬるい理想を押し付ける集団となった場合、その脅威は計り知れないものとなるだろう。

感覚としては宗教に近いかもしれない。

このご時世、綺麗な理想に縋りたいと願う者も出てくるだろうからな。

武力と知力と大義名分と未来知識を有する宗教勢力とか、厄介どころの話ではないぞ。

だからこそ、今後のことを考えれば連中に監視の一つもつけるべき

なのだろうが……はてさて、どんな名目でそれを行うべきか。

「司馬朗からはなにかあるかしら?」

「む?」

「これからの方針よ。貴方にはなにか意見はないの?」

「……そうだな」

今は戦場から追い払った連中のことではなく、目の前にいる黄巾賊のことを考えねばならんか。

しかし、黄巾についてと言ってもなあ。

「この期に及んで特殊なことをする必要はないのでは? あえて言えば、見た感じ孫策あたりが積極的に動きそうだから、それに便乗する形で動くのが最も効率が良いと思う」

放たれている軍気が他とは違うんだよ。

あと他の連中が出世や名誉を求めて武功を欲するのとは違い、袁家の代理人として参戦している孫策には積極的に武功を上げなければならない理由がある。

それは軒を貸してくれている袁家のためでもあるし、自らが率いている孫家のためでもある。

そうした理由を加味した上で、孫策が三国志に出てくる孫権の兄にして『小霸王』として名を馳せた英傑ということ忘れてはならない。

その英傑が一万の軍勢を率いて、しかもやる気に満ちているとき

絶対に動くだろ。これを利用しない手はあるまい。

「孫策? ……なるほど。確かに彼女が率いる軍勢が放つ軍気は他の諸侯が率いる軍とは比べものにならないわね。では我々が第一功を求めず、それなりの戦功を狙うのであれば彼女の動きに便乗するべき、というのが貴方の考えかしら?」

「それなりの武功を上げるだけで良いのであればそうだな」

「……妙に引つかかる言い方だけど、まあいいわ。では孫策が動くとしたらいつ頃だと思う?」

「奇襲によって武功の独占を狙うのであれば夜討ちか朝駆けが常道。故に夜半か早朝に動く。と言いたいところだが、いかに武功を上げた

いとはいえ、一万の軍勢だけで十万が籠る砦に挑みかかることはあるまい」

「まあ、ね。賊の意表を突いたところで、我々が連動しなければ敵陣に孤立することになるものね。それに単独での抜け駆けは他の諸侯からも響きを買うわ。だとすると、向こうから根回しの使者が来るかしら？」

「可能性は高い。使者を送るのは向こうが戦力としてふさわしいと思っている諸侯に対してだけだろうが、少なくとも官軍の将である皇甫將軍には最速で送るだろうよ」

そうしないと武功を独占することになるし、なによりそれを妬んだ諸侯から守ってもらえなくなるからな。

袁家の看板を背負っている以上、  
抜け駆けして賊を討伐しました。

武功も独占しました。

でも諸侯から恨まれました。

では話にならないからな。故に孫策は周囲に協力を仰ぐ必要があるわけだ。

「私にも送ってくるかしら？」

「どれだけ向こうから評価、いやこの場合は警戒されているかによる。根回しをしたことで第一功を奪われると判断するほど警戒されていたら情報は皇甫將軍経由でくるだろう。そこまで警戒されていないければ直接くる。どちらにせよ維持費のことを考えれば数日以内には動くだろうから、それほど待つ必要はあるまい」

「へえ？　こちらから何かしなくても使者はくる、と？」

「孫策の思惑はどうあれ皇甫將軍にしてみれば、今回の戦はできるだけ短期間かつ官軍の損失を少なくして終わらせることが重要なのであって、第一功が誰であるかなど関係ないからな。なればこそ、我々に使者を立てるだろう。故に、孫策に関しても、手の内を予測していることを誇示して徒に警戒させる必要はあるまい」

「ふむ。より効率的に勝つことを考えれば、官軍を率いる皇甫將軍が我々二万の精鋭を遊ばせることはないでしょうね。我々も第一功

を求めているわけではないから孫策に手柄を立てさせても問題は無い。だから自分から動かずに使者を待つ、か。妥当な判断ね。では、春蘭、秋蘭」

「はっ」

「聞いた通りよ。すぐに動くことはないでしょうけど、奇襲に備える意味で兵の半分は何かあっても即応できる状態で待機させて。残りの半分は休息をとらせなさい」

「はっ！」

「桂花は官軍や諸侯との連絡を密にして、諸侯の装備や士気を確認。さらに皇甫嵩將軍が誰に使者を送るのかを確認して頂戴」

「はっ！」

「司馬朗は物資の確認をお願い」

「了解した」

数日とはいえ、二万もいれば結構な量の物資が飛ぶからな。確認は大事なのだ。

あと、当たり前のように中抜きしようとする連中がいるから、不正が無いよう監察せねばならないというのもある。

ああ。劉備一行が略奪した物資の補填もあったな。

……… 適当に寄せておこう。

### 32話。黄巾の終わり②

ここに来るまでに捕えた賊を尋問した結果知ったことだが、どうやら張角というのは二人いるらしい。

より正確に言えば【人を集めた張角】と【漢に反逆した張角】の二人が存在するようだ。

このうち【人を集めた張角】とは、旅芸人をしていた張角・張梁・張宝という三人姉妹の長姉であるそうなの。

彼女たちは、演劇だか歌劇だかよくわからんが、ともかく娯楽のない時代に娯楽を提供したことで熱狂的なファンを生んだらしい。

で、彼女らの下に集った熱狂的なファンを自分の思想の為に利用しようとしたのが【漢に反逆した張角】である。

漢の転覆を狙ったものの洛陽で捕まった 馬 元義 なる賊や、潁川で敗れた波才。

一時は南陽を制圧したものの、後に根絶やしにされた 張 曼成 なる賊を操っていたのもこいつの仲間に分類されるだろう。

洛陽で情報収集に当たっていた妹曰く、連中の腕は国家の中枢たる十常侍にまで及んでいたというのだから驚きだ。

旅芸人如きにそこまで根回しできるはずがないと考えれば、この【漢に反逆した張角】こそ、我々が討伐すべき敵と言えよう。

実のところ上記の情報はこれまで不確定な情報だったのだが、この度黄巾側から降伏の使者がきたことでそれが事実だと判明した。

そのことを教えてくれた降伏の使者曰く『自分たちはどうなってもいい。でも天和ちゃんたちは助けて欲しい』とのことであった。

そこで「天和とは誰のことだ？」と尋ねたところ、それが三姉妹の長姉である張角の真名であることが発覚。

つまり、ここにきてようやくその天和とやらが【人を集めた張角】であることが確定したのである。

で、なぜ今さらになつて賊が降伏を申し入れてきたのかと言えば、なんのことはない。

事ここに及んで、ようやく一時の熱狂で暴走したファンの頭が冷え

たのだ。

冷えた頭で周囲を見回してみれば、自分たちが暴走したせいで推しのアイドルが大罪人として指名手配されている状況である。

そりゃ熱狂的なファンならば己の身を挺しても護りたいだろう。気持ちは理解できなくもない。

だが彼らの降伏は受け入れられない。

意図的なのか、それとも利用されたのか不明だが、彼女には数十万の民を集めて、それを暴走させた責任というものがあるからだ。

せめて黄巾が潁川や南陽で勝っていたときに降伏していたら【人を集めていた張角】は助けられたかもしれないが、ここまで追い込まれてから降伏したのでは、どうしても説得力がない。

いくらファンが『彼女は悪くない』と言っても、責任転嫁としか思われないだろう。

そもそも諸侯に『逆賊張角を討て』という勅命が下っている。

当然【人を集めた張角】はその対象だ。

とはいえ、実際のところ、旅芸人を庇うだけだけなら簡単……とまでは言わないが不可能ではない。

その辺のファンに張角として死んでもらって、その首を【漢に反逆した張角】として渡せばなんとかなる可能性はある。

だがしかし、それが有効なのは『張角に関する事実を知っているのが我々だけの場合』に限られる。

大前提として『賊滅の曹操』と恐れられている曹操のもとに使者を遣わすほど追い詰められた連中が、皇甫嵩や孫策に同様の使者を出さないことがあるだろうか？ いや、ない（反語）

我々以外にも張角が二人いることを知っている人間がいるのであれば、張角の首が一つしかなければ【人を集めた張角】が死んでいないことは既定の事実となる。

そしてもし曹操が、生き残った張角を抱え込んで民草の慰撫や労働力の確保に利用したらどうなるだろうか？

【人を集めた張角】を匿い、利用していることが判明すれば、曹操は殺すべき逆賊を匿った罪を以て逆賊とされてしまうだろう。

それどころか、最悪の場合「曹操こそが黄巾を操っていた黒幕だ」なんて言われる可能性まである。

では隠せば良いと思うかもしれないが、自分のために利用しないのであれば勅命に反して賊を庇う意味がない。

そもそも隠し通せるとは思えない。

名前を変えればいい？ それで、集まったファンたちから情報が漏れないとでも？

共通点を見つけられないとでも？ いくらなんでも官吏を舐め過ぎだ。

あと、他人の足を引っ張ることを生きがいとしているような連中もいるしな。

それらの連中のせいで曹操が勅命に反したことが判明した場合どうなる？

考えるまでもない。賊を匿った逆賊として討伐対象にされてしまうだけだ。

利用しない賊を匿って逆賊にされることに何の意味があるというのか。

つまり「人を集めた張角」とは、利用すれば勅命に逆らって逆賊を匿ったことが判明する厄介者であり、利用しないのであればただ逆賊を匿ったという汚点にしかない。

どちらに転んでもアウトな存在でしかないわけだ。

為政者としての視点を持つ曹操からすれば旅芸人という身分で数十万の民を熱狂させただけでなく、兵として動員することができたという事実に興味があろうだが、さすがに今回は駄目だろう。

足場を固めるべきこの時期に賊の頭目を陣営に引き入れることなどありえないし、あつてはならない。

「曹操殿には敵が多い。州牧となったばかりのこの時期にわざわざ付け入る隙を与えるべきではない。だから曹操殿よ。一人を集めた張角」を利用しようとするのは諦めろ」

「……そうね」

「華琳様……」



心なしか肩を落とす曹操と、それを見て「お劳しや」と嘆く文若の  
図である。

このまま話が終わればそれで良かったのだが、ここで終わらないの  
が曹操という人物なのだろう。

「……彼女たちがそのまま利用できないのはわかったわ。それについ  
ては諦めましょう。でも」

「でもっ。」

「せめて有効に活用したいわ。だってせっかく得た貴重な情報よ？」

「このまま放置するのは勿体ないと思わない？」

「気持ちにはわからなくてもないが……」

貴重な情報を無駄にしない。否、できない。

これを“策士の悪癖”と宥めるべきか、それとも“情報の重要性を  
理解している”と褒めるべきかは微妙なところである。

個人的には策士の悪癖に分類されると思うのだが、このご時世使え  
るものを最大限活用するという姿勢は間違っていない。

しかしながら今回得た情報の使い道は極めて限られているわけで。

「使うと言ってもな。張角が二人いることで得られるモノなんざ武功  
以外にないと思うのだが？」

もう少し前なら別の使い方もあったかもしれないが、この期に及ん  
ではどうしようもないだろう。

「……武功が増えるのなら良いことだと思っけど？」

「普通ならそうだ。しかし曹操殿は武功を求めていない？」

「まあ、そうね」

単純に、賞金首が二つになると考えれば悪いことではないのかわし  
れない。

しかし曹操が張角の首を取ってしまうと、ただでさえ曹操を敵視、  
もしくは危険視している連中から注目を集めてしまうし、なにより彼  
女たちの熱烈なファンが敵に回ってしまう。

他の群雄と違ってこの場での功績を求めている曹操からすれば、  
得られる利よりも損が勝る。

もしくは曹操のように隠れて利用しようとした群雄がいた場合、そ

れを告発することができるとは……敵の足を引っ張るためだけに賊を生かすのも違う気がする。

「というか、曹操の気性からしてそのようなコスイ真似はしないだろう。」

「どちらにせよ言えることは一つ。」

「まず張角が二人いることを皇甫嵩將軍に伝える。それと一人を集めた張角が旅芸人三姉妹の長姉であることも隠してはいけない。これは絶対だ」

「向こうもすでに知っている可能性は高いが、情報を共有すること。もつと言え『曹操もこのことを知っている』と伝える必要がある。」

「もし知らないのであれば尚更、世に流布している『いかにも悪人らしい顔をしたおっさん』だけを張角として扱わないよう釘を刺さねばならない。」

「そうすることで周囲は曹操に勅命を果たすつもりがあることと、功績を独占するつもりがないこと。」

「さらには、張角を隠しだてするつもりがないことを理解するだろう。」

「何をやるにしても、すべてはここからだ。」

「他の諸侯に功を回せ、と?」

「結果的にはそうなるな」

「それで、私が得る利はなにかしら? まさかこの情報のおかげで利を得た諸侯が私に恩義を感じる。なんて言わないわよね?」

「まさか。連中が曹操殿に恩義なんざ感じるはずがない。むしろ『馬鹿正直に真実を公表したせいで、本来は得られたであろう功を取りこぼした阿呆』と曹操殿を嗤うだろうさ」

「んな!?」

「そうね。それで?」

「功を競う諸侯には嗤われるだろう。だが皇甫嵩將軍からは『情報と功績を独占しない律儀者』という評価を得られるはずだ」

「逆に言えば、この状況で曹操が得た利益になるものなんて風評くらいしかないともいえる。」

いや、結構重要だな風評。

『律儀者』ねえ。この場合は無欲な阿呆。もしくは情報を活用できない愚物と評されるのではないかしら?」

「そうやって侮ってもらえるなら尚良し、だな」

「……へえ」

「司馬朗! 黙って聞いていれば、アンタ! 華琳様がその辺の雑魚どもに侮られても良いというの!」

「警戒されるよりはやりやすいだろう?」

「はあ!」

「桂花、少し黙りなさい」

「か、華琳様?」

「三略に曰く『謀は密なるを貴ぶ』。孫子に曰く『兵は詭道なり』。何も知らない阿呆どもが勝手に私を侮るのであれば、それを糺す前に利用するのも兵法。そういうことでしょうか?」

流石は曹孟徳。誇り高いことと忍耐力がないのは同義ではないことを正しく理解している。

「うむ。王は侮られてはならない。しかし新米の州牧でしかない今ならいくらでも侮られてもいい。大事なのはその後だろうよ」

前世に於いて、俺が武功を上げる前は俺や亡き母を侮る者はいくらでもいた。

貴族どころか、市井の民でさえそうだった。

辺境の領主などそんなものだ。

それらの侮蔑に一々キレていては話が前に進まないではないか。

無論、舐められたら殺すという意見も間違っているわけではない。

もしも目の前で舐められたら報復するべきだ。

しかし、陰でこそこそと噂話をしている程度の連中に目くじらを立てる必要があるか? と問われれば……。

「そうね。私としても立場がある。だから無条件に侮られることは受け入れられない。でも、それが必要な策というのであれば飲み込むわ。それくらいの度量はあるつもりよ」

「結構なことだ」

そうだ。考えを改めない連中は後で殺せばいいのだ。その時まで  
噛みたいやつには噛わせておけばいい。

自分を侮って警戒を緩めたところを殴り倒してわからせる。それ  
だけの話ではないか。

……まあこのような考えにたどり着いたのは、今世の母上や妹に  
懇々と説教されたおかげなのだが。

そう考えると、前世に於いて自分の尻拭いをしてくれたアナスタシ  
ア様やアスターテ公には随分と迷惑をかけたんだなあと思わないで  
もない。

まあ前世のことだから時効ということにしておこう。大事なものは  
今ここで曹操を納得させることだし。

「股婦（この世界の韓信は女だった）を噛む者は股婦に討たれる……い  
や、今回曹操殿は誰の股下も潜っていないから、この言いようは不適  
当か？」

喩えは微妙だが、言いたいことは伝わるだろう？

我慢だよ、我慢。将来のために一時の屈辱に耐えるのだ。

「ふふっ。股婦を噛む者は股婦に討たれる、か。言いたいことはわか  
るし面白い表現だと思うけれども、確かに少し違うかもしれないわ  
ね」

「そうか。それは失礼した」

「あら。別に構わないわ。言ったでしよう？ 言いたいことはわか  
るって」

「そうだったな」

今更説明するまでもないことだが、股婦の語源となったのはこの世  
界でも名将として名を馳せた英雄・韓信である。

しかしながらチンピラの股下を潜ったとされる当時の韓信は、素行  
が悪い、貧しい、武力がない、甲斐性がないと散々な状態だった。

それに対して、曹操はそのどれにも該当していない。

しいて言えば素行（より正確に言えば夜の私生活）にだらしないと  
ころはあるものの、甲斐性がないわけではないからな。

だから股婦の故事を以て我慢を促すのは微妙に失礼にあたると言

えなくもないわけだ。

そんな、ある意味失礼な諭えをしてしまったわけだが、曹操としては己を国士無双の英傑である韓信に諭えられたことに不満はないようで、心なしか機嫌がよくなったように見えなくもない。

「股婦。確かにそれは、でも……」

あとは何とも言えない表情を浮かべている文若だが、彼女の説得は俺よりも曹操に任せたほうが早いし確実だ。

「桂花。ここは考え方を変えなさい」

「考え方、ですか」

「そうよ。私は貴重な情報を無駄にしたわけじゃない。私からの情報を得られなければ武功を立てることもできなかつたであろう哀れな諸侯に正しい情報を施してあげたのよ」

「施し……た、確かにそうですね！」

単純か。いや、ここで口を挟んでもしようがないから別に何も言わんけど。

「もともと知っているなら、私の狙いが奈辺にあるのか探るでしょう。自分が施しを受けたことを知る程度の頭があるのであれば、自分が独力で正しい情報を得ることができなかったことを悔いることはあっても、私を嗤うことはないでしょう。つまり私を嗤うのは、己が施しを受けたことを自覚出来ない阿呆か、施しを施しと認識したうえで利用しようとする無知蒙昧にして忘恩の徒となるわ」

「無知蒙昧にして忘恩の徒。凄い……表現だ。」

「なるほど！ 今回の施しは、諸侯の能力と人品を見定めるための一手になるということですね！」

「そう。だから桂花。貴女がすべきことはここで憤ることではない。わかるわね？」

「はい！ 情報を得た際に諸侯がどういう反応をみせるか、それを見定めます！」

「ええ。それによって、もともと正しい情報を得ていた諸侯と、そうでない諸侯の見分けを付けるわ。その上で新たに情報を得た諸侯がどう動くかを見て、その器を量る。それが貴女の仕事よ」

「はい！ お任せください！」

「いい子ね。ご褒美は先払いであげようかしら？」

「か、華琳様……」

ふむ。俺の考えつかないところまで考えているようだなによりである。

やはり面倒な頭脳労働はこの二人に任せておけば問題はないな。

とりあえずの方針が固まったことを確認した俺は、なにやら百合百合しい雰囲気醸し出し始めた二人の邪魔をしないよう、クールに陣幕を後にするのであった。

### 333話。黄巾の終わり③

「焦りすぎたかしら？」

母である孫堅亡き後、孫家を維持するためにこの孫伯符が母様の部下であった者たちを率いて美羽袁術の庇護下に入ってから早数年。

今の私たちは——二人の妹を人質に出してはいるもの——汝南袁家の代理人として兵を率いることが許される程度の信頼を得ている。

ここで更に孫家の名を高めると同時に袁家からの覚えを良くするためにも張角の首が必要だと思った私は、官軍の戦闘準備が整う前に黄巾の連中が立て籠もる砦甘寧に思春周泰と明命を潜ませた。

あとは本隊の攻勢に紛れて張角の首を獲れば、黄巾討伐の第一功は私たちのものとなる。

袁紹を出し抜いて功を得たとなれば、袁術はますます私たちを重用してくれるでしょう。

袁術から信用されれば、それだけ孫家の扱いもよくなるし、孫家の扱いが良くなれば妹たちの立場も安定することになる。

問題があるとすれば、武功を立て過ぎたことで諸侯や袁家に仕えている武官に僻まれたり警戒されたりすることでしょうけど、これに關してはどうしようもない。

まさか「僻まれるのが怖いから武功を立てません」なんて言える訳もなし。

少なくとも“使える”と思われているうちは滅多なことにはならないでしょう。

そう考えたからこそ、今回諸侯の眼を盗んで武功を独占しようとしていたんだけどねえ。

「……計画を覆されたのは確かだ。自覚はなかったが、知らぬ間に私も焦っていたのかもしれない」

本当にねえ。

「私もです。でもこの方向で足を掬われるのは完全に想定外でした」

そうなのよねえ。

「しかし悪いことばかりではないぞ。なにせこのことを知らぬまま攻撃を仕掛けていたら、儂らは確実に【人を集めた張角】を見失つていたじゃろうな。そうなれば……」

最悪よねえ。

「良くて偽物の張角の首を挙げて喜んだ阿呆。悪ければ偽物の張角の首を本物と偽って提出した罪人、かしら」

前者は孫家の名を落とすし、後者は名を落とすどころじゃない。

どちらに転んでも、今の孫家にとっては致命傷つてね。

「……………」

私の言を否定できないのだろう。

周瑜・陸遜・黄蓋  
冥琳・穩・祭は揃って顔を顰めた。

「……今から旅芸人の方も狙えんか？」

「無理でしょう。そもそも潜入している二人と連絡を取る手段がありません」

「そうですねえ。もし連絡がついたとして、ですよ？ いきなり標的を増やされても困るだけではないでしょうか？」

「穩のいう通りね。ここで無理をさせて両方逃すことになったら意味がない。思春と明命には予定通り【漢に反逆した張角】を討ち取って貰うわ」

二兎を追うものは一兎をも得ず。

武功の独占が不可能になった以上、最低でも一羽は仕留めないと、今までの工作が無駄になる。

「仕方なし、か」

「……はい。残念ながら」

「ここは割り切るしかありませんね」

祭が悔しそうに呟けば、冥琳と穩もいつもどおりの口調でありながら、その表情には隠し切れない悔しさが浮かんでいる。

私も同じような表情をしていることだろうことは想像に難くない。

これは情報戦で後れを取った悔しさであり、事前に立てていた計画が台無しになったことに対する悔しさである。



つい先日、それこそ昨日の夜まで「この戦、孫家で武功を独占するわよ！」と気を上げていた私たちが揃って意気消沈しているのは、戦を仕掛ける前にとある情報を得たせいだ。

その情報を得たのは今日の朝のこと。数日以内に行われるであろう全面攻勢に先立ち、官軍の総大将である皇甫嵩將軍に対して私たちが持つ情報を伝えに行つたときに、皇甫嵩將軍本人から聞かされたのだ。

『張角』は二人いる』という情報を。

情報元はなんと、諸侯の中で私たちが最も警戒していた人物である  
☒州牧・曹孟徳その人。  
彼女が皇甫嵩將軍に対し、私を含めこの場に集つた全ての諸侯を仰天させる情報を開示していたのだという。

すでに張角を討ち取る為の刺客を潜ませていた私たちにとってこの情報は寝耳に水……どころの話ではない。

まさしく驚天動地。まさしく青天の霹靂とも言えるほどの衝撃を伴うものだった。

件の情報を齎した曹孟徳曰く、元々ここ来るまでに捕えてきた賊を尋問していたのだが、その際、捕えた賊によって張角に対する印象が違つたことに違和感を抱いていたそうなの。

その違和感は、彼女の下を訪れたという降伏の使者から真実を聞くことで解消されたとのこと。

それを聞いたとき「賊の言うことを真に受けてどうするの？」なんて思ったし、皇甫嵩將軍もそう言つたらしいけど……貴重な情報を提供したにも拘わらず、この信憑性を問われた曹孟徳はさも疑問を持たれても当然のような表情を浮かべて『こんなことで嘘をついても賊に得はありません』だとか『ただの旅芸人がなんでこんなところにいるのでしょうか？』とか『賊滅を謳われている私のところにまで来て「自分はどうなつても良いから旅芸人の三姉妹を生かして欲しい」なんて言ってきたのですよ？ 官軍に囲まれた状況で賊にそこまで言わせることができる人物で、さらに本名が張角。これで件の人物が「人を集めた張角」ではないというのであれば、生け捕りにして私のところ

で使わせてもらいたいのですが、問題はありませんか？』なんて自信満々に言ったらしいのよね。

流石に州牧である曹孟徳にそこまで言われたら皇甫嵩將軍とて妄言と斬り捨てるわけにはいかなかったみたい。

それはそうでしょうよ。

情報提供者の立場もさることながら、本当に張角が二人いた場合、ここで曹孟徳がいうところの「漢に反逆した張角」を討ち取ったとしても、そもそもの問題である「人を集めた張角」を逃したら片手落ちどころの話では済まないものね。

情報を知った上で見逃してしまった場合、皇甫嵩將軍はさつき私が言ったように「偽物の張角の首を挙げて喜んだ阿呆。悪ければ偽物の張角の首を本物と偽って提出した罪人」として縄をうたれることになる可能性だつてある。

なにしろ腐敗が蔓延るこのご時世、漢に対して反感を抱いている者は多い。

そうであるにも拘わらず彼らが武装決起しないのは、武器がないこともそうだけど、なにより人を集めることができないからに他ならない。

たとえばその辺の有力者が一〇〇〇人集めてことを起こしたところで、漢を糺すどころか県令や郡太守の兵に取り押さえられて終わってしまうわ。

そうならないようにするためには最低でも数万人を集める必要があるけど、そんなの簡単に集めることができるはずがない。

だから今まではどれだけ政や役人に不満があつても大規模な反乱にはなっていなかった。

それを覆したのが今回、大陸中から人を集めた張角だ。

人を集めた方法が、民の扇動や食料のばら撒きなどではなく、単純な「歌」という点も見逃せない。

何故なら彼女が生きて歌う限り、彼女の支持者はその数を増やすことができるのだから。

故に漢としては【漢に反逆した張角】よりも【人を集めた張角】こ

そ討伐したい存在となる。

ここまでではいい。

皇甫嵩將軍にしてみれば元々ここにいる賊は全滅させる予定だったのだから、その対象に旅芸人を含めることに否はなかっただろうし、諸侯だつて武功となる賞金首が増えることに文句をいうことはないわ。

私たちとしても、功績を独占した際に生じるやつかみやら何やらが軽減されると考えれば、悪くないとさえ言える。

気になる点は、曹孟徳の狙いが読めないところよね。

「曹孟徳、一体彼女は何を企んでいるのかしら？」

顔を合わせたこともないけれど、彼女を侮つてはいけない。

私の勘がそう言っている。

### 34話。黄巾の終わり④

「ねえ冥琳。曹孟徳がこの情報を現時点で皇甫嵩將軍に上げた理由はわかる？ 私だったら旅芸人たちの首を刎ねた後で公表すると思うんだけど？」

「そうすれば武功を独占できるでしょう？」

皇甫嵩將軍に恩を売るにしても、自分で首を獲ってからのほうが効果的だろうし。

「……思い当たる節はあるが、あくまで予想に過ぎんぞ？」

「それで構わないわ」

如何に冥琳の頭が良くても、肝心の曹孟徳に会ったことがないから確度が高い推察ではなくあやふやな予想になるのは仕方がない。

でも、今は少しでもとっかかりが欲しいのよね。

「恐らくだが、曹孟徳は“皇甫嵩將軍や我々も自分と同じ情報を持っている”と考えたんじゃないか？」

「……うん？」

「どういうこと？」

「彼女は皇甫嵩將軍にこう言ったのだろうか？ 『賊滅を謳われている私のところにまで降伏の使者が来た』と」

「確かにそう言ったらしいけどそれが……ああなるほど。賊から物凄く恐れられている自分のところに降伏の使者が来たくらいだから、皇甫嵩將軍を始めとした諸侯にも同じ使者が来たと考えたのね？」

「おそらくは、な」

「言われてみれば確かにその可能性はある。」

むしろ、曹孟徳の立場であればそう考えるのが自然かも。

「で、だ。他の諸侯も知っていると考えている曹孟徳にしてみれば、この情報は貴重な情報ではない。それでもあえて告げたのは、一応他の諸侯が同じ情報を持っているか否かの確認に加え“自分は抜け駆けするつもりはない”と意思表示をしたつもりなのではないか？」

「ん〜。なるほどねえ」

貴重な情報だと思っていないからこそ、か。

「ちなみにですけどお。皇甫嵩將軍はこの情報を知っていたんですかあ？」

「否よ。皇甫嵩將軍も曹孟徳に言われるまで旅芸人たちのことは知らなかったんだって」

「ほう？　皇甫嵩將軍の下には降伏の使者は行かなかつたのか？」

「いいえ。確かに降伏の使者は行ったらしいんだけど、彼女はこの期に及んで交渉に意味は無いと判断して話を聞かないまま処刑していたらしいのよ。袁紹も同じね」

「気持ち分かるわ。私のところに降伏の使者がきても同じように扱ったと思うし。」

「まあ、対等な相手を送ってきた正式な軍使ならまだしも、普通に考えれば追い詰められた賊の命乞いだからな。話を聞く価値などないし、交渉の余地など尚更ない。そう考えるのが自然だろう」

「それどころか、下手に話をしてしまうと洛陽の人たちに難癖付けられちゃいますからねえ」

「そういうこと」

「賊徒の殲滅に目途が付いた今だからこそ、警戒すべきは洛陽の老害共ってね。」

「ふむ。ならば曹孟徳は〝勘違いで貴重な情報を放出した間抜け〟ということになるのかのう？」

「それは……どうかしら？」

「結果だけ見れば勘違いで情報を放出したとも言えますが、そもそも彼女の狙いは皇甫嵩將軍に対して自分が抜け駆けをしないことや、自分が得た情報を共有しようとする姿勢を見せることにあります。それに成功している以上、間抜けには当たらないかと」

「そうですねえ。少なくとも欲しいモノは得られていますから」

「……欲しいモノ？　ああ風評、か」

「はい。今回の件で曹孟徳は良い風評と悪い風評。その両方を得ています」

「良い風評は〝己で武功を得ることよりも、諸侯と情報を共有して足並みを揃えることを優先させた律義者〟って感じかしら？」

「そうだな。皇甫嵩將軍からすれば、孫家や袁家のために武功を稼ごうとしている雪蓮よりも、軍全体のことを考えているように見える曹孟徳の方が評価は高いだろう」  
「そりゃね」

別に袁家のためには動いていないけど、傍から見ればそう見えるもんね。納得しかないわ。

「うむ。兵を率いる立場で考えれば曹孟徳の評価は高くなるじやろうな。で、悪い風評は？」

「先ほど祭殿が言いましたね。勘違いで貴重な情報を流した間抜けです」

「……それをどう使うんじや？」

そこなのよね。群雄としてはどうかと思うけど。

「え〜とですねえ。武官である雪蓮様や祭様には分かりにくいかもしれませんが。自分のことを間抜けと勘違いしている相手って、警戒している相手よりも簡単に転がせるんですよ〜」

「……なるほどねえ」

軽く見られるってことはそれだけ足を掬いやすくなるってことだもんね。

極端な話、私が袁術や張勳相手にやってることも似たようなもんだし。

曹孟徳はそれをもっと深いところまでやっている。

それができる相手ってことか。

「もう一つ大事なことがある。それは、曹孟徳には武功よりも風評を優先する余裕があるということだ」

「羨ましい話ね」

流石は州牧様ってところかしら。

こつちなんて武功が欲しくてたまらないっていうのに。

「……侮れんのお」

何を今更。

「祭。相手は賊滅と謳われる程に賊を殲滅した武功の持ち主で在り、僅か数年で陳留の規模を拡大させた実績を持つ州牧様よ？ 袁家

の被官でしかない私たちが侮って良い相手じゃないわ」

「むっ」

「確かに。とは言え、今までの話はあくまで予想であって、実際に曹孟徳がそこまで考えているかどうかはわからんぞ」

「必要以上に考えすぎているかもって？ でも冥琳も穩も、自分が考えすぎているとは思っていないんでしよう？」

「ああ」

「はい」

「二人が警戒する必要があると考えているなら警戒すべきよ。そもそも今の私たちは曹孟徳どころか袁家の連中にだって隙を見せられない弱小勢力。どれだけ警戒しても“過ぎる”なんてことはないでしょう？」

「どれだけ警戒しても“過ぎる”ことはない、か。確かにそうじゃな」  
「そうよ。その上で言わせてもらうけど、今回武功の独占に失敗した時点で、私たちは一度失敗したも同然なの。これ以上の失敗は許されない。違う？」

「……そうだな」

「ですねぇ」

「うむ」

「私たちに利用価値がないと思われたら、人質である蓮華孫権と小蓮孫尚香が殺されることになる。」

「もちろんその場合は袁術や張勳に復讐するけれども、そこで孫家は終わってしまうわ。」

「でもね。こんなところで母様から受け継いだ孫家を潰すわけにはいかないのよ。」

「だからこそ、今回は確実に獲れる首を獲る。その後はできるだけ私たちに損害が出ないよう、他の陣営に頑張ってもらいましょう」

正直に言えば、監視兼おこぼれ目当てで張り付けられている袁家の連中なんてどうなっても良いんだけど、連中に損害を出しすぎると評価が落ちるかもしれないからね。

こんなところで連中がこちらに干渉する口実を与えるつもりはな

いわ。

「うむ。ここに集まっている諸侯は元々武功を欲している連中だ。一々工作せずとも勝手に前に出てくれるだろうが、もう一手打っておくか」

「ですなえ。より確実に頑張つて貰うよう手配しましょうか」

「有象無象の諸侯はそれで良いとして、曹孟徳はどうする？ 共闘の使者を出すか？」

「うーん」

下手に情報を渡すと武功を全部持つていかれそうだし、放置しても武功を持つていかれそうなのよね。

……どっちに転んでも駄目な場合つてどうしたらいいのかしら？

「共闘するかどうかは別としても、情報の共有はした方が良いと思うぞ」

「……その心は？」

「向こうが我々でさえ持つていない情報を持つている可能性があるだろう？」

「そつちの可能性があつたか」

情報を持つているのは私たちだけじゃないものね。

「少なくとも旅芸人やその周囲の情報を持つているのは確かです」

「うわーそれは危険だわ」

向こうが持つ情報によっては本当に全部持つていかれるかもしれない。

それを防ぐために情報を共有するつてことか。

「あと、今のうちに曹孟徳の為人を確認しておきたいというのもある」  
「陣営にいる人材の確認もしたいですねえ」

「ふむ。彼を知り己を知れば百戦危うからず、とも言うからの」

敵になるにせよ味方にするにせよ為人を知つておくのは大事よね。

「わかつたわ。使者は誰がいいかしら？ 私が行く？」

「いや、穏に行かせよう。州牧相手と考えれば雪連が行くべきだろう。だが、明後日に備えての支度もあるし、なによりお前が動けば袁家を刺激することになる。同じ理由で私や祭も駄目だ」



「そっか。……穩、貴女の判断でこっちの持つ情報は全部出してもいいから、一つでも多く向こうがもつ情報を引き出してきて。頼んだわよ」

「お任せ下さい〜」

向こうが穩の見せかけの緩さに油断してくれる程度の相手であればいいんだけど……さすがにそこまで甘い相手ではないわよね。

ーこのときの私たちはまだ知らなかった。

曹孟徳が得ていた情報の量と質が私たちが持つそれをはるかに凌駕していたことを。

私たちが皇甫嵩將軍から知らされていたモノが、彼女が報告した中のほんの一握りの情報でしかなかったことを。

このとき曹孟徳の下に穩を派遣していなければ、武功を得るところの話ではなかったということ。

自分たちが本当の意味で瀬戸際にいたことを、このときの私たちは自覚さえしていなかったのだ。

### 35話。黄巾の終わり⑤

「さて、皇甫嵩將軍はもちろんのこと、貴方が警戒していた孫策でさえも大した情報を持っていなかったわけだけでも……これについて何か申し開きはあるかしら？」

申し開き、ねえ。

「特にないな」

「はあ!？」

ぶった切るような俺の返答を聞いてトサカにきたのか『ひゃっはーこれから弾劾裁判だ!』と言わんばかりの笑みを浮かべていた文若が変な叫び声をあげた。

文若の気持ちはわからんでもない。

傍から見たら開き直ったようにしか見えんからな。せめて反省の色は見せろ”と思うのも理解できる。

しかしながら、俺に弁明しなければならぬようなことは何一つとして存在していない。

当然、原告兼裁判官である曹孟徳もそのことは理解している。

結局、先程の言葉は当てつけというか、八つ当たりに近いモノではないのだ。

普段の曹操であればこのような無駄なことはしないのだが、さしもの彼女であっても今回ばかりはガス抜きが必要になったのだろう。

まあ、如何に優秀でも彼女はまだ17か18くらいの少女でしかない。

感情が先走ることだってあるだろうよ。

「……そこまで堂々とされては何も言えなくなるわね」

「そうか? もう少しなら付き合うぞ?」

「はあ……」

これはあれかね? 自分が疲れていることと、大人げなかったことを自覚したか?

俺としては、ヴァリ様が突発的に叫ぶようなモノだと思えば困惑や怒りよりも『普段から自分を律している彼女も年頃の少女なんだ

なあ』と安堵する気持ちが湧いてくるくらいだから問題はないのだが。

あとはアレだ、戦場ということに夜に好き勝手出来ないことでストレスが溜まっていると見た。

ここ最近の敵に備える関係上、武官は朝だろうが夜だろうが気を抜くことができないからな。

実際、もし奇襲を受けた際に夏侯惇や夏侯淵の気が抜けていたり、立てないくらい疲れていたら話にならんし。

また『奇襲を受けたとき、裸だったので陣頭に立てませんでした』なんてことになったら、いい嗤い者になってしまう。

ついでに『大将が夜な夜な幹部といかがわしいことをしている』となると部下への示しが見つからないので、ここ最近自粛しているそう。その分ストレスも溜まっているのだろう。

それらの鬱憤を晴らすためなら、日頃から特別扱いされている割に大した仕事もしていないことを自覚している身としては、多少は我慢してやろうと思うのだ。

あくまで“多少”だが。

俺の我慢の限界値に関してはさて置くとして。

本題は曹操が先ほど述べた通り、皇甫嵩や孫策が黄巾賊の情報を持っていないかったことに対するあれこれである。

「真面目な話、俺が連中を過大に評価していたのは確かだ。しかし我々には事前に想定していた通りの、否、想定以上の収穫があった。ならば特に問題があるわけではあるまい？」

「まあ、それはそうなんだけどね」

「これを曹孟徳に告げることは、孔子に論語、孫子に兵法を説くようなものであることは自覚している。だが、敢えて言おう。逃がした魚の大きさに拘泥しても意味はないと」

論ずるべきなのは“何故逃がしたのか”であり“今後同じようなことがあったときどうすれば良いのか”を論ずるべきなのだ。

よって俺の主張に間違いがないことは確定的に明らかである。

文若からは『お前がいうな』みたいな視線を感じるが、きつと気の

せいだろう。

「言っていることは間違っていないわ。私もそうあるべきだと思っ  
ている。でも……」

「でも?」

「なんだか釈然としないのよ。敢えて言葉にするのであれば『損をし  
た気分』とでも言えばいいのかしら?」

「ああ」

これまた気持ちはわからんでもない。

流石に今回は予想外が重なり過ぎたからな。

今回の一件について細かく話を聞いたところ、事前に予想していた  
通り皇甫嵩將軍の下には——孫策の下には行っていないが——  
降伏の使者が訪れていたそう。

しかし皇甫嵩將軍は『賊徒と話すことはない』と言って問答無用で  
処刑したらしい。

賊徒と交渉しない。確かに官軍の將としては正しいのだろう。

しかし、だ。それならそれで、使者としてきた賊を捕えて情報を搾  
り取ればいいじゃないか。

それがなんで問答無用で処刑することになるのか。これがわから  
ない。

いや、まあ、名家の連中が賊の話を聞くかどうかなんて考えるまで  
もないと言われたらその通りなんだが。

結果として皇甫嵩將軍は賊の情報を何も持っていなかったらしい。

情報がなくても播り潰せるだけの戦力差があったが故の油断慢心  
だな。

もちろん細かい情報があった方が味方の被害は少なくなるという  
ことは理解していたが、そこまで重要視するような情報があるとは考  
えていなかったそう。

だがしかし。降伏の使者はなににより重要な情報を持っていた。

それが「人を集めた張角」に関する情報である。

曹操からの情報提供がなければ“自分が本当に討伐しなければな  
らない相手を見逃していた可能性が高かった”ということを自覚し

た皇甫嵩將軍は、己の視野の狭さを悔いると共に貴重な情報を提供してくれた曹操を高く評価した。

これだけで当初の目的は果たされたと言えるだろう。

ちなみに、ナニカやらかすだろうと見ていた孫策はナニをしていたかと言えば、なんと彼女は【漢に反逆した張角】の傍に人を忍ばせていたような。

その副次効果として、砦の大まかな見取り図や兵の配置情報などを得ていたらしい。

当初向こうはそれらの情報と我々が持つ情報を交換しようとしていたらしいのだが……向こうからやってきた陸遜とやらは、自分たちが持つ情報と曹操が持つ情報の間にある差を知って愕然としたような。

孫家的に極めて貴重にして極めて重要な情報を携えて来たにも拘わらず、こちらがそれ以上の情報を持っていたため情報を交換するどころか一方的に施しを受けることになった彼女は、顔面を蒼白にしてお帰りになった（許褚談）とのこと。

“ そうな ” とか ” とのこと ” を繰り返していることからわかるように、俺はこの会談に参加していない。

『わざわざ警戒している相手に隠し玉を見せる必要はない』という曹操の一言によって、その場に居合わせることはできなかったのだ。

隠し玉という評価はどうかと思わないでもないが、使者としてきた陸遜を見た典韋曰く “ 色白でお胸がすごく大きな人でした ” とのことだったので、その場に居合わせなくて良かったと心からそう思っている次第である。

息子に優しくなさそうな女こと陸遜が顔面蒼白となった理由も見当がつく。

孫策陣営は優秀な密偵を通じて多大な情報——曹操が得た情報に比べれば少ないものであったが皇甫嵩將軍や他の諸侯と比べれば格別といえるだけの情報——を得ていたし、なによりその優秀な密偵を張角の命を狙える場所に潜ませることに成功している。

これによつて相当なイレギュラーが発生しない限り、今回の戦に於

ける武功の第一功は間違いなく孫策が搔つ攫っていたであろう。

だが、現実には甘くなかった。

今回はその“相当なイレギュラー”が発生していたのだ。

それも【標的が違う】という特大のイレギュラーである。

どれだけ凄腕で在ろうと、所詮は数日前に潜入した密偵でしかない。

そんな密偵が、標的から目を離さないようにしつつコソコソと探った程度で得られる情報と、最初から向こうに籠っている連中——それも幹部——が推しを救うために自発的に話してくれる情報では、その量にも質にも比べ物にならないほどの差があった。

そのせいも孫策は一人を集めた張角】の存在を知らなかったし、砦の明確な見取り図を持っていないため物資の貯蔵施設の場所や貯蔵量、さらには抜け道の存在も知らなかった。

もしこちらが黙っていたら【漢に反逆した張角】はまだしも【一人を集めた張角】には逃げられていたこと請け合いです。

これだけでも問題だが、何より問題視されるのが大まかであっても内部の情報を知りながら武功を独占するために秘匿していたという事実だろう。

張角の傍らに暗殺者を潜ませていたことも含め、皇甫嵩將軍にとって面白いモノではない。

これらの事実が明るみに出た（そうしなければ張角を討ち取っても孫策の武功が認められない可能性があった）ため、孫策は戦闘前から評価を落とすこととなっている。

この分では【漢に反逆した張角】を討ち取ってようやくプラスマイナスゼロといったところだろうか。

命懸けで働いても功績が認められないなんて、悪夢としか形容できない状況である。

これでは顔色の一つも悪くなるうというものだ。

ご愁傷様。しかし悪いのは使者の陸遜ではない。

総大将である皇甫嵩將軍に対しても大事な情報を隠していた君の主君が悪いのだよ。

そんなこんながあつて、現在。

皇甫嵩も孫策も、もちろんその他の諸侯も大した情報を持っていなかったことを知った曹操が「今回は必要以上に情報を吐き出しすぎたんじゃないか？」とか「もつと上手く隠していたら三姉妹も利用できていたのでは？」などと考えてしまい、なんか損した感じになつたのだろう。その結果こんな茶番が催されたという流れである。

一言で纏めると、あれだ。“策士の悪癖”が再発したのだ。でもなあ。

「気持ちわかる。だが、それらに関しては初めから”今回は武功よりも風評を得る”と決めていたではないか。ならば損した気分にするより、孫策らがやらかしたおかげで相対的に曹操殿の評価が高まつたことを喜ぶべきだろうよ」

その方が建設的だし、健康的だと思う。いや、まじで。

### 36話。黄巾の終わり⑥

「はあ……情報を独占しているつもりになっていたせいで信用を失った阿呆と、必要以上に情報を曝け出したせいで武功を得る機会を逸した阿呆。どっちがマシなのかしらね？」

「どちらがマシかは知らんが、今回の勝者がどちらかと問われたら、答えは決まっている。武功を得る機会と引き換えに信用を得た曹孟徳だ」

比較対象にもならん。信用は金でも武功でも買えないのだからして。

「貴方はまたそうやって……まあいいでしょう。今回は特別にその口車に乗ってあげるわ」

「口車とは心外だな」

本心からの言葉なんだが。

「いいから。次よ、次」

さつさと話を進めろと？ 振って来たのはそつちなのに、なんて言い草だ。

まあ話題を変えろというのには賛成だが。

「次とは、二日後の攻勢に備えてのことで相違ないか？」

「そうよ。確かに私たちは風評を得たわ。事前に予想していたものよりも格段に良いモノと悪いモノを、ね。だからこそ、絶対にやらなければならぬことがある」

予定通りと言えば予定通り。だが放出した情報が貴重なモノであればあるほど、評価の高低差が大きくなるのも道理。

それを踏まえた上で考えれば、わざわざ風評の種類を強調してきた曹操の思惑も見えてくるというもの。

彼女が懸念しているのは“悪い風評”であろう。

何事も過ぎたるは猶及ばざるが如し。

素直で律儀とは思われても良いが、阿呆過ぎるといふ風評は頂けない。で、現時点においてそれを払拭する方法はただ一つ。



「それなりの武功で以て悪い風評を緩和する、か」

「ええ。その通り。必要でしょう?」

「まあな」

悪評を拭う方法。

それが〃ばら撒いた情報とつり合いが取れる程度の武功を得ること〃である。

しかし武功を取り過ぎるのもよろしくない。

そんなわけで程よい武功を得ることが肝要なわけで。

「ならば答えなさい。我々が狙うべき相手は誰?」

こうして〃狙い〃を明確にするのが曹操のいう本題なのだろう。

この問いに対する答えはすでに決まっている。

言うなればこれはただの再確認作業。

いや、部下たちに聞かせる為のモノか。

ならばこちらも乗らねば無作法というもの。

「無論【漢に反逆した張角】の身内、だな」

張角の身内。即ち地公將軍こと張宝か、人公將軍こと張梁である。

「そんなところでしようね。三姉妹の情報と砦内部の情報と比べれば軽いかもしれないけれど」

「だからこそ皇甫嵩將軍も孫策も譲ってくれる」

「ええ。そうね。そういうわけだけど、皆もそれでいいかしら?」

もし張角の首を望めば不快感を抱かれることは避けられないだろう。

だが、三姉妹の存在が明らかになったことで、ただでさえ張角よりも一段低かった価値がさらに下落した【賊の方の張宝や張梁】であればその限りではない。

むしろ情報の対価として快く譲ってくれるだろうよ。

よって気にすべきは身内の反応。具体的には最初から第一功を狙わないことに対して配下から不満が出る可能性だったのだが、元々曹操の意思に反するつもりのない夏侯惇や夏侯淵はもちろんのこと、黄巾賊に苦しめられてきた農民出身の許褚と典韋。さらには黄巾賊に抗うために義勇軍を結成した李典・楽進・于禁も曹操が張角を狙わな

いことに対して不満を抱いている様子はない。

「皆に異論が無いようならこの方向で話を進めましょう。桂花？」

「はい！ 先に皇甫嵩將軍に許可を貰ってきます！」

「ええ。諸侯に気取られないように、ね」

「お任せください！」

ここで三姉妹の方を狙わないのは、武功が大きくなるということもあるが、それ以上に貴重な情報の対価として我々から「人を集めた張角」を殺さないし、捕えもしない。我々の真名にかけて誓おう」という言葉を引き出した賊、現在は虹の橋の向こうにある楽園にて推しが来るのを心待ちにしている男との約束があるからだ。

この約束があるため、我々は三姉妹を狙わないのである。

では、我々から目こぼしされた彼女らに生き延びる目があるだろうか？

答えは否。件の三姉妹が生き延びる可能性は皆無である。

何故か？ 我々が狙わないだけで、皇甫嵩將軍率いる官軍や諸侯が率いる軍勢がその首を狙うからだ。

なにやら虹の向こうにいる男が「約束が違う！」とか叫んでいる気がするが、気のせいだろう。

我々は約束を破つてはいないのだから。

彼の推しを狙わないと約束したのは、あくまで“我々”のみ。

“我々”とは曹孟徳と彼女が率いる☒州勢のことであって、他の連中に関して約束した覚えはない。

それ以前の常識として、一州牧に過ぎない曹孟徳には自身の指揮下でない官軍はもちろんのこと、袁家を初めとした他の諸侯動きを撃つことができるはずもないのだから、これは当然のことなのである。

尤も、男を強制的に虹の橋の向こう側へ送った後に不安げな表情を浮かべた文若から「真名に掛けて誓ったからこそ向こうも素直に情報を吐いたんでしょうけど、あんな約束して良かったの？」と聞かれた際に、上記のことをそのまま伝えた上で「儒家の嘘は方便、武人の嘘は武略。漢に反逆して散々民を苦しめた賊の命乞いに比べれば多少の曲解など可愛いモノではないか」と嘯いたらドン引きされたので、

初めから苦笑いをしていた曹操以外の人間は約束の内容を勘違いをしていたようだが、こういうのは勘違いした方が悪いのである。

そもそも黄巾の連中は潁川や南陽はもとより、州でも散々略奪を繰り返していた賊徒だ。

我々が治めていた陳留では大した被害は出ていないが、他は相当荒らされている。

州に限った話でも前任の州刺史が連中に殺されている。

州を荒らした連中とここにいる連中は関係がない！　　というかもしれないが、そんなことはない。

ここにいる連中とて略奪とは無関係ではないのだ。

なにせここには十万単位の賊が生きていけるだけの物資があるのだから。

連中はそれだけの物資をどこで得たのだろうか？

全て自分たちで畑を耕したのか？

全て自分たちで山にいる獣を狩ったのか？

どちらも違う。多少は自分たちで工面した部分もあるだろうが、この砦にある物資の大部分は連中がそこらにある邑や町から略奪したもののものだ。

この時点で彼らは同情すべき民ではなく、討伐すべき賊となった。賊徒死すべし慈悲はない。我々にとつては最早常識である。

役人が不正をしなければ真つ当に生きていられたかもしれない？

ああ、その所為で困窮したのは事実だろう。

不正をする役人がいなければ連中が賊に墮ちることもなかった？

それも認めよう。

だが、それを認めることと、その辺にある邑や町に暮らす民から略奪をすることを認めることは同義ではない。

力のない民から略奪をした時点で、同情の余地など地平の彼方に消えたのだ。

それなのに、民からの略奪で食いつないできた連中が、自分たちが追い詰められた途端に命乞い？

それも責任者である連中をつかまえて『あの娘たちは俺たちを集め

ただけだ。略奪とは関係ない』などと抜かしよる。寝ぼけるな。

もしも前世、ポリドロ家の領地にこの手合いの連中がきていたら、俺は領地を襲撃した輩だけではなく、その大元まで遡って責任を負わせるために動いていただろう。

この場合の大元とは、もちろん「人を集めた張角」のことだ。

責任の取らせ方？ もちろんその命を以て償わせる以外にない。

万が一許すにしても、相応の賠償金を支払わせただろう。

それこそマインツ枢機卿がヴァリ様に多額の賠償金を支払ったように、な。

迷惑をかけたら償う。

それが筋というものではないか。

しかし連中はなにも支払うつもりがなかった。

ただ命乞いをしに来ただけ。

ありえん。

確かに諸侯に対して彼らを殲滅するよう命じた朝廷の力は弱まっている。

十常侍や宦官閥の専横、名家の不正、軍部の墮落。

そのどれもが、真つ当な知性を有した人間から国家への忠誠心を失わせるのに十分すぎるものだ。

前世に於いてアナスタシア第一王女やカタリナ女王がマキシーン皇帝に忠義を誓っていなかったように、諸侯も皇帝に対して無条件の忠義を誓っているとは言い難い状況であることも認めよう。

しかし、しかしだ。

皇帝は皇帝である。

賊の命乞いと皇帝の命令を並べた場合、後者が優先されるのが当然ではないか。

そうである以上、連中はその「当然」を覆すだけの手土産なりなんなりを提示するべきではなかったか。

たとえば金。たとえば資財。たとえば労働力。

そういったモノを用意せず、自らの責任も果たそうともせず、ただ

こちらにリスクを背負わせようとする連中を地獄に叩き落とすことに何を憚ることがあろうか。

故に俺は連中に対してこう告げるのだ。

「賊徒よ。死にたまへ」

せいぜい惨たらしく、せいぜい後悔して死んでくれ。と。

二日後。冀州鉅鹿郡に集った黄巾賊は皇甫嵩率いる官軍によって殲滅された。

【漢に反逆した張角】を討ち取ったのは袁術の代理として参戦していた孫策。

その弟である地公將軍・張宝を討ち取ったのは冀州牧となることが内定していた袁家の袁紹。

人公將軍・張梁を討ち取ったのは大宦官の孫にして兗州牧曹操。

そして【人を集めた張角】とその妹を討ち取ったのは、皇甫嵩將軍への援軍として参戦していた董卓軍の武將、呂布と張遼であった。

漢に反逆した張角と人を集めた張角。

二つの旗頭を失った黄巾賊は一気にその勢いを失い、各地で鎮圧されていくことになる。

こうして漢を揺るがした黄巾の乱はその幕を下ろした。

しかして“これにて一件落着”と安堵する者は多くない。

燎原の火は未だ消えず。

この農民反乱が始まりの終わりに過ぎないことを知る多くの者たちは、遠くない日に起こるであろう次なる乱に備えて力を蓄えるのであった。

### 37話。動乱の気配

張角率いる黄巾賊の主力が潰えたからと言って、腐りきった漢という国が正常な状態に戻る……ことはなく。

むしろ民が蜂起することになった最大の元凶である腐れ役人どもが黄巾の乱によって失った財やらなにやらを補填すべく不正行為に励むようになったせいで、今では大陸中から民や土豪たちの怨嗟の声が聞こえるようになっていた。

そのため最近では、黄巾の残党や烏桓の協力を得た張純なる人物が大規模な反乱を起こして幽州や青州を中心に暴れまわったり、遠く離れた益州でも馬相なる人物が暴れまわったり、冀州の北部で張燕なる賊が大規模な集団を率いて暴れまわったりしているそう。

これだけでも問題なのだが、一番の問題は上記のように各地で混乱が続く中であっても漢の中心たる洛陽において多少の余裕ができた軍部とその伸張を抑えたい役人——正確には宦官——たちの間で行われている権力争いが留まるどころか激化しているところだろう。

もはやこの国が救えないところまできているという何よりの証だと思ふ。

（こんなときくらい争うのを止めればいいだろうに。『平和とは戦争と戦争の間に設けられた準備期間に過ぎない』とは誰が言った言葉だったか）

アニメで見たか本で読んだかは覚えていないが、じつに的を射た言葉である。

そんな各地で発生している混乱と争いについてはさて置くとして。実のところ我々曹操陣営にも、すぐにでも解決しなくてはならない問題が発生していた。

と言っても別に命に関わるような状況というわけでもないのだが。ああいや、このままだと死ぬな。主に曹操と文若と夏侯淵と俺が。

「司馬朗。また桂花が洛陽に潜ませている者から連絡が来たわ……」

「またか。いい加減にして欲しいのだが」

「それだけ洛陽が荒れているということよ」

「……それだけではあるまい?」

「……まあ、そうね。私としても少しやり過ぎだと思わないでもないけれど」

「少し? 本気でそう思っているのか?」

目の前に積まれている書簡の山を指す。

一向に減ることのないこの山こそ、現在我々を圧迫している唯一にして最大の要因である。

「……ごめんなさい」

「いや、曹操殿が悪いわけではない……いや、曹操殿も悪いな、これは」  
「……ええ。私もまさかこんなことになるとは思わなかったのよ」

「反省はきちんとしてもらう。で、もう一人の元凶は?」

「執務室で書簡に埋もれているわ」

「そうか。そうだろうな。とりあえず曹操殿から命令を改めるよう言ってくれ。俺からでは角が立つだろうからな」

「……はあ。過ぎたるは猶及ばざるが如しとはよく言ったものね」

「ああ」

もうそれしかいえん。

もしこの積り積もった書簡の山に書かれているのが領内の政に関するものであったのならば、俺とて文句は言わない。

むしろ一枚一枚に領民の命が懸かっていると思えばこそ、粛々と作業を進めるだろう。

だが違うのだ。この山となっている書簡に書かれているのは、その大半が取るに足らない噂話なのだ。

こんなものに目を通していたら時間がいくらあっても足りない。しかしこの中に重大な情報が紛れている可能性も皆無ではない。

故に精査しなくてはならないのだ。

たとえば書簡に記されている内容の大半が『隣の奥さんが浮気している』だの『子供がお漏らしした』だのと言った、我々にとって全く意味のない情報だったとしても。

(必要なのはわかる。だが面倒なことには変わりはない。全部文若に回したいところだが、それで重要な情報を見逃したり、確認が遅れては

意味がない)

我々が賽の河原で石を積むかのような不毛な作業をすることになった元凶が曹操と文若であることに異論を挟む余地はない。ただしその大本は、先に挙げたように洛陽での権力闘争が激化していることにある。

その争いの中心となっているのは、大將軍として軍部の利益代表者となっている何進と、役人の利益代表者である宦官こと十常侍だ。

また両者の争いに加え、名家閥も清流派と濁流派に分かれて争っているのです、今は洛陽に居る権力者の大半が争いの渦中にあると言っても過言ではない。

ちなみに濁流派とは十常侍に味方して利益を得ている名家の連中のことを指す言葉で、清流派は宦官と敵対している連中を指す言葉である。

もちろん、清流派を名乗っているからと言って彼らが品行方正な人物の集まりではないことを明記しておく。

ついでにこの清流派は成り上がりの何進のことが嫌いなので、軍部に対して協力することは殆どない。

では絶対権力者たる皇帝に忠義を誓っているのかというと、それもない。

むしろ『皇帝を非難するのが自分たちの仕事だ!』と言わんばかりに、なにか災害が発生する度に皇帝を非難しているくらいだ。

その上で各勢力に自分たちを取り立てるよう声を挙げているのである。

つまるところ清流派を自称する連中とは『宦官も嫌。成り上がりも嫌。皇帝も嫌。でも自分たちを優遇しないのは許さない』という我儘を真顔で主張する連中なのである。

そりゃ追いやられるわ。

そんな清流を自称する誰にとってもありがたいたくない負け犬どもはさておくとして。

現状『州牧として州の安定化を優先する』という大義名分を掲げて洛陽と一定の距離を置くことに成功している曹操だが、元々隙を見



せればどんな流れ弾が飛んでくるかわからないというのが漢という国だ。

そのため曹操は、洛陽にいる我が母から送られてくる情報や、文若が派遣している者たちから得られる情報の精査に集中せざるを得ない状況である。

救いがあるとするれば、曹操も宦官閥の一員ではあるものの彼女の祖父である曹騰が十常侍とは違う派閥であったことや、何より曹操自身が洛陽で十常侍と敵対していたため、今のところ何進からも名家閥からも敵視されていないという点だろうか。

十常侍に関しては……どうだろう。執念深さに定評のある連中なので内心では敵視しているのだろうが、ここで宦官閥を割ることの愚を犯すわけにはいかないと判断して、敢えて放置しているものと思われる。

この、軍部からも名家からも宦官からも明確に敵視されていないという奇跡のバランスを保つためにも情報が必要不可欠なのは間違いない。

だからこそ、というべきか。ここで曹操と文若はミスを犯してしまった。

なんと曹操は文若に『彼らが獲た情報が嘘かどうかを判断するのはこつちでやるから、どんな細かい情報でも送るよう指示を出しなさい』と指示を出してしまったのだ。

その指示を受けた文若は曹操を諫めるどころか『我が神の仰せの通り！』と言わんばかりに承諾。

それどころか勢いもそのまま部下に『どんなつまらない情報でもでも漏らさず持つてきなさい！』と命じてしまった。

その結果、名門中の名門である荀家の現当主様から嚴命を受けた部下たちは本当に細かい情報——それこそ主婦が井戸端でしている四方山話——まで送ってくるようになったのである。

で、当然のことながら、送られてきた情報は誰かが目を通さなくては意味がない。

しかもそれは誰でもいいというわけではなく、情報の正否や重要性

を理解し、判別出来る人間が見る必要がある。

しかし、その判断ができる人材は多くない。

今の曹操陣営であれば、文若と夏侯淵。あとは俺と曹操の四人くらいしかない。

そう。我々は、六〇万を超える人口がいると言われていて洛陽にて日常的に行われている噂話レベルの情報を、たった四人で精査しなくてはならなくなってしまったのである。

当然、他の仕事をしながら、だ。

仕事をしている横で積み重なる書簡の束、束、束。

こんなの処理できるわけがないだろうが。

ちなみに我が実家である司馬家は、我が母と妹がフィルターとなつて必要と思われる情報を吟味して送ってくれているので、このようなことにはなっていない。

ただ、曹操としては、その「司馬家のフィルター」がかかっている情報が欲しかったのだろう。

そのための荀家。その為の文若。

それは理解できる。しかし彼女の判断は余りにも拙速だったと言わざるを得ない。

なにしろこの件で苦しんでいるのは我々だけではないのだ。

一部の幹部だけでなく、一般の文官たちもこの影響を受けているのだ。それも派閥や職務を問わず、ほぼ全員が。

彼らが何をしているのかというと、洛陽から送られてきた文章を時系列順に並べ替えたり、誰が見ても分かるよう（曹操が見ても不快に思わぬよう）書き直していたり、荀家にとって有益と思われる情報を俺や夏侯淵に見せないよう隠したりと、こまごまとした作業を行っているのである。

当然それをする為には送られてきた書簡の中身を確認しなくてはならないわけで。

この作業を行うため最近文官衆はほぼ毎日が徹夜状態。

俺とて普通に朝を迎えたのは何日前になるか覚えていない程だからな。

あまりの酷さに曹操と文若の顔に泥を塗るような意見具申をしたわけだが、納得してもらえて何よりである。

ただ、これだけではどうにも腹の虫が収まらない。

しかし、主君が反省して方針を翻すと口にした以上、直接的に非難するのはよろしくない。

(さて、どうしたものか)

どうにかして皮肉を交えたクレームを入れようと考えた俺の脳裏に浮かんだのは、前の前の文学青年だったときに目にしていたとある漢文。それも中国文学に名を遺す偉人・孟浩然が残した詩であった。

『春眠曉を覚えぬ。 処処啼鳥を聞く。 夜来風雨の声。 花落つること知る多少』

有名な詩である。

歴史で言えばあと四〇〇〜五〇〇年後くらいに詠まれた詩で、五言絶句の見本として国語の教科書にも載るくらい有名な詩である。

解釈としては「春眠曉を覚えぬ」を『春はぐつすり寝てしまうので曉（夜明け）を知ることができない』という、寝坊的な意味。

次の「処処啼鳥を聞く」は、これは読んで字の如く『周囲から鳥の鳴き声が聞こえる』という、春の陽気を表すものとして。

【夜来風雨の声】は『昨晩は風や雨の音がしていたなあ』と回想するものであり、最後の【花落つること知る多少】と合わせることで『夜の間にどれほどの花が散ったのだろうか』と散った花を想うという、本来は二トが春の陽気を詠っている詩なのだが、後年開元の治と謳われた唐の極盛期のような治世と、世紀末真つ盛りの漢、それも書簡に殺されそうになっている執務室の中では受け取り方が全然違う。

「……ふむ、中々どうして。些か以上に皮肉と外連味が効きすぎているように感じるけれど、それを差し引いても素晴らしいとしか表現できないほど完成度の高い詩ね。惜しむらくは耳にした時と場所かしら。こんな書簡に埋もれた執務室ではなく、もう少し余裕のある時にもっと風情のある場所で聞きたかったわ」

「そう言われてもな」

皮肉や外連味がどうこう言うのだから、おそらく曹操は先の詩から俺の言わんとしていることを正しく認識したのだろう。

【春眠暁を覚えず】は『春の夜は短いというが、寝る間もなく仕事をしていたらいつの間にか朝になっていた』という、仕事をしていたらいつの間にか夜が明けていたという社畜の嘆き。

【処処啼鳥を聞く】は『そこかしこから声（噂）が聞こえる』という、ノイローゼ一歩手前の社畜の言葉。

【夜来風雨の声】は『夜にも風雨に混じって声（噂）が聞こえてくる』という、ノイローゼとなった社畜の言葉。

【花落つること知る多少】は『どれだけの人間が意識を落とすことになるのやら』という、現状に対する不満。

つまりは現状に対する不満をぶつけるつもりで言ったのだ。

だから曹操よ。真正面から堂々と非難されたことを理解しておきながら、嬉しそうに『貴方、そんな身なりで詩才もあったのね』みたいな顔をするのは止めて頂きたい。

かなり本気でそう思っているのだが、そんな俺の純情な感情は1/3も曹操に届いていないのは明白であった。

その証拠に。

「ふむ。普段のように事実をそのまま伝えられるのも悪くはないのだけれども、たまには今ののように詩的な形で報告をしてもらうのも悪くないかもしれないわね。この方式なら不平だろうと不満だろうと楽しんで聞ける自信があるし」

詩の出来が良ければそれを理由に意見を翻すこともできるって？

気持ちにはわからんでもないが。

「やめておけ」

本当にやめておけ。

「あら？ つまらない書簡を延々と捌くよりも良いと思わない？」

「思わん。そう思うなら、試しに夏侯惇殿にやってみてもらってはどうか？」

曹操に言われたら彼女は頑張って全ての事柄を詩にして報告してくるだろう。

しかし悲しいかな、彼女に詩の才はない。それこそ俺や妹並みになり。

必ず読まなければならぬ報告書が出来の悪い子供が詠んだレベルの詩で装飾されているとか、地獄だぞ。

なんの罰ゲームだ。

「……まあ、向き不向きはありそうね」

「わかってもらえてなによりだ」

本当にな。

「春蘭は無理でも秋蘭や桂花ならどうかしら？ ……いえ、彼女たちでも今の詩と比べられるのは酷というもの」

なんとなく諦めきれていないようだが、普通に困るから止めてほしい。

最終的に、このあと曹操から命令を変更するよう言われた文若は、死ぬほど悲しそうな顔をして配下に命令の変更を伝えたそう。

「おのれ、司馬伯達ッ！」

うん。司馬家ではなく荀家を名指しして貰ったにも拘わらず不甲斐無い結果に終わったことを恥じる気持ちは分かるし、一度下した命令を変更するのが恥ずかしいのも分かるが、それで俺を睨むのはどうかと思う。

これに関しては完全に被害者だぞ。俺は。

……一人で激昂する文若を宥めたり、情報を纏めたりしているうちに季節は巡り。

首都、洛陽にて漢全土を震撼させる事件が発生した。

「なんですって!?!」

一時の平和を謳歌する州にその報が届いたのは、秋の収穫が終わるかどうかという時期のことであった。